
遥かなる幸福の都

叶 響希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙かなる幸福の都

【Nコード】

N3378I

【作者名】

叶 響希

【あらすじ】

戦争が終わって数年が経過し、人々も国も復興しつつある。

そんな中、赤毛の占師ラティフィーネと少年ファルドは、「幸福の都」を目指して旅をしていた。

やがて流れ着いた都で、二人は青年ルカートに出逢う。

本当の「幸福の都」は存在するのか。

ほんのり恋愛風味。

プロローグ（前書き）

この作品は、2003年に某雑誌の付録（CD-ROM収録）として取り上げていただいたものを、加筆修正したものです。

プロローグ

町は、荒廃していた。

中心部から外れた場所に点在する家屋は崩れ、通りには扉を閉ざしている商店が目につく。

長く続いた戦争に人々は疲れ果て、生活からは秩序と名のつくものはおよそ消え失せていた。隣国との戦争には勝利したとはいえ、国はその機能を十分に保つほどの豊かさを失ってしまったのだ。戦火にまき込まれなかった場所ですら、人々の生活は荒んでいる。

地方の町や農村では泥棒や夜盗が当たり前に出没し、女子供を狙った人攫いが横行する。復興の兆しを見せている都でさえ、まだまだ人々の生活は平穏とはいえない。夕暮れが近づけば、誰もが家の戸をぴつたりと閉め、息を潜めて浅い眠りにつくのだ。

そんな時世に、少女がたった一人で旅をするというのは、ほとんど自殺行為に近い。いかにすっぽりとフードを被っているといっても、華奢な体格は隠せない。袖から見える労働知らずの白い指先は、少女が悪党にとって絶好の獲物であると知らしめているようなものである。

実際、彼女がこの小さな町まで無事に辿り着いたのは、普通に考えれば奇跡に近いものだった。わずか五日間のうちに、何度も危ない目に遭遇しかけたのは事実である。しかし彼女は、そういった危険を未然に予見し、数少ない善良な人々をうまく利用し、もとい、好意に縋ることで、危険を回避してきたのだ。

かといって、彼女にはどうしてもこの町を指さなくてはならなかった理由もない。彼女の目的は今のところ旅そのものであり、真実を言えば、彼女は家出中の身の上だった。

「この町も……冴えないところね」

不機嫌そうに呟く彼女は、先の戦争で没落した貴族　カスタン

ト伯爵家の五女で、名前をラティフィーネという。

町の片隅では、奴隷市が開かれていた。

戦争中、とくに活発に行われていたこの類の市は、数ヶ月前の終戦宣言と同時に禁止されたはずである。しかし、実際のところは役人の目を盗んで、あるいは役人やその上の高官に利益の一部を握らせることで口を封じ、都や町の片隅で行われていることが多い。

奴隷として売られるのは、人攫いの手に落ちた子供や、戦争で捕虜となった者がほとんどだった。そして両者の違いは、見た目の特徴ではつきりわかる。

この国の人間のほとんどを占める人種と、先の戦争で侵略に成功した国　海峡を隔てた向かい側の国の大部分を占めるタークル人とは、髪や目の色といった特徴が違う。この国の民の多くが金髪や赤毛で、比較的色彩の薄い目の色をしているのに対し、タークル人は石炭のような黒い髪と灰褐色の目を持つのが特徴だった。

奴隷は一人ずつ壇上に上げられ、値踏みされて、別の仲買人に買われるか、下働きを欲しがる都の豪商や貴族の館などに連れられていく。

そして今、粗末な壇上で震えているのは、まだ幼い少年だった。外見は、典型的なタークル人である。

「このガキは、簡単な計算ならできる。歳は今年で七つだ。従順で大人しいぞ」

奴隷商の濁声が、その場に集まった人買達の頭上に響き渡る。

「もう少し大きくなりゃ、肉体労働にも十分使える。タークル人は身体が丈夫だと重宝がられるからな。買うなら今のうちだ」

酒樽のような体格をした奴隷商は、そう言いながら床に鞭を降ろした。

ピシッと尖った音が響き、痩せた少年は、びくりと身体を震わせる。伸び過ぎた髪や擦り切れた服はみすばらしく汚れ、裸足の足首には枷がつけられて身動きもとれない。泣くことすらできずに、

幼い少年は虚ろな視線を群がる人垣へ向けている。

「その子、わたしが買っわ」

突如発せられたよく通る声は、かなり場違いな少女の声だった。

その場に居合わせた輩が、一斉に声の主へ注目する。

「嬢ちゃん、大人をからかつちゃいけないぜ。とつととお家に帰んな」

濁声の奴隷商がわざわざ猫なで声でそう言うと、どつと笑いが起きた。

しかし、少女は負けていない。人垣を潜り抜け、壇上にかかる。

彼女がすっぽりと頭から被っていたフードを外すと、周囲からは動揺の声が広がり、遅れて野卑なからかいや下品な嘲笑が湧き上がった。

まだ幼さの残る少女　ラティフィーネの容貌は、彼等の言葉を借りるなら「なかなかの上玉」というやつで、肩の下できつちり切りそろえられた赤毛や薄い蒼色の瞳は、彼女が生粋のこの国の人間であることを物語っている。

「代金を払えたら文句はないでしょ？」

周囲のざわめきに冷ややかな一瞥を投げつけ、彼女は鬱陶しそうに、少々乱れた髪を掻き上げた。細い金環の耳飾りが、赤毛の中で揺れる。

「これで足りる？　言っておくけど、ちゃんと本物よ。疑うのだったら、鑑定士を呼んでもいいわ」

首の後ろに手を入れ、彼女が衣服の下から手繰り寄せて取り出したのは、幾つもの宝石が連なった首飾りだった。これだけあれば、一般市民ならば丸三年は遊んで暮らせるほどの品だ。

一目で価値を見抜いた奴隷商に断る理由もなく、あたふたとそれを受け取ると、少女に命じられるまま、幼い少年の足枷を外した。

「そうえば、この近くに宿を知らない？　なるべく不潔じゃなくて、食事もあるところよ」

「ああ、それだったらひとつだけ……町外れの宿屋が」

「それって、この道を行けばいいの？」

「ふたつ目の角を曲がれば、すぐでさ。なんなら、ご案内致しまし
ようかい？」

態度を一転させた奴隷商の仰々しい言い種に、少女はわずかに眉
根を寄せる。

「結構よ。宿屋くらい、勝手に行くわ」

「そ、そうですね。しかしまあ、なんでまたお嬢さんのような方
がこんな奴隷のガキを？」

「それは……前に飼っていた犬に似ているからよ。ちょっとみすぼ
らしい感じなんてそっくり。何か文句ある？」

それには、文句なんてあるわけないわよね、という意味が滲んで
いる。

少女は立ち尽くすばかりの少年の手を取ると、啞然呆然としたま
まの人垣をすり抜け、宿があるという方向へ歩き出した。

完全に毒気を抜かれた人々が騒然となるのは、しばらく後のこと
である。

早足の少女に手を引かれて、少年は転ばないように必死でついて
いく。

少女は自分よりずっと幼い少年には目もくれず、しかし握った手
だけは離そうとしない。

「……あ……あのっ」

少年は、小声で声をかけた。

「ご主人様……」

その途端、ぴたりと少女の足が止まる。

少年は、びくりと肩を震わせた。

呼び方を間違ったのだろうか。ぶたれるだろうか。少年は恐る恐
る、自分を買った少女を見上げる。

「ラティフィーネ」

少女は、愛想もなくそう告げた。

「あんまり好きじゃないけど、それがわたしの名前よ。あんたはわたしに買われたんだから、わたしの言うことは聞かなくちゃいけないの、わかる？」

「……は、はい」

「だったら、ご主人様なんて変な呼び方しないで。あんたは今からわたしを名前で呼ぶの」

「ラテ……ラティ、フィーネ？」

「ラティでいいわ」

少年がうまく発音できないのを察すると、少女はあっさり妥協した。

「あの……ファルド、です。僕の、名前……。よ、よろしくお願いします」

少年のおずおずとした自己紹介に、少女は初めて小さな笑みを浮かべた。

「じゃあファルド、ついていらっしやい。今からあんたは身体を洗って食事をして、その伸び過ぎた髪を切るのよ。でなきゃ、わたしの助手としては使えないんだから」

「……助手？」

「わたし、占師なの。幸福の都を探す旅をしているのよ。旅を続けるには、助手は必要だと思うわ。だから、わたしと一緒にいらっしやい」

少女はにこりともせずと言うと、そのまま再び歩き出した。

薄汚れた少年の手を、しっかりと握り締めたまま。

このとき十四歳の少女と七歳の少年だったラティフィーネとファルドは、こうして旅に出る。

いつか、幸福の都に辿り着くために。

幸福の都。

それは、東の果ての、深い森を抜けたところにあるという。また、西の洞窟の奥に広がっているのだともいう。南の海の底にあるのかもしれないし、北の氷山がそれなのかもしれない。

どこにでもありそうで、決してどこにもないもの。
人々は、探し求めている。

決して手に入らない、幻想の都を。

都と呼ばれるところは大抵、人や物が多く、埃っぽくてうるさい。行き交う人々には余裕がなく、荷車や馬車が容赦なく走り抜け、罵声や子供の泣き声や野菜売りの娘の声などが、入り混じって往來に響き渡っている。

「……なにが幸福の都よ」

金物屋の軒下で柱に凭れながら、ラティフィーネは呟いた。

ここは、先の戦争で戦火を逃れた都なのだという。だから、幸福の都。

数日前にいた村は、子供が大勢生まれたから幸福の村。その前にいた町には、幸福の井戸があった。幸福の都と呼ばれる都市も、ひとつやふたつではない。

この国は、幸福の都で溢れている。そのほとんどが通称で本当の名前は別にあるのだが、本当の名前のほうが廃れてしまっているという有様だった。

ラティフィーネは、真っ直ぐ腰まで伸びた赤毛を指先に絡めながら、何度目かの溜息を漏らす。彼女の髪の中では、細い金環の耳飾りが揺れている。

「ラティ！」

雑踏からこちらに駆け寄ってくる、少年の姿が見えた。

「宿を見つけてきたよ。それから、営業許可も」

満面の笑みを浮かべるファルドは、得意そうに灰褐色の瞳を輝かせている。

「部屋はね、白い壁で、大きな出窓があるんだって。ラティ、窓が小さい部屋は嫌いでしょう？ あと、下の食堂は昼間には客が少なから、好きに使っていいって」

「じゃあ、そこへ案内して」

ラティフィーネはそう言つと、足元の袋をひとつ、肩に掛けた。荷物はそれぞれ分担する。それが、二人の旅の数少ない決まり事である。

ファルドはもうひとつの荷袋を背中に担いで、ラティフィーネの手を取った。

「ええとね、こっち。こっちが近道だと思うんだ」

ファルドのこういう勘はまさに動物的で、初めての都でも決して迷うことがない。だから、いつの頃からか、ラティフィーネが荷物番をしている間にファルドが宿を探す、というのが当たり前になってしまった。

ファルドは、実によく動き回る。旅の資金を作るのはラティフィーネの占いだだが、その他の段取りや日常的なことはすべて、ファルドの仕事なのだ。それは決して、ラティフィーネが強要したことではない。出会って旅を続けている数年の間に、自然と分担が決まってしまうただけのことだ。

弟のように歳の離れた小柄なファルドに手を引かれて歩くことも、ラティフィーネは慣れてしまった。今ではもう、どちらが主導権を握っているのかわからない。

「ねえファルド、わたし、お腹が空いたわ」

「宿の近くに、果物の市場が出ていたよ。後で買ってきてあげるね」
この通り、多少の我俣にもファルドは動じない。にっこり笑って、

優しいことを言う。

この、くるくるとよく動く表情と小動物みたいな仕草が可愛くて仕方がないと、実はラティフィーネは思っているのだった。ただ、それを素直に表現するには、彼女はあまりにも自尊心が高い。

「そつえば、あんたが欲しがっていた本、買ってもいいわよ」「本当っ?」

「それくらいの余裕ならあるわよ。それに、この都にはしばらく住みつくことになりそうだから、お金なんてまた稼げるわ」

結局、どうでもいような口調になってしまう。この類の自己嫌悪は毎度のこと、ラティフィーネは溜息をつく代わりに、軽く空を仰いだ。

十四の歳に家出してから、丸四年が過ぎた。つまり、こんな風に旅を始めてから、四年が過ぎたことになる。

旅の生活は、悪くはない。もともとどこかに縛られるのは性に合わないし、だから家を出たのだから。

でも。

まだ、幸福の都には辿り着けない。

そんなものが実在するのかどうかさえ、本当は知らないのだけだ。

ファルドが見つつけた宿は、都の中心部より少しだけ外れたところにあった。うまい具合に、表通りから一本だけ路地を入ったところにある。占いという商売には、案外こういう場所が、都合がよかつたりするのだ。

出窓のある二階の部屋に荷物を置くと、ファルドはさつそく果物市場に出掛けてしまった。ラティフィーネは、食堂の隅のテーブルを借りることにして、商売の準備を始める。

占いには水鏡を使う。銀色の、深皿のような円形の盆に水を張り、

底に水晶の欠片を落とす。

占いたいことを念じつつ水面を眺めると、ラティフィーネには、ほんの少しだけ先の未来が読めるのだ。

最初の客は、いつも宿の主人だと決めている。代金は受け取らない。しかしこれは、大事な仕事なのだ。なぜなら、宿屋の主人に「占師ラティフィーネ」の能力を見せつけることができたなら、半日もしないうちに、客は待っているだけで必ず訪れる。言わば、重要な宣伝係を勤めてもらうというわけなのだ。

「実は、女房と喧嘩をされていてね」

今の一番の悩みは何かと訊ねると、細面の主人は苦笑いでそう答えた。人のよさそうな、腰の低い主人だ。

ちようどラティフィーネとファルドがここへ着いたとき、ふくよかな女性が出て行くところだった。あれが、この主人の妻だったのだらうと、ラティフィーネは見当をつける。

「奥さんは、ちょっと太めの人ね？ 金髪というよりは、茶色に近い髪なの？」

「そうそう、その通りだとも！」

主人は大袈裟に驚いて、身を乗り出した。

「ここだけの話なんだが……実は、女房の大事にしていた置物を、うっかり落として割ってしまっただけ。それで口をきいてもらえないというわけで」

「奥さんは、それで怒って出て行ってしまったわけね。つまり、仲直りの方法を教えて欲しいと？」

主人が頷くのを待ってから、ラティフィーネは水鏡に手をかざした。

ぼんやりと、水晶の欠片が光る。

かすかに水鏡が揺れ、そこには、ラティフィーネだけに見える映像が浮かび上がった。

主人は緊張した面持ちで、じつと息を潜めている。

「……この近くに、教会がある？ 緑色の屋根で、小窓がたくさん

ある建物よ」

「あ、あるとも」

「奥さんなら、そこにいるわよ」

神妙な面持ちを作って、ラティフィーネは告げた。

「仲直りをしたいなら、すぐさまそこへ行くこと。途中、赤い花を買ってね。奥さんに逢ったらこう言いなさい。頼むから帰ってきてくれ、お前がいないと生きていけないんだって。恥かしがっては駄目よ。ちゃんと謝ってそう言えば、きつとうまくいくわ」

「わ、わかった」

「ここは、とりあえずわたしが店番をしておいてあげるわ」

ラティフィーネがそう言い終えるなり、主人は感謝の言葉を残して、店から飛び出して行った。

「まったく……平和なことだわね」

馬鹿馬鹿しいという台詞の代わりに、ラティフィーネは呟いた。

悩みが博打の借金だの命が危ないだの、そういうものでないというのは、本当なら喜ばしいことなのだろうが。

ラティフィーネが実際に占ったのは、主人の愛する奥さんの居場所くらいのものだ。あとの演出は、適当に言ってやっただけのこと。主人の口振りからすると、本来の仲は悪くないのだろうし、放っておいても仲直りなど自分達で勝手にするだろう。つまり、占師など出る幕はない。

「ラティ、ただいま。見て、とつても美味しそうなんだよ」

そこへ、息を弾ませてファルドが戻ってきた。拳大の真っ赤な林檎をひとつ、大事そうに胸に抱えている。

「ひとつだけ？」

「え？　ひとつじゃ足りなかった？」

真顔で訊き返すファルドの様子では、自分のためにもうひとつ買うなどという考えは、微塵も浮かばなかったらしい。

「……悪いけどわたし、もうあんまりお腹は空いてないわ」

ラティフィーネは、わざと不機嫌な調子で言い放った。

「半分はわたしが食べるから、あとの半分は買ってきた責任を持って、あんたが食べなさい」

「うん、わかった」

素直に頷いて、ファルドはちよこんとラティフィーネの隣に座る。そして、腰帯に挿した折りたたみナイフを取り出すと、少々危なっかしい手つきで、赤い林檎を半分に切り分けた。

「半分こだね」

「そう、半分ずつよ」

えへへ、とファルドは笑った。

可愛いじゃないの、と思うラティフィーネは、しかし相変わらずの仏頂面のまま、ファルドの頭を掠る程度に撫でてやる。

素直さも、半分ずつに出来たらいいのに、とラティフィーネはこっさり思う。

またしても軽い自己嫌悪に陥りながら、彼女は林檎に噛みついた。

翌日には、早くも赤毛の占師の噂を聞きつけ、ラティフィーネを訪ねてくる者があつた。その翌日にはさらに客は増え、三日目には行列さえできた。

宿としても、昼間は開店休業状態だった食堂に占い目当ての客がやってくるおかげで、そこそこの利益を出しているらしい。そういうこともあつて、無事に仲直りをした宿屋の夫婦は、ラティフィーネとファルドに好意的だった。

占いの依頼は、一番多いのが恋占いで、その次が探し物、商売繁盛の方法や、生まれてくる子供の性別、喧嘩の必勝法だとか、博打の当たり目といったものもある。遠方に住む家族の安否を気遣う若者や、亭主の浮気相手をつき止めたいと息巻く妻もいる。

あまりにも深刻な内容の依頼がひとつも無いことが、ラティフィーネには幸運だった。荒んだ村などでは、露骨に誰かを呪詛したり、

家族の病気を治す術を知りたいと願ったりする者が少なくないのだ。しかし、ラティフィーネは魔術師でもなければ医者でもない。誰かの人生をそのまま背負うような話を平静に受け止められるほど、老成してもいない。

生活のために自分の能力を活用しているだけであって、慈善事業をするつもりもない。自身を奢ってもいないし、逆に蔑みもしていない。ただ、生きるための糧を得るには金が必要、それだけだ。

「次の人」

淡々とした呼びかけに応じ、殊更ゆっくりとした動作でラティフィーネの前に座ったのは、同年代かやや年下らしい少女だった。

甘い香水の香りが漂う。少々きつ過ぎるくらいだが、ラティフィーネは眉をひそめたくなるのを気力で我慢して、正面からその客を見据えた。

肌は白く、頬はほんのり薔薇色で、青い目はぱつちりと大きい。さらに、巻き毛の蜂蜜色の髪には花模様の髪飾りをあしらっている。見たところ、今のラティフィーネとはまったく逆の世界の住人だった。

「本当は占いなんてあまり本気にしないのだけど、それでもちよつとは興味があるのよね。噂では、あなたの占いはよく当たるって聞いたから」

予想に違わぬ甘ったるい口調で、少女は小首を傾げる。鼻の下を伸ばした男になら通用する仕草なのかもしれないが、ラティフィーネは同性の上に、こういう人種は苦手だった。

おそらくどこかの金持ちの娘には違いない。どこから噂を聞きつけたのかは知らないが、わざわざこんな裏町にまで足を運ぶなど、よほどの暇人か遊び好きだろう。などと、平静を保った表情の下で、ラティフィーネは容赦なく毒づく。

「わたしにはね、四歳年上の婚約者がいるの。わたし達、きつと幸せになれると思うわ。でも一応、折角だから占ってもらおうと思つて。ほら、自分でわかっていることでも、改めて占ってもらつて幸

せな結果が出たら、もつと幸せでしょ？」

「……つまり、恋占いっていうことね」

さらに何か言いたそうな少女の言葉をそう結論づけて、ラティフイーネは水鏡に手をかざした。

水面にぼんやりと、人影が浮かび上がる。

「ねえ、何がわかるの？ どうやったら見えるの？」

「静かに」

お黙り、と言いたいのを堪えて、ラティフイーネは神妙な顔を作った。

「あなたの恋は……もしかしたら、これから大きな局面を迎えるかもしれないわね」

「どうということ？」

少女は、露骨に眉をひそめる。

「……つまり……はつきり言ってしまうなら、あなた達の関係がとも崩れやすくなるってことよ。その男には近いうち、別に好きな人ができるかもしれないわ」

「まあ……なんですってっ？」

「慎重に婚約者と向き合うべきね。そうすれば離れかけた彼の気持ちも……」

「いい加減なことを言わないで！」

突然、店内にヒスメリックな声が響いた。

周囲のざわめきが一瞬のうちに消滅し、そのすべての視線が二人に注がれる。

啞然としたことに関しては、ラティフイーネも他の客達と同じだった。いかにもという可愛らしい素振りをかなぐり捨て、少女は言葉を吐き捨てる。

「流しの占師のくせに、客を喜ばせる術も知らないのっ？ そんなでたらめを言って金を取るなんて、最低にも程があるわ！」

「……悪いけど、わたしの占いは客を喜ばせるための詭弁じゃないわ。信じる信じないは、あくまで自由だけ」

愛想の欠片もない態度で応じながら、ラティフィーネはうんざりした。どこにでもいるのだ、こういう人種は。信じていないと最初に言っておきながら、気に食わない結果だと、突如として怒り狂う。「じゃあ、わざわざこんな所まで出向いたわたしが馬鹿みたいじゃない。本当に、失礼な話だわ！ もう二度と来ないわよ、こんな小汚い所」

言いたいことだけ言って、少女は席を立つ。店の中の椅子が邪魔だと、今度はその周囲にいる客に当り散らしながら、そのまま外へ出て行った。

ファルドが居たら、きつともつとうまい具合に相手を宥めてくれただろうと、ラティフィーネは少し、思わないわけでもない。まあどちらにしろ、ああいう客には深入りしないのが一番だというのが本音だが。

そういえば、ファルドはそろそろ、買物を終えて戻ってくる頃だろうか。そんなことをぼんやりと考えながら、ラティフィーネは長い赤毛を掻き上げる。

「……見ての通りだけど、それでも私わたしに占って欲しい人、いる？」

成り行きを見守っている野次馬に、ラティフィーネはちらりと目をやり、問い掛けた。

ファルドの毎日の過ごし方というと、昼間は本を読んだり、ラティフィーネに頼まれて買物に出掛けたりしていることが多い。占師の助手といっても、ファルドには占いの素質という決定的な部分が欠落しているために、もっぱら生活の雑務や、せいぜい客の案内くらのことしかできないのだった。

当初 旅を初めて間もない頃は、常にラティフィーネの顔色を覗っていたファルドだが、四年も経つ今となっては、彼女の性格に

もすっかり慣れてしまっている。ラティフィーネは滅多に笑わないし、大抵不機嫌で無愛想だが、だからといってファルドを意味もなく叱ったり罵ったりすることはない。ファルドにはどうやら占師としての素質がないとわかったときも、励ますことはしない代わりに無能だと詰ることもなかった。

「素質が無いものは仕方ないし、それはべつに、あんたのせいでもないわよ」

ただ、そんなふうには言っただけで。

そして夜、同じベッドで一緒に寝るときは、気が向いたら昔話を聞かせてくれたりもする。怖い夢を見たときは、手をつないだまま寝てくれたこともある。きちんとした読み書きを教えてくれたのも、ラティフィーネだった。

ファルドにとって大事なことは、ラティフィーネを好きだということ、もしも家族が居たらこんな感じだろうかと思える、唯一の存在だった。本当の家族のことを何ひとつ覚えていない十一歳の少年にとっては、それは何よりも大事なことなのだ。

「ええと、本屋さんはどこだろう？」

往来の片隅で、ファルドはきよろきよろと辺りを見渡す。

ラティフィーネに頼まれた買物は、占いの道具を包む新しい布と、彼女の好物の焼き菓子で、それは既に終えてしまっている。残りの買物は、ファルドの新しい本だけだ。

荷物を脇に抱えたまま、ファルドは思い切って人通りの多い方の道へ歩き出した。宿の方向さえ見失わなければ、どこへ行ってもなんとか戻れる自信はある。

荷馬車と土埃に注意しながら道を渡り、市場を通り過ぎていく。すると、石畳で舗装された白い街並みが視界に飛び込んできた。

「うわあ、すごいや」

思わず歓声を上げたファルドの目の前を、立派な馬車が走り抜けていく。

お金持ちの沢山住んでいるところだ、とファルドは思った。お金

持ちというのはほとんどが悪人だと、ラティフィーネは言っているけれどファルドは、そのお金持ちという人達に直接出会ったことがないから、本当のところはよくわからない。

ファルドは少しだけ悩んで、それでも興味には勝てずに、通りを歩き始めた。最初は少し緊張したが、通りすがりの人達は恐ろしい顔をしているわけでもないし、着ている服が多少派手だということを除けば、市場と変わらない。それがわかってしまうと、ファルドは上機嫌になった。

「ラティモ一緒だったら、もっと楽しかったのに……」

綺麗な刺繍の入った布を売っている店や、変わった帽子を売っている店もある。それ等は市場のように店先に山積みになっているのではなく店内に整理して並べられていて、開いたままのドアからこっそり覗くか、店先に掲げられた看板の文字を読むかしないと、何を売っている店なのかちつともわからないようになっていた。

本屋を探すことなどすっかり忘れてしまったファルドは、特別大きな店の前で立ち止まった。

幾つもの綺麗な石が連なっている首飾りを見つけたのだ。ファルドには、それがどれくらい高価な物であるかなどわからない。ただなんとなく、とても高いのだろうと思うだけで。

ファルドは、はつきりと覚えている。

四年前、太った濁声の男にいつも苛められ、鞭で打たれていた頃、ラティフィーネがああいう重そうな首飾りの代わりに、ファルドを買ったのだ。助けてくれたのだ、とファルドは思っている。たとえ、ラティフィーネにはそんなつもりはまったくなかったのだとしても。

「邪魔だ、どけー！」

「えっ？」

じっと店の中を覗いているファルドの目の前が、不意に翳る。

「あ……うわっ」

慌てて避けようとした瞬間、ファルドは突き飛ばされて、石畳の

上に尻餅をついた。

「う、ごめんなさい!」

「ここはガキの来るようなところじゃない。しかもお前……タークル人か。さては、どこかの奴隷じゃないだろうな。ええ?」

「ぼ、僕は……僕は、貿易商の両親と一緒にこの国に渡ってきて……」

「黙れ! お前がぶつかったせいで、俺のこの新品の服に手垢がついたじゃないか」

ファルドの顔を覗き込んだのは、太った若い男だった。男はにやにやと笑いながら、ファルドの襟首を掴み上げる。

「ごめんなさい、あの……っ」

「貿易商とか言ったか? なら、親に頼んで金を持ってこいよ。そうしたら許してやってもいいぜ」

「そ、それは……今は旅の途中だから……」

「なんだ? 金が無いつていうのか? だったら……そうだな、俺が奴隷として買ってやってもいいぞ」

その台詞に、ファルドは目を見開いた。

怖い。怖くて声が出ない。

この男の嬉しそうな目つきは、奴隷商の男が鞭を振るつたときとあまりにもそっくりだったのだ。お前達は家畜と同じだからちゃんと調教しないと駄目なんだ、と笑って、鞭を振り下ろしていたあの男と。

「知っているか? 奴隷はな、肩のところに牛みたいに焼鑊を押されるんだ。お前のこの肩にも、熱い鉄を当ててやろうか?」

熱い熱い鉄。

皮膚が焼ける臭い。

傷が疼いて、何日も眠れない夜が続く。

中には、そのまま発熱して死んでしまう子もいた。

ファルドは。

死んでしまった子が、最期に「おかあさん」と呟いたのを聞いて

いた。

その子の身体を、太った濁声の男がどこかに捨ててしまつてしまつて見
ていた。

「……あ……」

逃げなくてはいけない、と思った。

逃げなくては。

早く、ラティのところに戻らなければ と。

「痛えっ！」

気がつくど、ファルドは目の前の毛むくじやらの手に噛みついて
いた。情けない声を上げて、男はファルドの襟首を掴んでいた手を
放す。

「このガキ！ 何をしゃがるっ！？」

激昂した男は、咄嗟に逃げようとしたファルドの右腕を掴み
損ねて、シャツの袖を掴んだ。そのまま、あまりにも強い力で引か
れて、ファルドは再び転倒する。

同時に、ビリビリッ、と乾いた音がした。

シャツの袖が破れたのだ。

しまった、とファルドは思った。もう駄目だ、と目を瞑る。

その 次の瞬間。

ファルドは男の情けない声を聞き、そして水飛沫を全身に浴びて
いた。

「ああ、申し訳ないね」

ちつとも申し訳なさそうでない調子で、その声の主は謝罪する。

ファルドが恐る恐る目を開けると、そこには別の青年が立っていた。
細身でどちらかという背の高い、金髪の男だ。

「店先であんまりうるさいものだから、裏町から豚が逃げ出して騒
いでいるのかと思ったよ」

ファルドよりもびしょ濡れで頭から水滴を垂らしている男は、自
分のことを豚呼ばわりした青年を睨みつけ、顔を真っ赤にして両拳
を震わせている。

後から現れた青年のぼうが、この太った男よりも上位にあるのだということ、ファルドは瞬時に見抜いた。

「服なら新しいものを、きみの家に届けさせよう。この非礼は詫びなくてはいけないからね。ついでに、きみがまた僕の所に借金相談に来て断られたってことを、きみのお父さんにお話してあげようか？ たしかきみ、次に問題を起こしたら勘当されるって言っていなかったかい？」

とても楽しい計画を口にするかのように、青年はにっこりと笑う。「そ、それは……」

赤い顔を蒼白に変えて、男は口の中で何やら言い訳めいたことを口にする。やがて、うやむやな台詞を言い残し、体格からは想像できない素早さでその場を立ち去っていった。

「金持ちの馬鹿息子っていうのは、さらなる金持ちには頭が上がらない。典型的なるくでなしって奴だ。見ていて憐れだよ」

木桶を抱えたまま、青年はひとつ溜息をついてから、ファルドを見た。

「おやおや、きみも随分濡れてしまったものだね」

自分でやっておいて、他人事のような言い種である。

しかし、呆然としているファルドに、彼は優雅に手招きしてみせた。

「おいで、お詫びにお茶に招待するよ。服を乾かさないと、家には帰れないだろう？ 袖もほとんど取れかかっているから、縫ってあげよう」

その言葉に、ファルドはぎくりとした。

右肩の袖が取れかかっている、そこからは火傷の跡がはっきりと見えたのだ。意図的に記された 奴隷であることを示す、焼印の跡が。

ファルドには、ラティフィーネにきつく約束させられていることが、ふたつだけある。それは、もしもタークル人であることを訊かれたときには必ず、貿易の仕事をしている両親と一緒にこちらの国

に渡ってきたと答えるということ、そして何よりも、絶対にその火傷の跡を誰かに見られてはいけないということだった。

「ほら、おいでよ。きみのご両親に告げ口なんてしないからさ」
青年は、気づいていないようだった。

ファルドには、こういうときにどうしたらいいかなど、わからない。とりあえず、石畳の上に放り出してしまった荷物を拾い上げ、逃げるべきか従うべきかと逡巡する。

青年はドアの前で振り返り、もう一度小さく溜息をついてから、ファルドのところに戻ってきた。

「……次に嘘を吐くときは、もっと上手なものを選ぶべきだね」
彼は身体を屈めて、ファルドの耳元で囁いた。

「さっきの馬鹿息子とはかく、両親が貿易商だなんていうのは、この都ではあまり通じないと思うよ」

「……え……」

全身を緊張させて、ファルドは青年の顔を見る。

「まあ、そういうわけだ。そのうえで僕は、きみをお茶に招待しようと言っているんだけどね。断る理由なんて、きみにある？」

青年は少々脅迫めいた言葉を口にして、にこやかに笑う。

背中を押されたファルドは、結局その誘いを断ることができずに、足を踏み出したのだった。

ファルドが案内されたのは、立派な　ファルドとラティフィーネが泊まっている宿に比べたら随分立派な部屋だった。靴の裏が埋もれてしまうほど毛先の長い絨毯に真つ白な壁、額に入った絵や花瓶なども飾られている。出窓はふたつもあって、部屋の中央にある丸テーブルの側面には、細かい模様が施されていた。

青年の名前は、ルカートというらしい。彼は、宝石や装飾品を取り扱うこの店の息子なのだと言った。彼は、自己紹介した。

ファルドが勧められたのは、座ったこともないような柔らかい椅子だった。わけのわからないうちにシャツを脱がされ、代わりに肩掛けを渡される。

「すぐ終わるから、とりあえずそれでも羽織っているといい」

ルカートはそう言うと、戸棚から小さな箱を取り出した。何を始めるのかと思えば、彼は自ら針と糸を取り出して、取れかけた袖を縫い始めたのだ。

ラティフィーネよりもずっと上手だな、とファルドは思ったが、そんなことをわざわざ口にするのも気が引けて、目の前のティーカップを両手でそっと持ち上げる。

紅茶も、彼が手ずから入れたものだった。

「やけに簡単に袖が取れたものだと思っただら……これは、誰かが前に一度、同じ所を縫っているね？　それもあまり上手じゃない」

「そ、それはラティフィーネが……ええと……でも、お裁縫はあまり上手じゃないけど、他のことはとても上手なんだよ」

「その人は、きみのご主人様？」

「よくわからない」

正直に、ファルドは答えた。

「ラティフィーネは、そういう呼び方は嫌いだって言うから。僕は、助手なんだって。ええと……ラティフィーネは占師で、すごくよく当たるんだよ。」

はわかった。彼自身もその一員であるはずなのに　　と思わないわけでもなかったが、ファルドは黙って紅茶を飲む。

「そつえば、きみは本が好きなのかい？」

「うん、好きだよ。まだあんまり難しいのは読めないけど」

ファルドが答えると、ルカートはちらりと顔を上げて、部屋の壁を指差した。

「あの本棚の一番下の列は、もう何年も前に読んでしまった物ばかりなんだ。きみが読めるようなものがあれば、持っていくといいよ」「本当に？」

どうせもう読まないから、という返答を最後まで聞かないうちに、ファルドは本棚に駆け寄った。実は、気になっていたのだ。

「すごいね、本屋さんでもないのにこんなにいっぱい」

「読書家を自称する連中と比べたら、僕の本なんてちつとも多くないんだけどね」

ルカートは苦笑したが、ファルドにとっては、十冊以上の本は全部「いっぱい」に分類されてしまうのである。なぜなら、ファルドが大事に持っている本は、いまのところたったの一冊しかなかったのだから。

「すごいね、すごいねえ」

どの本も背表紙がしゃんとしていて、ファルドにはちよつと簡単には触れないような感じさえした。両手をズボンでよく拭いてから、一冊の本にそつと手を伸ばす。開いてみると、びっしりと綺麗な文字が並んでいて、意味もよくわからないのに嬉しくなった。

「ルカートつたら、ちよつと聞いて！」

若い女の声が部屋に乱入してきたのは、袖を付け終えたシャツを受け取り、ファルドが大喜びでルカートにお礼を言ったときのことだった。ファルドは大慌てで、両方の袖に腕を通す。

「どうしたんだい、エルミナ」

ルカートも少しだけ驚いた様子で、乱入者を見る。

「悪いけどごらんの通り、今は来客中だよ。急ぎの用でなければ、後にしてもらえないか」

「……何？ その子」

「ちょっとした経緯があつてね。この子のシャツが破れてしまったんで、僕の裁縫の技を披露していたところさ」

ファルドはその間にボタンを留め、そうして初めて新しい客を見た。

それは、ラティフィーネと同じくらいには年上の、女の人だった。ふわふわの金髪で、肌の色が白く、甘い匂いがする。ファルドはその人を綺麗だとは思ったものの、なんだか怒っているような顔をしているので、どうしたものかと思う。

「こ、こんにちは」

とにかく挨拶をすると、その女の人 エルミナは、じつところらを見て、何事も無かったかのようにルカートに歩み寄った。

「聞いてルカート。とっても最悪なの」

「……きみ、何か面白い噂を聞いたから出掛けるって言っていないか？ たかいかい？」

「そうよ。とてもよく当たる占師っていう噂を聞いたから、わざわざ出掛けてきたの。だって、わたし達の将来について、とても興味があつたんですもの」

「それで？ その様子だと、あまり嬉しい結果ではなかったようだけれど」

ルカートはエルミナのために椅子を引き、彼女を座らせてから尋ねる。

ファルドは身の置き場がなくて、ただ黙って立ち尽くすしかない。「言うに事欠いて、わたし達の関係が危ういだなんて言ったのよ、あの占師。婚約までしているわたし達に、そんなことあり得る？ あなたに別に好きな人ができるかもしれない、なんて。ねえルカー

ト、そんなことないでしょう？ あり得ないでしょう？」

「まあ……今のところ、僕には思い当たるような人はいないね」

「ほら、やっぱり。あの女、次に会ったら許さないんだから。長い赤い髪の女でね、歳はわたしと同じくらいだったわ。ちよつと美人だからって、客に、それもこのわたしに、いい加減なことを言うなんて！」

エルミナは一気にそこまで言うと、ふと思いついたように、甘い笑みを浮かべる。

「お父様に言いつけて、この都から追い出してやるのもいい考えね」

「まあ、程々にすることだね、エルミナ。占いなんて、当たるかどうかよりも占ってもらう行為そのものを楽しむものさ」

「……あのっ」

黙って立っているしかできなかったファルドは、思いきって声を出した。意図したよりも大声になってしまつて自分で驚いたが、エルミナの言う赤い髪の占師がラティファイネのことだと思つたら、黙っていられなくなってしまったのだ。

「ああファルド君、ごめんよ。きみを忘れるところだった」

「ラティは、いい加減なことなんか言わないです。ラティの占いは、とてもよく当たるんだ」

「え？ きみが助手をしているのは、もしかしてその占師なのかい？」

「ラティは、嘘なんか言わないよ。確かにちよつと、お客さんに対して優しくないとときもあるけど……でも、ちゃんと解決法だつて教えてくれるし。やつとこの都に着いたのに、追い出されたりしたら困る……」

「ちよつと……」

ガタン、と音がして、エルミナが椅子から立ち上がった。

「これはどういふことっ？ あなた、あの占師の知り合いなの？」

「あ……ぼ、僕は、助手をしていて……」

剣幕に驚いて、ファルドは思わず後ずさる。

「助手……ね」

エルミナは繰り返して、そして、はんと鼻で笑った。

「ご大層に助手なんて名目をつけたら、奴隷風情がこうして大きな口が叩けるってわけね。主人がいい加減なら、その奴隷は口の聞き方も知らないんだわ」

「よさないか、エルミナ」

「いいえ、ルカート。あなたがこんな子供を部屋にまで上げて高いお茶を振舞うのは、わたし、目を瞑って差し上げてよ。でも、奴隷のくせにわたしに意見するなんて、許されることではないわ」

「タークル人だからって奴隷呼びわりして敵視するのは、昔の悪い風習だよ。ファルド君、きみはもうお帰り」

ルカートはそう言って、ファルドを促した。

婚約者が少年に味方したことが癪に障ったエルミナは、憤然と目を吊り上げる。

「奴隷は奴隷だわ。人の姿をした家畜じゃないの！ ええそう、牛や馬のほうが口答えしなだけ賢いってものよ。奴隷にはわたし達のような階級の人間に、対等に口をきく権利なんてないのよ。同じものを食べることも、同じ場所で寝ることも、許されないんだから！」

「……でもっ、でも、ラティは……僕とおやつを半分こするし、一緒に寝るし……字も教えてくれるし……」

「うるさいわねっ！」

パンつと乾いた音がして、ファルドは左頬に痛みを覚えた。

「なんて生意気なの！ 奴隷の教育がなっていないのは、その飼い主に問題がある証拠よ！ 自分の奴隷も教育できない恥晒しの占師なんて、すぐにこの都から追い出してやるわ！」

「……っ」

ファルドには、綺麗だと思っていたエルミナが太った男に見えた。ルカートに水を掛けられた男だ。そしてそれは、鞭を振るって嬉しそうに笑っていた男と、重なる。

頬の痛みがジンジンと響いて、どうしようもなく悲しくなった。

ファルドは、自分がいわゆる奴隷とは違うということ、なんとなくわかってる。奴隷商の男に散々聞かされていた奴隷としての生活と、ラティフィーネと出会ってからの生活が、あまりにも違っていたからだ。けれど、こんなにあからさまに、しかも一日に何度もそれを思い知らされたことはない。

ラティフィーネは、ファルドを奴隷だと呼んだことは、ただの一度もなかった。不機嫌なときに多少八つ当たりをすることはあっても、有無を言わず殴るようなことはしない。当然のように用事を言いつけるが、それはラティフィーネには占師という仕事があるからで、ファルドはその手伝いをするのが仕事だからだ。

だから。

だからいつのまにか、ファルドは自分が何であるかということ、忘れていたのかもしれない。

「……………ごめんなさい」

ファルドは、涙を堪えて謝罪した。

「でも……………ラティは……………悪くないです。僕が……………ちゃんとしていないから……………」

「ファルド君」

「僕……………帰ります。シャツ、直してくれてありがとうございます」
ファルドはテーブルの上の荷物を取ると、そのまま二人の顔を見ることもできずに、部屋を出た。

店の中を走り抜けて外に出る。そうして、一度も振り向かず駆け出した。

悲しくて。

ただただ、ファルドは悲しかった。

少年の出て行った部屋には、彼が本棚から選んだ本と、飲み切れ

なかつた紅茶が残された。

「ねえルカート、わたしにも紅茶をいれてちょうだいな」

それまでの不機嫌が嘘のように、エルミナがにっこりと微笑んだ。ルカートは言われるまま、婚約者の少女のために、新しい紅茶をいれ直す。

「気分の悪いことは、忘れてしまうにかぎるわ。わたし、あなたとこうしているだけで、とても気分がよくなるのよ」

可愛らしく小首を傾げ、華やかな笑みを刻み、甘えたようにエルミナは言う。彼女にとっては、少年を酷く傷つけたことなどどうでもいいことなのだった。気に掛ける程の問題ですらないのだろう。

「どうぞ、お嬢さん」

いつものように笑みを浮かべ、ルカートはエルミナの前にカップを置いた。そして、そのままの調子で続ける。

「そしてこれは、僕がきみのために用意する最後のお茶だよ」

「それってどういう意味？」

新しい冗談を期待しているかのように、エルミナは大きな青い瞳を輝かせる。

「きみとの婚約は、今日限りで破棄するということさ」

「え？」

「つまり、きみが腹を立てていた占いの結果は、完全に間違つてはしなかつたってこと。僕達の関係が崩れるという、その点ではね」

「もう、嫌だわルカートったら。そんな悪質な冗談を言つて、わたしを驚かせるつもり？」

あくまで冗談として受け取ったエルミナは、真剣に取り合つつもりはないようだった。可愛らしく唇を突き出して、拗ねたような素振りを見せる。

ルカートは、小さく溜息をついた。

「僕はね、きみのその我侭なところも、自分にとっても正直なところも、嫌いじゃなかつたんだ。きみはとても美人だし、卑屈な人間よりも自尊心が高いくらいのほうが、僕には好感が持てたしね」

過去形で話すルカートは、単調に言葉を続ける。

「都で最も力ある議員の娘として何不自由なく育ったきみは、当然のように僕と婚約した。でもそれは僕達の意志というより、力はあるが金がかかる議員と、金はあるが権力の薄い宝石商が、手に手を取って暗躍しようとする企みだということに気づかないほど、きみは愚かではないはずだよ」

「ルカートったら、突然なにを言い出すの？ それは……それは確かに、お父様同士ではそういうこともあるかもしれないけれど、でも、わたしとあなたの間には、ちゃんとした恋人同士の関係があるじゃない。そうでしょう？」

「……せいぜい、お子様なキスを交わす程度の関係がね」

その台詞に、さすがのエルミナも瞬時に青褪めた。ルカートが決して冗談を言っていたのではないと、これで理解したのだろう。

「断言するよ、エルミナ。きみは、僕がこの家の息子じゃなかったら、僕を好きになつたりしなかった。きみは、僕が将来手に入れるこの店と宝石達を好きになったのだからね。まあ、僕だつてきみと結婚すれば議員になれたかもしれないんだから……きっと、お互い様なんだろうけど」

「……ルカート……」

エルミナは唇を小刻みに震わせながら、歪んだ笑みを浮かべる。

「だから……だからどうだっていうの？ いいじゃない、お互い様でも。わたしは、それでも構わないわ……」

「じゃあ、もつとはつきり言おう」

ルカートは、冷やかにさえ聞こえるように、突き放した言い方をした。

「今の僕には、きみの我侂が傲慢に見えるし、自分に正直なところが頭の悪い女に見える。つまり僕は、きみとこれ以上婚約者としての関係が続けることが苦痛になったということだよ」

「そんなの……認めないわ。わたし、絶対に認めないわ！」

声を震わせて、エルミナは叫んだ。

ルカートは、それ以上彼女の相手をするとはなかった。言い過ぎたかもしれないとは思ったが、後悔はしなかった。やがてエルミナは部屋を飛び出して行き、ルカートは独りになった。

少年が残していった本を手を取って、鳶色の瞳をわずかに細める。冷めた視線は、やがて窓の外へと向けられた。

「まったく」

静まり返った部屋の中、低い呟きだけが響く。

「奴隷奴隷って……うるさいんだよ、この町は」

* * * * *

ファルドの様子がおかしい。

どことなくよそよそしいばかりか、食欲もないようだ。そして寝るときは、床で毛布に包まっている。

ラティフィーネが理由を訊ねても、答えない。

反抗期かというのと、どうやらそういうものとも違うように思える。「あんた、何が気に食わないの？ わたし、あんたを怒らせるようなことした？ この店の食事がまずいって思ってるの？ それともあたしの寝相の悪さを暗に非難してるわけ？ 言いたいことがあるなら、はっきり言いなさいよ！」

いい加減腹が立って、そんな風に問い詰めたのは今朝のことだった。

ファルドは、やはり答えなかった。とても悲しそうな顔をしただけ。

ベッドの上につつ伏せて、ラティフィーネは苛々と爪を噛む。

まるで、何かを押し殺したような　もしかしたら諦めたような、悲しい目だった。遠慮をして言いたいことを我慢している様子とは

違い、そのときのファルドの目は、四年前に薄汚い格好で売られていたときと同じようだと思った。そんな顔をさせているのがこの自分自身ののだと思ったら、苛立ちと後悔とで、いよいよ情けなくなってくる。

今日は、とても仕事などする気が起きない。こんなときに占いをして、集中できるはずもなく、ラティフィーネは朝から客をすべて断って、さっさと部屋に引きこもっていた。

占師というのは厄介な商売なのだ。その日の精神状態で能力の幅が左右されるうえに、雑念が多いとまともな予見などできなくなってしまう。こんな日はその最悪な事例というやつで、結果、いつも以上の自己嫌悪に悶々とする羽目になる。

ファルドは、市場へ出掛けてしまった。ラティフィーネがとくに買物を頼んだわけではなく、単に居場所がなかったのだろう。

「なんなのよ、もう」

こんなことは初めてで、ラティフィーネには何がなんだかさっぱりわからないのだ。

具体的にファルドの様子がおかしくなったのは、ちょうど三日前にお遣いから帰ってきたときからだった。

いつもと比べると随分遅くに戻ってきたファルドは、とても元気がなく、声も小さく、笑顔もなかった。気づいたことは、ファルドのシャツのボタンが、出て行ったときと違って掛け違いになっていたということだ。そして、頼んでいた焼き菓子は砕けて散々たる状態、占いの道具を包む新しい布はよれよれの状態だった。

誰かに苛められたのかと訊くと、ファルドは首を横に振った。喧嘩をしたのかと訊くと、それも違うと言う。ファルドは転んだのだと言って譲らず、そしてうまく買物ができなかったことを謝ったのだ。

ラティフィーネはその時、それ以上のことを訊くことができなかった。放っておけば翌日にはもとのファルドに戻っているかもしれないという期待も、そのときにはあったのだ。

「でも……うなされていたわよね」

ファルドが夢でうなされるのは、今に始まったことではない。最初に出会った頃は、ほとんど毎晩のことだった。それが徐々に少なくなり、今ではほとんどなくなっていたのだ。それなのに、ここ二日ばかり、立て続けにファルドは昔と同じ悪夢に襲われている。

夢の内容を、目が覚めたときのファルドはほとんど覚えていない。しかし、ラティフィーネは、ファルドがうなされながら両親を呼んでいるのを、何度も聞いている。現実には、ファルドは奴隷商に売られる前のことを、まったく記憶していないというのに。

それは、幼いファルドが両親から引き離された、かすかな 普段は忘れていた記憶なのかもしれない。かすかな

「……迎えにいこう」

それだけははっきりと、ラティフィーネは決意した。

ファルドを迎えにいったら、今度こそ何があつたのかを聞き出すのだ。いや、聞き出せなくてもいいから、ちゃんとファルドを連れて帰ろうと思った。

さつそく部屋を出たラティフィーネは、主人に、ここから一番近い市場の場所を聞いた。ファルドはきつと、そこにいるだろう。

土埃が舞う乾いた空気とまだ高い日差しを少しだけ恨めしく思いながら、ラティフィーネは市場に向かって歩きだした。

表町と比べて裏町と呼ばれるこの辺りは、何もかもが雑多に見える。しかし、こういう整然としない自由さを、ルカートは嫌いではなかった。

目的としているのは、裏町の中でも最も人通りの多い道から一本奥に入った所にあるという、小さな宿屋である。赤い髪の占師は、そこにいるというのだ。

ルカートは占いに興味があるわけではない。数日前に出会った少

年を、探していたのだった。

その宿は、すぐに見つかった。しかし、主人の話によれば、今日は占いをしていないのだという。ファルドという少年のことを訊ねると、朝から外出しているということだった。

「そういえば、ラティフィーネさん……占師の彼女もついさっき、出掛けたところで」

主人は、申し訳ありませんね、と愛想笑いを浮かべる。

「伝言がありでしたら、うかがっておきますが」

「いや……いいんだ。たいしたことではないから」

ルカートは申し出を断って、外に出た。

一気に、脱力感に襲われる。

「……何をやっているのか」

子供一人のためにわざわざ出向いている自分が、急に馬鹿馬鹿しく思えたのだ。

ルカートは右手に、本を抱いていた。ファルドが忘れてあるいは手を出せずに、部屋に残して行ったものだ。それを届けてやろうと思ったのだから、ルカートは我ながら、自分自身の行動に呆れてしまう。

「帰るとするか」

呟いて、ルカートは歩き始めた。

そもそも、忘れ物に用があるならその本人が受け取りに出向くべきだ。いくら暇だからといえ、こんな行為はまったくもって自分らしくない。

当の少年の姿を発見したのは、そんなことを考えながら通りを横切ったときだった。

「あ」

広くはない道である。通りの反対側からこちらに向かって歩いていたファルドも、ルカートに気がついたらしく、その途端、目に見えるほど動揺した。

「ファルド君、ちょうど良かったよ。きみに……」

本を届けに来た、とは最後まで言えなかった。なぜなら、ファルドが顔を強張らせたまま背を向け、来た道を逃げるように走り去ってしまっただからだ。

「……やれやれ。僕は、かけっこはあまり得意じゃないんだけどね」
言いながら、ルカートはその後を追う。

走りながら、追いかけてまで何をしようとしているのかと疑問に思う。そうまでする価値がどこにあるのかと、そう思いながらも、どういうわけかむきになっている自分を、ルカートは自覚していた。子供と青年とでは、そもそも体格からして違う。追いつくまでに時間はかからなかった。しかし、ファルドの逃げた方向はどうやら市場の一角だったらしく、人の往来は激しく、路地も入り組んでいる。

「逃げるなって」

ようやくファルドの腕を掴むと、ルカートはその腕を引きながら、道の脇へ連れて行った。

「きみが逃げ出すから、僕が追う羽目になったじゃないか」

悪意があったわけでもないその台詞に、ファルドはびくりと肩を震わせる。その様子はあまりにも数日前とは違って、ルカートは咄嗟に次の言葉を失った。

怯えているのだとわかったのだ。だから、なるべく優しく聞こえるように言葉を選ぶ。

「ファルド君、僕はきみに本を届けようと思って来たんだよ。ほら、きみがこの本なら読めそうだって言っていただろう、だから……」
「ありがとう、と。この少年なら笑顔でそう言うだろうと、ルカートは思っていた。

しかし、ファルドは小さく首を振った。

「なんだ、いらんのかい？」

残念だな、とルカートは吐息する。その直後、彼は背後から怒りに満ちた声を聞いた。

「ちよつとあんた！」

それが自分に対するものだ。とルカートが理解するより早く、ファルドとの間に若い女性が割り込んできた。

「ラティッ」

それまで一言も口を利かなかったファルドが短く声を上げて、彼女の腰の辺りにしがみつく。

「わかったわ、あんたがファルドを苛めていたのねっ？」

「……え？」

「大の男がこんな子を苛めて、恥かしいとは思わないの!？」

両手を腰に当て、初対面の男を真正面から睨みつけるこの人物が、ファルドが助手をしているという占師に違いないと、ルカートは判断した。

腰まで伸びた彼女の髪は、噂に聞いた以上に鮮やかな赤だった。

駆け寄ってきたらしい彼女が整わない呼吸を繰り返す度、金環の耳飾りが赤い髪の中で揺れる。一見冷ややかな色をした薄い蒼色の瞳は眼光鋭く、怒りの蒼い炎で燃えてしまいそうな勢いだ。

「あんたがどこのお坊ちゃまか何だか知らないけれど、この子に命令していいのも、泣かせていいのも、このわたしだけなのよ! いいこと!？」 今度ファルドに近づいてごらんさいつ。あんたに一生解けない呪いを掛けてやるわ!」

一気に捲くし立てるラティフィーネの剣幕に、周囲の通行人達の足が止まる。野次馬の輪も、そろそろできあがりつつある。

「お嬢さん」

笑みを浮かべて、ルカートは呼びかけた。

「きみって随分変わった人だね。この間、ファルド君から話を聞いたときからそう思っていたけれど。なんだか気が合いそうではっとなしたよ」

「あんた、頭がおかしいんじゃないのっ？」

「多分ね。僕は生まれたときからどうかしているんだ」

本格的に笑いだして、ルカートは本を見せた。

「これ、ファルド君にあげようと思って持ってきたんだ。この間は

持つて帰り損ねたみたいだったから。まあ……どうやら僕は、随分と嫌われてしまったみたいだけどね」

ちらりとラティフィーネの腰の辺りに視線を落とすと、ファルドが慌てて目を逸らす。

「ファルド君とは、僕の家の前で出会ったんだ。そのときに……まあ、運悪く性質の悪い馬鹿息子にぶつかって転んだのがファルド君、ついつい手が滑って、その馬鹿息子に水をぶっ掛けたのがこの僕」
「なによ、それ。どういうこと？」

「僕が強引に、ファルド君を家に上げたんだ。そこで……僕の元婚約者が、ファルド君に酷いことを、ね。君の占いで婚約者との関係が危ういと言われて、彼女、酷く腹を立てていてね。度を越した腹いせってやつだったんだ」

「まさか……あの甘ったるい、香水臭い女！」

どうやら占師のほうも、印象的な客は記憶しているものらしい。

ルカートは、ラティフィーネの後ろからこっそりこちらを覗いているファルドの身長に合わせて、腰を屈めた。

「ねえファルド君。きみが僕を嫌いになるのは仕方のないことかもしれないけれど、きみがきみ自身を嫌いになる必要なんて、どこにもないんだよ」

「あんた……ファルドを苛めていたんじゃないの？」

「少なくとも、僕にはそのつもりはなかったんだけどね」

ルカートは半ば強引にファルドに本を手渡して、そのまま背を向けた。

正直、当てが外れた気分だった。しかし、それも仕方がない。所詮、他人に自分の思い通りの反応を期待する方が間違いだと、思い直す。

「……あ、あのっ……待って」

呼び止める声は、少年のものだった。

「本……どうもありがとう。あと、それから……逃げたりして、ごめんなさい」

駆け寄ってきたファルドは、少々気まずそうな顔をしながらも、はつきりとお礼と謝罪を口にする。

「きみは、とつてもお行儀がいいね。そういう子を、僕は嫌いじゃないんだ」

ルカートがそう言うと、ファルドは嬉しそうに、そして照れくさそうに笑った。

「わたし、ラティフィーネっていうの。あなたのこと誤解していたみたい、謝るわ」

「きみみたいな美人に頭ごなしに叱られるのも、たまには刺激的だね。僕はルカート、表町の装飾店の馬鹿息子さ」

ルカートはそう言い残すと、今度こそ、その場から立ち去った。久しぶりに楽しい気分だった。妙に安堵している自分にも、気づく。

あの二人とは、もう少し親しくなってみてもいいかもしれないと、珍しくもそんなことを思いながら、帰路に着いたのだった。

その日の夕食には、ラティフィーネはテーブルいっぱい料理を注文した。ルカートが帰ってから、ファルドはいつもの調子を取り戻し、それから数日前に起こったことを打ち明けたのだ。

ファルドは、奴隷になろうと努力していた。家畜と同じだと言われた奴隷に自分からなるうとして、食事もろくにせず、ベッドで眠らず、それでいて従順であろうとしていたのだ。

ラティフィーネに言わせれば、無駄で無謀で馬鹿馬鹿しいかぎりの努力だったが、しかし彼女は、それを口にすることはできなかった。ファルドがなぜそんなことをしたのか、わからないほど鈍くはなかったからだ。

自分のせいで都を追い出されるわけにはいかないと、ファルドはきつとそんなふうに思ったに違いないのだった。追い出したければ

そうすればいい、と思うラティフィーネほどに、ファルドは図太い神経と捻くれた性格の持ち主ではない。

「スープの一滴だって残したら、容赦しないんだから！ それを食べたら、今日はもう、さっさと寝てしまいなさい。いいこと？ 床で寝ていたりしたら、お尻を引っ叩くわよ！」

ファルドは何度も頷いて、それから大急ぎでスープ皿とパンに手を伸ばす。

「ちゃんと野菜も食べるのよ、しっかり噛んで。ほら、口の横にパンくずが付いてるわ」

まるで神経質な母親のように、ラティフィーネはあれこれ口を挟みながら、自分の目の前の料理に手をつける。

ファルドは口と手を動かし、ほとんど目を白黒させながらも、せせと食事を進めている。ラティフィーネが本気で怒っていると思っただのか、余程空腹だったのか。おそらく両方なのだろうが、それでは味もよくわかるまい。

「あんたって……素直っていう意味では可愛いけど、単純っていう意味では最高にお馬鹿ね」

呆れながら、ラティフィーネはしみじみと目の前の少年を見つめた。その目が珍しく優しく、穏やかであることに、彼女自身は気づいていなかったが。

「ラティ」

口の中のものを飲み込んで、ファルドが上目遣いに呼びかける。

「……あの、ね」

「なによ？」

「僕、ラティと一緒に良かったよ」

「そんなの、今更でしょ」

鼻を鳴らして、ラティフィーネはそっぽを向いた。

「あんたはわたしの助手なのよ。あたしがそうと決めたらそうなんだから。奴隷みたいな真似されると気分が悪いつたらないわ。こんな馬鹿らしいこと、二度として欲しくないわね！」

ラティフィーネは言いながら、テーブルの端に乗せていた果物を手に取った。この都に来た初めての日にファルドが買ってきてくれたのと同じ、真っ赤な林檎だ。あるとき、ファルドがあんまり美味しそうに食べたから、ラティフィーネはファルドを探している昼間の間に、ひとつだけ買っていったのだった。

「半分ずつよ」

「半分こ？」

「それ、全部食べ終わってからね」

ファルドは笑った。とても、嬉しそうに。

笑いながら、ファルドはシャツの袖でごしごしと、目元を拭う。間に合わなかった透明な雫がひとつ、スープの中に落ちた。

馬鹿ね、と声には出さずに、ラティフィーネは呟く。

あの、ルカートという青年の言うことは正しい。ファルドが自身を嫌う必要はどこにもないのだ。こんなふうに泣く必要もない。

幸福の都。

本当にそんなものがあるのなら、とラティフィーネは思う。

きっとそこでは、誰もがささやかな幸せを共有し、笑っていられるのだろう。そして誰も、ファルドのような悲しい想いはしなくて済むに違いない。

いつか本当に辿り着けるならいい、とラティフィーネは心から願った。

ラティフィーネとファルドが新しい都に居着いて、二十日以上が過ぎていた。

赤い髪の占師、ラティフィーネの噂は確実に広まっているようだった。彼女の占い料金は、非常に安い。真剣に占いに耳を傾ける者も少なくはないが、娯楽の少ない裏町の人々にとっては、それはさやかな楽しみという色合いのほうに濃いうである。

ラティフィーネは相変わらず、客に対して愛敬を振りまくということをしていない。その無愛想なところがかえって人気の秘密でもあるのだが、そんなことは彼女にとってどうでもいいことだ。

「……それで、今日はなんの用なのよ？」

苛々と、ラティフィーネは髪を掻き上げる。

「だってラティフィーネ、きみは一度も僕のこと、占ってくれないじゃないか」

「わたしが占うのは客よ。あなたのは、ただの冷やかしでしょ？それとも嫌がらせ？」

「心外だな。わざわざこうしてきみに会いにやってきているというのに。こんな僕を邪険に扱うなんて、きみは随分と冷たい人だよ。まあ、そんなところもきみの魅力だけだね」

ラティフィーネはこれ見よがしに溜息をついて、目の前の男を睨んだ。このルカートは最初の遭遇以来、度々姿を現すようになり、ここ数日はほとんど毎日のように顔を出すようになっていたのだ。

「わたしは、顔のいい男の言う台詞は信用しないことにしているの」「へえ？ それって、少なくとも僕の顔は好みだっという意味に聞こえるけど？」

「……口数の多い男は嫌いだよ」

ラティフィーネはもう一度溜息をついて、ファルドを呼んだ。

「ここはいいから、この男、どこへでも捨ててきてちょうだい」

するとファルドは心得た様子で、別段抵抗するでもないルカートの腕を掴み、店の外に連れ出していく。

要は、あの男は単なる暇つぶしをしているだけなのだ、とラティフィーネは思っている。表町に暮らしながら、どういうわけかそこでの生活をあまり好いてはいないらしい。暇さえあれば先ほどのようにくだらないことを口走るか、ファルドにささやかな悪戯をしかけるために、ここへ顔を出す。

少なくとも彼は、ラティフィーネやファルドに悪意をもって近づき、危害を加えようとしているわけではない。しかし、だからといってラティフィーネが彼を心から信用しているかという点、そうでもなかった。なぜなら、ルカートという青年はある意味で、ラティフィーネと同類であるからだ。

つまり 基本的には、他人というものを信頼しない、という意味で。

占いに依らずとも、一日に数十人も客と顔を合わせる商売を何年も続けているラティフィーネは、年齢十八にして、なんとなくわかるのだ。

ルカートの心の中には、冷たい河が流れている。

彼がラティフィーネに冗談を言うのは、それでもとりあえずラティフィーネが相手をしてやるからで、彼がファルドを可愛がるのは、ファルドがとても素直に好意を示すからだろう。

ルカートのそれはまるで鏡と同じで、結局彼は、自分自身しか見ていない。相手の態度と同じ度合いでしか、その相手に近寄ることをしないというのは、つまり、基本的には誰も信用していないのと同じだ。その証拠に、ルカートは知人ですらない他人 例えこの食堂にやってくる別の客に対しては、愛想のいい笑みこそ浮かべても、鳶色の瞳の奥はいつそ冷ややかにないのだから。

だからといって、向けられる好意にさえ素直に応じることのできないラティフィーネは、自分がそれをとやかく言う資格などないことを承知しているのだが。

「あのう……」

遠慮がちにかけられた声で、ラティフィーネは我に返る。

ルカートの後に並んでいた客が、どうしたものかとこちらを覗き込んでいるところだった。

「考え事をしていたわ、ごめんなさい。どうぞ」

単調に告げると、友人同士らしい少女二人組みは、そそくさと椅子に腰掛ける。

こういう、いかにも娯楽気分の客の相手は、馬鹿馬鹿しい反面気が楽だ。けれどラティフィーネは、そんな態度は微塵も見せず、かといって笑顔で応対するわけでもなく、客に向き合った。

食堂の外、人々の行き交う通りに面した場所に、ファルドは営業妨害の青年を連行した。ルカートは抗うこともなく、反省するでもなく、むしろ毎回のこの状況を楽しんでいるようでもある。

「ねえ、ルカート、あんまりラティを怒らせちゃ駄目だよ」

「彼女、あれで怒っているのかい？ 普段からああだから、ちっともわからないね」

「占いをするには、感情的になるのはよくないんだ。それに、占いができないとお客さんにも迷惑だし」

「きみっていい子だねえ、ファルド君」

真顔で言うファルドの言葉を聞いているのかいないのか、ルカートはにっこり笑っている。

「もう！ 僕、知らないよ。ラティが本当に怒っても、味方してあげないんだからね」

「なんだか傷つくなあ。きみは、僕のことを嫌いだって言いたいの？」

「ええっ？ ……ええと、それは……違うと思うんだけど」

ルカートが急に神妙な顔になるものだから、ファルドは慌てて首

を振る。万事、この調子なのだった。まったく読めないルカートの言動に、ファルドはいつも困惑したり驚いたりを、繰り返す。

もともと単純な性格をしているうえに、遊ばれていると気づくほど、ファルドはこういう人種に免疫がなかったという事実もある。

「今日はね、お土産があるんだよ」

あくまで自分を崩さないルカートは、まったくお構いなく、紙包みを取り出して広げた。

砂糖をふりかけた美味しそうな焼き菓子が、ファルドの視覚と嗅覚を瞬時に刺激する。

「裁縫とお菓子作りが趣味なんて、僕って変わっているよね」

「ルカートが作ったの？　すごいなあ、なんでも自分でできるんだね」

「だってほら、僕って暇人だから」

それって自慢になるのだろうか、とファルドはこっそり思ったが、口の中に放り込まれた甘さに、たちまち幸せな気分になってしまう。

「ねえ、ひとつ教えてくれないかな？」

「なに？」

今度は自分から焼菓子に手を伸ばしながら、ファルドは訊き返す。「きみとラティフィーネは、どうして旅をしているのさ？　四年も旅をしているっていうけど、どこかにあてがあるのかい？」

「ラティは、幸福の都を探しているんだ」

深く考えず、ファルドは答えた。

「僕はよくわからないんだけど、ラティが行きたいのなら、きっといいところなんだと思うし。それに、旅を続けるのは、嫌いじゃないもの」

「……幸福の都、ねえ」

「ルカートは、それがどこにあるか知ってる？」

「知らない」

期待を込めたファルドの質問は、間髪入れずに跳ね返される。

「そんなもの、本当にあるのだったら、僕が真っ先に行っているよ」

「……でも、変だよねえ。この都も、そう呼ばれているんでしょ？
それなのに、誰も知らないって言うんだ」

ファルドは、本当に不思議に思っている。これまでいろいろな場所を旅して　そう、四年も旅をしていて、誰もそれを知っているという人がいないというのはどういうことなのだろう、と。

誰もその場所を知らないのに、名前だけは知っているのだ。名前だけは、いたるところに存在する。

「他にも、幸福の都って呼ばれていた場所はあったんだ。幸福のナントカっていう場所は、とても沢山あるんだよ。でも、本当の名前は別にあって、どこも本物じゃないんだ」

「まあ……そんなものかもしれないね」

「どうして？　本当じゃないのに、どうしてみんな、そう呼ぶの？　首を捻って尋ねると、ルカートは腕組みをしたまま、まるで空を睨むような目つきをした。

「それは、今が幸せだなんて誰も信じちゃいないからさ」

「え？」

「名前でもつけければ、それが手元に降りてくると信じているのだったら、笑っちゃうよね。お手軽な名前で、自分たちの憐れさを隠そうとしているのかもしれないよ。……まあ、どっちにしても僕の知ったことじゃあないけど」

空を仰いだまま、ルカートは言う。

同じように空を見つめても、ファルドにはゆっくりと流れる雲以外、何も見えない。

ガラガラと音を立てて、荷車が二人の目の前を走り去っていく。

「僕は、ラティのこと大好きだし、ルカートも遊びに来てくれるし、それって幸せなんだと思うけどなあ」

ファルドが思っているまますぐに口に出すと、ルカートは上向きの視線を下ろして、小さく笑った。

「きみって本当にいい子だね」

声をたてずに笑いながら、ルカートはよしよしとファルドの頭を

撫でる。

「ルカートは、今が幸せだとは思っていないの？」

「さあ、どうだろうね」

「楽しいこと、ないの？」

「あるよ。少なくとも最近は、きみやラティフィーネが遊んでくれるから、ずっと楽しくなった」

「楽しいことが沢山あると、それは幸せとは違うの？」

「幸せだと楽しいだろうけど、楽しいから幸せとはかぎらないんだよね、僕の場合は」

「……う……ん、よくわからない」

ルカートはにっこり笑うが、この青年の発言の意味が、ときどきファルドにはわからなくなる。それが、年齢の差によるものなのか、それとももつと根本的な違いによるものなのか、どうにも判断できなかつたが。

「ねえファルド君、きみはどうしてラティフィーネと旅をしようと思つたんだい？」

「それは……ラティが、ついていらっしやい、つて言ったから」

「きみは、それを嫌だと思わなかつた？ 少しも？」

「……うん、思わなかつたよ。だつて僕、嬉しかつたんだ」

そのときのことを、ファルドはよく覚えている。

「ラティは、綺麗な石が沢山ついた……ルカートの家にあるみたいな首飾りと、僕を交換したんだ。それから、僕の手を引いて宿屋に連れて行ってくれたよ。僕はそこで身体を洗って、新しい服を着て、髪を切ってもらつて……それから美味しい料理をお腹いっぱい食べたんだ。それからは、ずっとラティと一緒にだよ。僕、嫌だと思つたことは一度もないもの」

「彼女、最初からずっと、あんなに無愛想だったの？」

「あんまり笑わないのは確かだけど……でも、ラティは怖くなんかないでしょ？ 優しいんだよ、とつても」

寝相は悪いけどね、と笑つて、ファルドはルカートを見上げた。

「ルカートもラティを大好きになるよ、きつと」

「僕？」

思わずといった様子で訊き返したルカートは、その後でにこりとした。

「僕はもう、彼女のことを好きだよ。きみが彼女を想う気持ちには敵わないだろうけど、少なくとも、きみが僕を気に入ってくれていくくらいにはね」

ルカートは、ときどきとてもわかり難い言い方をする。

ファルドはルカートのことをもちろん、嫌いではないのだから、それはつまり、ルカートはラティフィーネのことを嫌いではないということ、ということ、ということ、好きだということなのだろうか。

眉間にしわを寄せて考え込むファルドの手に、焼き菓子入りの紙包みが渡される。

「僕はそろそろ帰るよ。僕は暇人のつもりだけど、一日中ここに居座るほど暇かと言うと、それでもなかつたりするんだ」

「……それって、忙しいってということ？」

「それなりにはね。今日は面倒なお茶会があつてね、困ったことに抜けれないんだ」

ルカートは相変わらずの笑顔のまま、そうそう、と付け加えた。

「その中に一個だけ、砂糖の代わりに塩をふりかけたのがあるから、食べるときは注意するんだよ。病気になることはないけど、あまりの不味さに悶絶するのは間違いないから」

「えっ？」

ファルドは驚いて、まじまじと手の上を見つめる。五つばかり残っているその中に、そのひとつがあるというのだろうか。見た目には、ちつともわからない。

「ほら、僕のもうひとつの趣味は意地悪だからさ。幸運を祈るよ、ファルド君」

「え、ええっ？」

明るく手を振って去っていくルカートには、悪意の欠片も見えな

い。むしろ心から単純に、ファルドの反応を楽しんでいるようだ。

「ええと……どうしよう？」

取り残されたファルドは、誰に対するでもなく問い掛ける。当然、答える者はいない。

あくまで遊ばれているということに気づかない、少年ファルドは、しばし途方に暮れるのだった。

ルカートにとって、日々を過ごすことは怠惰の連続のようなものである。

裕福な家庭に育てられ、幸いなことに容姿にも恵まれた。金と顔さえあれば、大抵のことには困らない。

父は家庭そのものには無関心で、金を与えておけばいいと思っ
ている。母はそんな父に頭が上がりず、一度として声を荒げたことが
ないような女性だった。姉が二人いるが、上の姉は同業者の息子と
結婚して近所に暮らし、下の姉は母と常に行動を共にして家にいる
ことが多い。それはつまり、商売熱心な父親の顔色を覗いつつ、よ
そよそしい母親や姉達と儀礼的な笑みを交わし、使用人達とは適度
な距離を保っていればいいということの意味する。若い娘と恋愛の
真似事をしたり、裏町を放浪したりするのも、暇つぶしにしかなら
ないのだった。

贅沢な悩みだ、とルカート自身思っではいる。だからこそ、常に
胸の奥にある苛立ちの種を、明るい笑顔で包み込むことを覚えた。

それは ちょうど、ファルドと同じ年の頃からだったかもしれ
ない。

簡単な悪戯にも気づかない少年が、今頃、存在しない塩味の菓子
を見極めようと苦悩している姿を思い浮かべて、ルカートは口元を
ほころばせる。

父が午後の茶会を開くと言うときは、それは家族会議を意味して

いた。これには、誰も逆らうことはできない。両親、二人の姉と義兄、ルカート、六人が同じ居間でひと時を過ごすのだ。

贅を凝らした居間には、既に紅茶の香りが漂っている。

「やっぱり、ルカートがくれたお茶が一番美味しいわね」

「暇を持て余しているだけあって、どの使用人よりもこういうことが得意なのよ」

「お褒めにいただき、光栄ですよ」

籐の椅子に腰掛けている姉二人に優雅に微笑んで、ルカートは窓際の壁に凭れながらカップに口付けた。

影の薄い姉婿は部屋の中央に置かれたソファに身体を沈め、まるで恐ろしいものを見るような目をしながら、姉弟の会話を盗み聞いている。姉婿の正面には父が座り、その隣には夫の装飾品のような母が、しゃんと背筋を伸ばして腰掛けていた。彼女は滅多に、自分から口を開くことはしない。

まるで人形のようなと、幼い頃のルカートが感じたそのままに。

「我儘も程々にしておかないと、今回ばかりは相手が悪い」

前触れもなく、父が言う。それが誰に対するものか理解しているルカートは、動じる素振りも見せず、分別ある壮年期の男性を気取っている父に、ゆったりと応じた。

「エルミナとは、結婚してもうまくいかないとわかつたんですよ」

「結婚など、してしまえば後はどうとでもなるものだ」

「……生憎、僕には甲斐性がないようで」

肩を竦めて、ルカートは笑った。

「僕は彼女を妻として愛する覚悟がないんですよ。彼女に自分の子供を産んで欲しいとも思わない。かといって、他の女を孕ませるようなこともしたくありませんしね」

「馬鹿なことを」

意図的に含ませた痛烈な厭味は、一笑されただけで終わる。

「そのお陰で、お前は我が家に引き取られ、何不自由なく育つこと

ができたということをお忘れですか？」

「もちろん感謝していただきますよ、お父さん」

にっこりと笑みを浮かべ、ルカートは乾杯する動作を真似て、ティーカップを軽く持ち上げた。

もしもファルドのような黒髪に生まれていたら、間違いなく引き取られることはなかっただろうことも知っている。自分を産み落とした女がどんな人物なのか、ルカートはほとんど知らない。ただ、子供の頃に一度だけ問うたときの父の返答を信じるなら、実の母親はこの都に流れ着いた売春婦で、身籠っている間の生活費と口封じの報酬を受け取ると、その後は姿をくらましたということだった。

くだらないことだと、ルカートは考えている。

話に聞けば、二人の姉の下には一人息子が誕生していたが、一歳を迎える前に流行り病であっけなく死んだらしい。悲しみの癒えぬ妻や娘達のために夫がしたことは、代替品を与えることだった。売春婦に産ませた子供が、たまたま男子だったから都合がよかっただけだろう。とは、穿った見方かもしれないが。少なくとも、自分の子供を孕んだ女を暗い夜道に放り出すほど卑劣な男ではなかった父に対しては、感謝すべきだろう。代替品が決して本物として受け入れられなかったことに気づくほどの繊細さは持ち合わせていなかった、という事実を差し引いたとしても。

「エルミナにはもつと別な男が相応しいし、僕にも別の女性が相応しい。それだけのことです。お父さんも、議員の娘と僕なんかと一緒にさせるのじゃなくて、どうせなら姉さんをどこかの貴族の息子と一緒にさせればいいんですよ。姉さんが完全な行き遅れになる前にね」

「まあ……っ」

顔色を変えた下の姉がきつく睨みつけるその視線を、ルカートは薄い笑みでかわす。

「今の、小競り合いだらけでろくに政治の話もできない議員連中の輪に、進んで加わる必要がありますか？ 連中は結局、金が必要な

んだ。なんだかんだと偉そうにしていながら、結局は金のある者には逆らえない。……そういう世の中ですよ、今は。エルミナの父親が勢力を持っているとは言っても、だからといって、資金元のお父さんより強いとは思えませんか？ 下手に議員と血縁関係なんて持つと、時世が変わったときに動き辛い。僕はそんなのはご免です。彼等とは付かず離れずの関係がいい、と教えてくださったのは、お父さんですよ」

我ながらよく回る舌だ、とルカートは内心で苦笑する。こういう生意気なことを言うから、母や姉達には嫌煙され、父にはむしろ歓迎されるのだ。

「お前はなかなか、野心家だな」

「僕はただ、面倒は嫌いだけです。お父さんが、それでもエルミナと一緒になれとおっしゃるなら……僕だって、了承しないわけにはいかないんだ」

心にもないことを口にして、ルカートは紅茶を飲み干す。そして口髭を湛えた父が少々陰湿な笑みを浮かべるのを見た。この中年男にとっては、息子の薄っぺらな建前を見抜くことなど簡単だろう。そして、息子のこういう軽薄さの裏に潜む打算　つまり、ルカートが父を本気で怒らせることは賢明でないと思っている事実も見抜いているのだ。そしてそのうえで、息子の言動を愛玩動物のささやかな反抗くらいにしか思っていない父の心理を、ルカートもまた知っていた。

馬鹿げたことだと思う。

しかしルカートは、それでもこの家族に「飼われている」しか存在理由を持たない。

「ルカート、皆にもう一杯ずつ紅茶を」

「はい、お父さん」

にこやかに応じて、ルカートは壁際から動いた。それは、ひとつの議題に結論が出たという合図でもある。エルミナの件は、もう二度と家族の間で持ちあがることはないだろう。

ルカートの給仕役は毎度のこと、だから彼の動きには、すつきりは無駄がない。

「お母さん、お菓子はいかがですか？　もしよかったら、義兄さんも」

慣れた物腰でティーポットを傾けるルカートに、母はにこりともしせず、義兄は愛想笑いを浮かべて、テーブルの中央に置かれた絵模入りの白い皿に手を伸ばす。

ルカートは、笑みを絶やすことはなかった。

それは、苦痛なことではない。上手に世の中を渡るための、もっとも簡単で単純な、ひとつの手段でしかないのだから。

しかし。

純粹そうに目を輝かせるファルドの顔が、ふと脳裏を過ぎる。

『ルカートは、それがどこにあるか知ってる？』

知らないさ、幸福の都なんて。

心の中で、ルカートは毒づく。

そんなものは、この世の中に実在しない。だからこそ、それは永遠に虚像の中に存在し続けるものなのだ、と。

ファルドは夕方になって、洗濯屋に顔を出した。宿からさらに路地をひとつ入ったその界限には、染物屋や鍛冶屋、印刷所なども建ち並んでいる。そこに石鹸の香りが混ざって、なんとも表現し難い不思議な匂いが立ち込めているのだった。

裏町の中でも、とくに貧しい人々が多く暮らす地区である。

大きな籠を抱えたファルドは、数日に一度はそこを訪れている。宿屋から出る洗濯物と、それからついでにラティフィーネとファルドの二人分の着替えなどを、洗濯してもらったためだ。安い割に仕事が丁寧だと、宿の主人は言っている。ファルドは、ラティフィーネの身の回りの世話だけでなく、宿屋の仕事の雑用も、最近では進ん

で引き受けるようになっていたのだった。

こういふ毎日は、楽しい。

褒められるために仕事をしているわけではないが、誰かのために何かをするのは嬉しいし、ありがとうと言われると、もつと嬉しい。それで皆が優しい顔になるのなら、自然とファルドも嬉しくなるのだ。

ただ、今はほんの少し機嫌が悪かった。

「ルカートってば、ルカートってば……っ」

ラティフィーネに、もらった焼き菓子について事情を話し、またしても彼の悪戯にひっかかったただけだという事実気づいたのが、ちょうど出掛ける前のことだったのだ。

「いつも意地悪ばっかりするんだから！」

ラティフィーネに言わせると、簡単に騙されるあんたも馬鹿ね、ということになるのだから、ファルドとしては釈然としない。

次こそは騙されないぞ、と決意する。ルカートを嫌いだ、とは思わないところが、ファルドのファルドたる所以である。

複雑な匂いのする通りを歩き、大きな小屋のような建物の前で立ち止まる。

「こんにちは」

その声に、奥から数人の女達が顔を出した。

ファルドから見るとおばさんの域に達した女性ばかりが五、六人、常にこの小屋の中や庭先で働いているのだ。

「いらつしゃい」

おばさん達の中でも最も大柄な一人が、ファルドから籠を取り上げた。

「今日はこれだけかい？」

「うん。明日中にお願いできる？」

「お任せあれ」

彼女は笑って答えると、軽々と籠を担いで奥へ引っ込む。そして、そこからファルドを手招きした。

「ちょうど、休憩中だったんだよ。時間があるなら寄っておいで」
「うんっ」

大きく頷いて、ファルドは中へ駆け込んだ。

ここの女性達は、全員が全員、ファルドに好意的なのだった。実に開けっぴろげで、お互いの悪口を平気で言い合うような空気に最初は驚いたものだが、彼女達は口が悪いだけで悪気はない。ラティフィーネよりかなり迫力があって、ちよつと声大きいだけ、ということがわかれば、馴染むのも早かった。

彼女達は自分達のことを、あぶれ者と呼び、それは世の中に馴染めない人達のことだとファルドは教わった。『いろいろあつて』としか彼女等は言わないし、彼女達もお互いの『いろいろ』については知らないらしい。

ファルドにしてみても、どうしてこの都に来たのかと訊ねられれば、やはり『いろいろな事情』があるのだし、それを事細かに話すことも、自分が壇上で売られていた奴隷だと説明することも難しいのだから、『いろいろ』について訊くのはよくないとわかっている。
「ウルカおばさん」

ファルドは、真つ先に一人の女性に声をかける。

その人は、ファルドと同じタークル人の容貌をしている。ファルドよりは髪の色が薄いものの、目の色ははっきりとした灰褐色である。痩せているが穏やかな顔立ちで、ファルドの勝手な想像では、お母さんくらいでもおかしくない年齢の人に見えた。

「嫌だよこの子は、ウルカに会いたくて来たのかい？」

「やっかみはおよしよ」

丸太に板を乗せただけの粗末なテーブルを囲んで、数人が派手に笑う。伸び放題の髪を首の後ろでひと束ねにし、衣服の袖を捲り上げ、化粧つ気などまるでない女達だ。皆手荒れは酷く、石鹸臭かった。

「あんたはいつも元気がよくて、羨ましい」

ファルドが横に座ると、ウルカは目を細める。彼女の顔色はいつ

もあまりよくない。だからファルドは、今日こそはとひとつの提案を口に出した。

「ねえおばさん、時間が空いたらラテイの所に来てよ」

「あんたが手伝っているっていう、占師の所へかい？」

「ラテイの占いは、とてもよく当たるんだ。おばさんが元気になる方法、ラテイが占ってくれるよ。僕、あんまり難しいことはわからないけど、もしもおばさんに困ったことがあるなら、きっとラテイの占いは役に立つと思うんだ」

真顔で言うファルドに、ウルカは　いや、そこに居る全員が笑った。それは、ルカートがファルドの話をちつとも聞いていないときのような悪戯っぽい笑みとは違い、どこか曖昧とした優しい笑い方だった。

「あんたの言う、そのラテイって占師は、ここいらでも評判だよ」

「失せ物が見つかったとか、どこかの娘と若者が無事に結婚話に漕ぎ着けたとか」

「その占師も、なかなか綺麗な子だそうじゃないか。ちょっと無愛想だって話だけどね」

口々に言い合う女達は、笑いながらファルドの頭を撫で回す。

「じゃあ、おばさん達みんなで来ればいいんだ」

ぼさぼさになってしまった黒髪を手で撫でつけながら、ファルドは得意になった。しかし彼女達は、先ほどと同じ曖昧な笑みを浮かべて首を振る。

「ねえファルド、あんたはとっても優しい子だよ」

宥めるように、ウルカが言った。

「あなたのお陰で、あたしらはとっても楽しい。でもね、ここに居るのは、あぶれ者なもの。みんながあんたみたいに、あたしらを受け入れてくれるわけじゃあないんだよ」

「でも……っ、ラテイは、おばさん達に意地悪なんか言わないよ！」

「ああ、そうだろうとも。ラテイはきつと、あんたと同じくらい優しい子だろうね。この洗濯屋を鼻屑にしてくれている宿のご主人や

奥さんだつて、あたしらを悪くは言わないだろうよ。けれど、そうじゃない人もいる。いや……本当は、そうじゃない人のほうが多いくらい」

「どうして？ おばさん達、とつてもいい人達ばかりなのに」

「そりゃあ……いろいろね。ここのおばさん達はみんな、いろいろな問題があるのさ。結局、あたしらは、この界限でしか生きていけないんだから」

優しいけれど、とても悲しい言葉だった。

ファルドにも、ウルカの言うことは少しだけわかる。表町でファルドが苛められたように、ここにいるおばさん達も、ここを出れば苛められるのかもしれない。

それは、とても悲しいことだ。

おばさん達の『いろいろ』の内容はわからないが、それでもやはり、ファルドは悲しかった。

「あなたの優しい気持ちだけ、受け取っておくよ」
ウルカは笑い、ファルドの髪を撫でた。

「暗くなる前にお帰り」

「また遊びに来ておくれよね」
見送られて、ファルドは小屋を出る。

空は、燃えているように赤かった。

「……幸福の都」

ぼつり、とファルドは呟く。

この都も、一応はそんな風に呼ばれているはずだった。けれど、笑顔で見送ってくれるおばさん達はこの都をどう思っているのだろうか、と。

ファルドは少し、混乱していた。

客足というのは、とても気紛れなものである。多いときには行列が絶えないのに、少ないときにはぱったり来ない。

いつものテーブルに商売道具を用意したものの、手持ち無沙汰で頼杖をつくラティフィーネに、同じく暇そつな宿の主人が声をかける。

「広場に、興行の芝居がやってきたというからなあ。年に一度、この都にやってくる一団があるんだよ。皆そっちに行ってしまったんだらう」

「芝居って、そんなに面白い演目でもあるってわけ？」

「女房の話だと、前の戦争の裏話を面白おかしく演じるとかどうとか。英雄と名高いアルティン公と、そのライバルだったカスタント伯の軋轢は有名な話だからねえ。結局、カスタント伯は今じゃ没落貴族だっていうじゃないか。……名を挙げられなかったほうは、行く末も惨めなもんだ。こういうときは、貴族と庶民とどっちが幸せなんだらうかと思うもんだよ」

「まっただわね」

それについては議論もしたくないので、ラティフィーネは簡単に受け流す。

「どうせ今日は客足もないだらうさ。あんただって若い娘なんだから、たまには遊びたくもなるだらう？ 興味があるなら行っておいで」

「悪いけど遠慮しておくわ。わたし、人ごみって好きじゃないもの。善意で言ってくれているのはわかったが、ラティフィーネはあつさりとして退けた。

そんなもの、わざわざ見なくても知っている。むしろ、吐き気がするだけだ。

戦争時代のことだ。娯楽で演じられるようになるということは、そ

の時代を笑い飛ばせるだけの余裕を持つ人々が増えたという意味では、むしろ喜ばしいことなのかもしれない。しかし、それはあくまで第三者の立場から見た場合のことで、ほとんど当事者の立場に近いラティフィーネにとっては、あまり面白い見世物だとは思えなかった。

家を出て丸四年以上、好き勝手に生きているとはいえ、ラティフィーネは一応、カスタント伯爵家の末娘である。実家とは縁を切ったつもりではいるが、一族が悪し様に笑われるのを見て喜ぶほど趣味は悪くないつもりだった。

「英雄も没落貴族も、やり方が違っただけで罪は変わらないわ。いくらこの国が勝ったとはいえ、大勢の人が不幸になったことには変わりないもの」

「まったく冷めた娘だ」

人の好い主人は、やれやれと笑いながら調理場のほうへ行ってしまった。戸棚の取っ手が外れているなどと言っていたから、修理でも始める気だろう。

「……今日は開店休業ってとこね」

その芝居とやらを見に行く気はないが、近所を散歩する程度なら、いい気分転換にもなるだろう。

ラティフィーネは、仕方なく立ち上がる。

しかし、戸口からこちらを覗き込んでいる少女と目が合った直後、外出は無理だと断念する結果となった。

「わたしに用があるなら入ったら？」

目が合ってしまったからには仕方なく声をかけると、少女は周囲を注意深く見渡して、それからラティフィーネのいる一番奥のテーブルまで突進してきた。

確か、ルカートの婚約者を名乗っていた人物である。名前はエル

ミナだったはず、とラティフィーネは記憶を手繰る。

「ルカートはどこ？」

エルミナは、唐突に問いを発した。

「あなた、彼の居所を知っているんじゃないの？」

「知らないわ」

少々面食らったラティフィーネは、しかし、あつさりと否定する。

「わたしは他人の行動を管理なんてしていないもの。興味もないわ」
「彼が頻繁にここに入入りしているっていうことを、わたしが知らないでも思っているの？」

「どういうわけか、出入りしているのは事実ね。でも、今日は見かけていないわ」

無然と応じながら、ラティフィーネは長い赤毛を掻き上げた。自分が誰からも好かれるなどは思ったこともないが、いきなり喧嘩を売られる心当たりもない。それを買う気もなければ、望んで関わりたいとも思っていないかったりする。そうでなくても、以前ファルドに余計なことを吹き込んで悲しませたエルミナを、ラティフィーネは喜んで歓迎する気分にはならないのだ。

「ここで待つなら、どうぞ。ごらんの通り客はいないし、邪魔ならわたしは出掛けるから」

「……あなたみたいな女の、どこがわたしよりいいって言うの」

エルミナは、フリルをあしらった水色のドレスの端を握り締めながら、ラティフィーネを睨みつける。

甘ったるい香水の香りのせいばかりではなく、言われた内容が理解できずに、ラティフィーネは眉をひそめた。

「わたし、ルカートとは完全に婚約解消になったわ。あなたの占いの通りよ」

「……そう」

「涼しい顔をして！ 何か仕組んだんじゃないでしょうね？ そうでなくちゃ、ルカートがわたしを嫌う理由なんてどこにもないもの」
「悪いけど、わたしは何かを仕組んでやるほど、あなた達の関係に

興味はないわ」

「じ、じゃあ……どうしてルカートはわたしと会ってくれようと思えないのっ？ こんな一方的な話、あんまりじゃない！」

エルミナは地団太を踏み、今度は両手で顔を覆ってしゃがみ込んだ。行動は迷惑このうえなくらいに無茶苦茶だが、とりあえずは必死のようである。

ラティフィーネはどうにか溜息だけは堪えて、商売道具の水鏡の前に、再び腰を下ろした。

「それが依頼だって言うなら、占ってあげるわよ？ あなた達の今後について」

それはほとんど投げ遣りに近い言い方だったが、エルミナは弾かれたように顔を上げる。

「あなたと彼が、また親しい関係になれるかどうか……その方法がわかれば、少しは気が済むんじゃない？ まあ……この間も言った通り、信じる信じないは自由だけど」

「本当に？ 占ってくれるの？」

「ちゃんと代金はいただきますわ」

すかさず言い置いて、ラティフィーネは水鏡に両手をかざす。

水に沈めた水晶が、ほのかな光を発し。

それは、突然割り込んだ声に中断させられた。

「無駄だよ。占いの必要はないと思うね、僕は」

「……ルカートっ」

「やあ、エルミナ。君とまさかこんな所で会おうとはね」

降って湧いたように現れたルカートは、軽く右手を挙げ、優雅な足取りで二人の側にやってきた。

「ご機嫌はいかがかな、ラティフィーネ」

「……悪いわよ、見ての通り」

「おや、それは残念。一度くらい、きみの笑った顔を拝見したいものだけど」

にこやかに乱入してきた青年は、まったく悪びれた様子もない。

「二人が顔を合わせたのなら、確かに占いの必要はないわね。お互いの気が済むまで、話し合いでもなんでもすればいいわ」

ラティフィーネは、さっさと席を立つ。

その腕を掴んだのは、ルカートだった。

「僕はきみに用が会って来たんだよ、ラティフィーネ。僕にはエルミナと話すことは何も無い」

「彼女はそうでもないんじゃないの？」

掴まれた腕を振り払って、ラティフィーネはエルミナを見た。

彼女はそこに立ち尽くしたまま、半ば青褪めて想い人を見つめている。その視線に気づいているはずのルカートは、しかし、まるで頓着していないように笑みを浮かべているのだ。

「ルカート……わたし、あなたとちゃんとお話がしたいわ」

「話って？ 僕はもう、きみと関わりはないはずだよ。僕達が再び婚約することはあり得ないし、そのことに関しては僕達の父親同士でも決着したはずだ」

にこやかな笑みこそ浮かべているが、ルカートが非常に冷ややかな感情を抱いていることは、ラティフィーネにも覗えた。

エルミナが、それを感じなかつたはずはない。それでも彼女は、引き攣った笑みを浮かべて食い下がる。

「でも、わたし達二人の間では、なんの話し合いもなされてないわ。わたしは、どうしても納得ができないのだから。どうして突然、あなたがわたしを嫌いになったのか……その理由がわからないのだから」

「僕は、きみを嫌ってなんかいないよ」

ルカートの声は、いっそ残酷なまでに優しい。愛情がないからこそ振りまくことのできる、無責任な賛辞のようでもある。

「今でもきみを美人だと思うし、きみのような気性の持ち主は、宝石達には愛されるだろうと思っっているよ。でも僕は、妻にしようと思っただけにはきみを大切には想っていないし、想えそうもない。僕の我儘だと思ってくれていいよ。本当のことだから」

「……わたし、別の男と結婚させられるわ」

ほとんど泣きそうな声で、エルミナは言う。

「うんと年上かもしれないし、醜い男かもしれない。わたし、そんなのは嫌よ……絶対に嫌！」

「きみのお父さんは、きみが不幸になるような結婚は望まないと思うよ。彼はなによりきみを大切にしているように見えるもの。今頃、僕のことを軽薄な男だと罵っているのじゃないかい？」

優雅に微笑むルカートは、エルミナのほうへ近づくと、彼女の白い手を取って、そこへ恭しく唇を軽く押し当てた。

「さよなら、エルミナ」

穏やかに、しかし有無を言わせぬ目つきで以って、彼は別れを宣告する。

ラティフィーネは、この青年の後頭を蹴り倒したい衝動に駆られた。はつきり言って、エルミナのことは好きではない。しかし、ルカートの態度はそれ以上に癪に障るもので、とても喜んで見られるものではなかったのだ。

無言のまま、エルミナは逃げるようにして食堂を出て行った。

「……最低ね」

思わず、ラティフィーネは吐き捨てる。

「他にどうしようもないさ。彼女を徹底的に罵るほど、僕が彼女を嫌いじゃないというのも事実だし、だからといって恋人同士に戻るほど好きでもないんだから」

「婚約までしていた仲なのに、薄情なものなこと」

「彼女のこと、少し前までは気に入っていたんだ。今はきみを好きだけだ」

田舎の小娘なら一瞬で恋に落ちそうなルカートの微笑みを、ラティフィーネは鼻で笑うことで、受け流した。

「あなたは誰のこととも好きじゃないわよ」

断定的に告げて、ラティフィーネは三度、椅子に腰を落ち着ける。「おや、きみには僕がそんなふうに見えるのかい？」

「実際、そうでしょう？ あなたは自分しか信用していないし、誰かに愛されることを期待してもいないわ」

「そう。きみは随分……僕のことには詳しいような口を利くんだね」
わずかに目を細めた後、ルカートはいかにも楽しそうに笑った。

「それって、きみ自身がそうだからじゃないのかい？」

「わたしには、ファルドがいるわ。一緒にしないで」

「だったら、僕だってファルド君のことは大好きだよ。馬鹿みたいに素直だし、可愛いし、単純だけど頭は悪くないし、お行儀も良いきつと……」
「僕達」には、ああいう子が必要なんだ。違うかい？」

ラティフィーネは答えなかった。不覚にも答えられなかった、と言うほうが正しかったかもしれないが。

ルカートは小さく笑い、そこで話題を切り替えた。

「ねえ、ラティフィーネ。きみはどこで占いを習ったんだい？」

「なによ、突然」

「ちょっとだけ調べただけけど、水鏡を使う占いはとくに東の地方……それも、もともとは貴族や金持ちの間で流行したものなんだってね。きみのその赤い髪も、どちらかというとその地方に多いものらしいし」

ラティフィーネの反応を覗うようにして、ルカートは正面の椅子に腰掛ける。

「何事にも例外はあるわ」

「それはそうさ。だから、僕は最も大きな可能性を示すと同時に、きみに直接質問をぶつけているんじゃないか」

ルカートはまるで傷ついているかのような表情を浮かべて、その後で悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「僕は今のところ、きみに対する興味心に支配されているんだよ」

「……確かに、わたしの生まれはこの都よりは東だわね」

ルカートを満足させてやるつもりは毛頭なかったが、ラティフィーネにとって、隠しだてするほど立派な過去もない。この暇人の興味心とやらを満たしてやって、それで追い払うことができれば、そのほうがいいと考えたのだった。

「わたしは占師に育てられたの。預けられたと言うほうが正解ね。わたしの上には姉ばかりで、両親はどうしても跡継の男の子が欲しかったのよ。それで占師を雇って、次こそ息子が生まれるようにあれこれ手段を尽くしたみたいだわ。でも、結局生まれてみれば、またしても女だった。そういうわけで、必要無いと判断されたわたしは、責任をもってその占師に育てられることになったのよ。だから占いは身近だったし、幸いにも才能にも恵まれていたってということね」

「その占師がきみの師匠だったってわけ？」

「人使いの荒い、お婆さんだったわ。嫌いじゃなかったけれど。十歳のときにその人が死んで、わたしは実家に引き取られたけれど、結局十四で家出したのよ。それで、ファルドに会ったというわけ。後は、こうして旅をしているわ」

一気に言い終えて、ラティフィーネはルカートを一瞥する。

「きみの実家は、なかなか裕福な家だったみたいだね」

「占師を雇うほどには裕福だったみたいね。望まない子供を育てるほどの余裕はなかったみたいだけれど」

この言い方は、ルカート好みであつたらしい。肩を震わせて、やつぱりきみとは気が合いそうだ、などと笑っている。

「気を悪くさせたのなら謝るよ、ラティフィーネ。ただ、きみが豪華な首飾りの代わりにファルド君を手に入れたという話を彼の口から聞いたものだから、一体どういう経緯の娘が今じゃ占師なんて商売をしているのか、気になっただけなんだ」

「……あらそう」

「それにきみのその 耳飾り。古いものみたいだけど、悪い品じゃない。僕は怠惰な暇人だけれど、一応、装飾品の善し悪しくらい

は学んでいるんだ」

「そりゃあ古いでしょうよ。代々の占師の形見だもの。それに、ちよつとばかり値のあるものじゃないと形見としても有り難くないわ」
人差し指で細い金環を指先で弾きながら、ラティフィーネはあっさり認める。

それは、認定証のようなものだった。占師が正当な後継者を認定するための、一種の伝統のようなものである。

「もういいでしょう？ 気が済んだのなら、帰ったら？」

「冷たいなあ、きみは。代わりに、僕の身の上には興味を持ってくれたりしないのかい？」

テーブル越しに身を乗り出してくるルカートに、ラティフィーネは頬杖をついたまま他所を向いて応じる。

「興味はないけど、話したいなら話すといいわ。……わたしも今日は暇だし」

「僕って救われないなあ」

「言うておくけど、わたしにはあなたの話に同情してやる準備もないし、慰めるのも趣味じゃないわよ」

本当のことを、ラティフィーネは気兼ねすることもなく口にする。途端に、ルカートはテーブルの端を叩いて笑い始めた。

「きみって最高だね、ラティフィーネ。きみのそういうところが、僕にはたまらない」

何がそんなに可笑しいのかと思わないわけではなかったが、疑問を声に出すのも面倒で、ラティフィーネはとりあえず黙っておいた。このどこか捻くれまくった装飾品店の息子は、捻くれまくった頭の構造ゆえに、常人とは感性がずれているのだ。
やがて笑いを静めたルカートが、席を立った。

「暇だったら、芝居でも見に行かないかい？ 広場に芝居小屋が出ているんだ」

「遠慮しておくわ、悪いけど」

「そう。じゃあ……ファルド君は？」

「洗濯屋よ。最近、あの子はそこがお気に入りのようだから」

「……洗濯屋、ねえ」

妙に絵になる仕草で首を傾げながら、ルカートは戸口に向う。じやあまた、と言いつつ、彼はそのまま去っていった。

ラティフィーネは、たつぷり疲れた気分になって、溜息をつく。とりあえず、喉が乾いたので水でも飲もうと、今度ばかりはやつと誰にも邪魔されることなく、席を立ったのだった。

その夜ファルドは、ベッドに潜り込んで本を読んでいた。うつ伏せになって枕を胸の下に入れ、そのまま腕を伸ばして本を読む姿勢が、お気に入りである。

ルカートに貰ったその本を読むのは、二度目だった。決して薄くはない本だが、一度目よりは時間をかけずに読むことができる。

内容は、悪い魔法使いに攫われてしまったお姫様を助けるために選ばれた若者が竜の背に乗り、様々な怪物を倒して旅をするという物語だ。お姫様は物語の中では長い金髪をしているのだが、ファルドは勝手に、このお姫様をラティフィーネに、若者を自分に置き換えて、物語の世界をあれこれ想像している。

と、その本が突然、取り上げられた。

「もう寝なさい」

強引なお姫様　もとい、ラティフィーネの登場である。ファルドはごろりと壁側に寝返りを打って、ラティフィーネが潜り込むための場所を提供する。

「僕、せっかくラティを助けに行くところだったのに」

「どつやって助けに来るの？」

「ええと、竜の背中に乗って。大きな剣を振り回しながら、悪者を蹴散らすんだよ」

得意そうにファルドが言うと、ラティフィーネはほんのわずかに

笑みを浮かべ、ベッドに滑り込んできた。

ラティフィーネが一番優しくなるのは夜だと、ファルドは思う。ファルドが暗闇を怖がって震えていたとき、ラティフィーネは背中を抱いてくれたし、気晴らしになるように物語を聞かせてくれたこともある。普段の生活の中で、色々なことを一番話しやすいのも、この時間だった。

「ねえ、ラティ」

身体を丸めながら、ファルドは少し甘えた声を出す。

「今日、洗濯屋さんに行ったら、ウルカおばさん、身体の調子がよくなってお休みしていたんだ。明日は、元気になっていると思う？」

「元気だといいわね」

「ねえ今度、暇なとき……ラティの気が向いたときでいいから、一緒に来てくれない？ おばさん達、ここには来られないって言うんだもの。だから、もしもラティがおばさん達の所に行ってくれたらいいなあ……僕、思うんだ」

「おばさん達に、わたしを連れてこいって頼まれたの？」

「ううん、違うよ。僕が、そうだったらいいと思ったただけ……」

「だったら、行かないわ」

ラティフィーネの返事は、ほとんど即答だった。

「占いは押し売りじゃないもの。わたしは自分の占いを信じているけれど、でも、誰もがそれを必要とするとは思わないわ。本当は、自分の未来は自分で決めるものだもの。呼ばれもしないのに占師がでしゃばるのは、それは、親切じゃなくて傲慢っていうものよ」

「……うん、そうだね」

素直に、ファルドは頷く。

ラティフィーネから、何度も聞かされていることだ。占師というのは、幸せの使者などではあり得ない。誰かの幸運の手助けになるような助言をすることは可能でも、それが現実のものとなるか架空のもので終わるかは、人それぞれなのだ。金持ちの権力者達は、自分達が幸運を独り占めするために占師を何人も困っていることも

あるが、そんなものは馬鹿げた行為だとも。

「……僕、ウルカおばさんがもつと元気になってくれたらいいって思うんだ。いつも、ちょっと寂しそうなんだもの」

「あんたのその気持ちが、おばさんに伝わるといいわね」

ラティフィーネはそう言うと、枕元に置かれたランプに身を乗り出し、炎を吹き消した。

真つ暗闇が、降りてくる。

「……おばさんに訊いてごらん下さい。もしも占って欲しいことがあつて、それでもここへ来られないなら、わたし、あんたと一緒にそこへ行くわ」

欠伸交じりのラティフィーネの声に、ファルドはこっそり笑みを浮かべる。まるで、どうでもいいような感じの言い方だが、ラティフィーネはいつも決して、そんなふうには思っていないのだ。

「おやすみ、ファルド」

「……おやすみなさい」

ありがとうと言う代わりに、ファルドは体をくねらせて、ラティフィーネの腕に抱きついた。

こんな夜は、きつと楽しい夢を見る。

ふんわりと暖かくて、それはきつと、幸福な夢なのだ。

ファルドは知っている。

幸福は　そう、こんなところにも溢れている。

食堂が賑やかになる夕食時を見計らって、ラティフィーネは商売道具を片付ける。酒が入ると冗長する男どもに構うのも構われるのも好きではないし、あまり喧しい環境では、集中力も失せるからだ。「ラティフィーネさん、あんたにお客さんだよ」

調理場から顔を覗かせて主人が告げたのは、その日もそろそろ商売を終えようとしていた頃だった。

その声に周囲を見回すが、既に幾つかのテーブルで食事をしている数人以外、新しい客は入っていない。怪訝な顔をしたラティフィーネに、主人は身振りだけで、裏口だと告げた。

裏口は、調理場を抜けた所にある。わざわざそんな所から訪れる者がいるとすれば、余程の物好きか、何か事情があるかのどちらかしかない。

前者であればルカートあたりの新手の悪戯か何かだろうか、と一瞬考えたラティフィーネだったが、とりあえず裏口のほうへ足を向け、そしてその客は後者であると悟った。

背中を丸めるようにしてそこに居たのは、痩せた女だった。夕焼けのせいで多少明るく映る髪は、しかし間違いないくタークル人の黒髪である。一見すると年齢は五十に近いくらいだが、顔色がよければもつと若く見えるのかもしれない。彼女がよければもつと若く見えるのかもしれない。

彼女はラティフィーネを見ると、窪んだ目の奥で笑った。その灰褐色の瞳は穏やかで、それはファルドの好奇心に輝くものとは明らかに異なっていたが、好感を誘うものだ。

ラティフィーネは、この女性が誰であるのかすぐに察することができた。

「ウルカおばさん、というのはあなたのこと？」

「驚いた。さすがは占師さんだ」

「ファルドがいつも話しているから。こんなのは、占いではないわ」

他の誰に対する態度と変わらず、ラティフィーネは素っ気ない。ウルカはそれを気にする様子もなく、穏やかな笑みを浮かべた。笑うと目じりの皺が濃くなり、もつと歳を食ったように見えるが、優しそうな印象はかえって強調される。

「占いだつたら、店の中でしているけど……」

ラティフィーネが中に入るように勧めると、ウルカは荒れた両手で胸元を握り締め、首を振った。

「あたしみたいな卑しい女が表から堂々と出入りしては、迷惑になるから」

「そう。じゃあ、道具を持ってくるわ」

にこりともせず、ラティフィーネは即断した。道具と集中できる環境さえ整えば、基本的に占いなど、場所は選ばないものなのだ。

すぐさま、ラティフィーネは食堂に戻った。調理場にあった丸椅子をひとつ拝借して地面に置き、その上に水鏡を乗せる。

少し離れたところでは、子供がもつと小さな弟か妹をあやしていて、さらに遠くからは荷車が忙しく走り去っていく音が響く。

そんな夕暮れの裏通り、若い娘とその母親ほどの女が木製の丸椅子を挟んでしゃがみこんでいる様子は、少しばかり間抜けな構図ではあるが、当人達はいたって真面目であった。

「何を占えばいいの？」

ラティフィーネが単調に問い掛けると、ウルカは周囲をぐるりと見渡して、声を落とす。

「あたしがここで占ってもらった内容を、あの子には黙っていてくれるかい？」

「わたしは占師だもの。たとえ助手にだって、客の秘密は漏らさないわ」

「それなら……」

肩をすぼめて、ウルカは慎重な小声で告げる。

「あたしの息子は、どうしているだろうかと思ってね」

「息子？」

「……昔、ね。事情があつて、ほんの小さな頃に生き別れになつてしまつただけけれど、あたしはずっと若い頃に一度だけ、子供を産んだことがあるの。……この都に来て、すぐのことだった」

遠い目をしたウルカは、ひび割れた唇で微笑んだ。

「こんなことを言つたら……気を悪くするかもしれないけれど、あの子を見ていると、見ることでできなかった息子の成長を、見ているような気がしてね」

「息子さんは、今どこに？」

「……さあ。ずっと遠くかもしれないし、案外近くかもしれないし。あたしはそれさえ知らないのさ。元気で生きていれば……もう、二十歳を超えているはずだけどね。それじゃあ、占えないかい？」

「やってみるわ」

ラティフィーネは、水鏡に両手をかざした。

水鏡の底の水晶が、ほんのりと光を放つ。水面が、わずかに揺れる。

見えたのは、ただの暗闇だった。

つまり、それは失敗を意味する。ラティフィーネにはウルカの息子を知る術がないし、ウルカ自身がほとんど知らないのだから、これは難しい占いだつた。

ラティフィーネは、一度呼吸を整えて、再度意識を集中する。

今度は、誰かの後ろ姿が見えた。

青年らしい。顔は見えないが、ぼんやりと見える彼には、生命の光が見える。

「きつと、息子さんは元気よ。場所ははっきりしないけれど……ここよりも南のどこかで生きているわ。ずっと南だと思う。それ以上のことは……わたしには、わからない」

「……そう。でも、よかつた」

ウルカは頷いて、それから突然咳き込んだ。胸と口元を押さえ、背中を丸めて何度も咳を繰り返す。

「身体……そんなによくないの？」

思わず痩せた背中を撫でてやりながら、ラティフィーネは問い掛ける。

「あたしは若い頃から丈夫じゃなくてね。ああ……ありがとう、もう大丈夫」

そう応えたものの、咳はしばらく治まらない。

ラティフィーネは、直感していた。もしかしたら、彼女の身体は、もう随分悪いのかもしれないと。

「あたしは、長生きはできそうもないから……あんた達がこの都にいるうちに、一度くらい占ってもらおうと思ってね」

ありがとうと繰り返し、彼女が取り出した硬貨は、手垢で真っ黒に汚れていた。

周囲には、すっかり黄昏が降りている。調理場から路地に美味しそうな匂いが広がり、先ほどまで響いていた子供の声も消えてしまった。

ラティフィーネは、帰路に着こうとするウルカを呼び止めた。

「あなたがいなくなれば、ファルドは深く悲しむわ。あの子は……あなたを自分のお母さんみたいに想っているの」

ウルカは、窪んだ目の奥で微笑む。

「わたしは、ファルドの姉にはなれても母親にはなれないわ。いつもファルドがお世話になっているから……だから、これはお礼よ」
決して代金を返すわけではないのだと滲ませて、ラティフィーネは、ウルカの荒れた手を取り、そこへ硬貨を戻した。

「少しでも滋養のつくものを食べて……もっと、厚着をしたほうがいいわ」

言いたいことだけを言い、ラティフィーネはさっさと踵を返す。

無言で水鏡と椅子を片付け始めたラティフィーネの耳に、もう一度、ありがとうという声が届いた。

完全に彼女が見えなくなった後で、ラティフィーネは溜息をつく。なんだか、嫌だった。

彼女のことが、ではない。ファルドがあ的女性に惹かれる理由に

嫌でも気づかされて、それが自分にはない、穏やかさや優しい笑顔であることに、少々の恨めしさと諦めを覚えずにはいらなかったのだ。

商売道具を全て片付け終えた頃、宿の手伝いで買い物に出ているファルドが戻ってきた。

「ウルカおばさんがここへ来たって本当？」

早速、聞きつけたのだろう。調理場に荷物を届けた後、ファルドは目を輝かせてラティフィーネのもとまで駆け寄ってくる。

「洗濯物を届けて、その後、ラティと会ったんでしよう？」

「ええ、会ったわよ」

足を組んだままテーブルに頬杖をついていたラティフィーネは、何事もないように応じた。

「おばさんのこと、占ったの？」

「占ったわ」

「僕、占って欲しいことがあるならラティに洗濯屋さんに来てもらって話、ちゃんとしたのになあ。僕に内緒でここへ来るなんて変だよなあ？」

ファルドはラティフィーネの腕に縋るようにして、すり寄ってくる。

ラティフィーネは、頬杖を外して身体を起こした。

「そんなこと、おばさんの自由でしょ。たまたまここへ来る用事があったから、ついでに占って欲しかったのかもしれないし」

「どんなこと？ おばさん、どんなことを占ったの？」

「それは言えないわね。わたしは占師だもの。お客の占いの内容を、簡単に他の人に言い広めるわけにはいかないわ」

「そうか……うん、そうだね。でも、悪い結果ではなかったでしょう？ おばさん、喜んでた？ 笑ってた？」

ファルドは立て続けに短い質問を口にして、返事をねだる。その無邪気すぎる様子に、ラティフィーネはささやかな苛立ちのようなものを感じたが、それを認めるのも癪で、素知らぬふりを決め込んだ。

「おばさん、とてもいい人だったでしょう？　ねえラティ、きつとラティもおばさんのことを好きになるよ」

ファルドはまるで楽しい想像をしているかのように、にこにこ笑顔を振り撒いている。

「……ねえファルド、あんた、お母さんが欲しいと思う？」

つつい声に出して訊いてしまった後で、ラティフィーネは後悔した。欲しいと言われてもどうすることもできないし、いらないと言われても素直に喜ぶとは思えない。

ファルドは笑顔をおさめ、なにやら考え込むような顔をして、返事とは別のことを口にした。

「ラティは、お父さんやお母さんに会いたいと思わないの？」

それは、まったく単純な質問のようでもある。しかし、これは予想外の切り返しで、ラティフィーネは数秒の沈黙の後、思わない、とだけ答えた。

「どうして？」

「どうしてもよ」

長い赤毛を肩越しに払って、ラティフィーネは吐息する。

「いいこと？　両親に会いたくないなんていうのは、あんたみたいに両親というものはきつと暖かくて優しい存在なんだっていう幻想を持っているか、たまたま偶然にも善良な両親に恵まれた幸運な人間の吐く台詞だね。わたしは、そのどっちでもないもの」

「ラティは、お父さんやお母さんを、嫌いな？」

「……嫌いじゃないわよ。ただ、好きじゃないだけ。憐れな人達だとは思っけど、それだって同情じゃないのよ。今は苦労しているみたいだけど、いい気味だと思わない代わりに可哀想だとも思わないわ」

それは、本心だった。ただ、改めて口に出すのは初めてというだけで。

「ラティモ……『いろいろ』だったの？」

何もわかっていないような　もしかしたら、わかっているからこそなのかもしれないが、ファルドの灰褐色の瞳はどこまでも澄んでいて、ラティフィーネは内心で少し、うるたえる。

「誰にだって、いろいろあるのよ。わたしもあんたも、ウルカおばさんも、多分あのルカートにもね」

なんだか八つ当たりをしている気分になって、ラティフィーネはこの話題を早々に切り上げるべきだと思った。

「わたし、お腹が空いたわ。食事にしましょう」

「うん。僕もお腹へこぺこだよ」

即座に笑みを浮かべるファルドは、一方的に話を打ち切られたことなど、まるで気にした様子もない。

ラティフィーネは、だからまた、自己嫌悪で胸の奥が気持ち悪くなる。

ファルドは単純で素直だが、ウルカを母親のように慕っても、彼女を自分の母親だと錯覚するようなことはないはずだ。きつと純粹に、穏やかで優しい彼女のことを好きなのだろう。そしてそれは、ラティフィーネが口出しする範疇の問題ではないのだ。

「ねえ、ラティ」

不機嫌に黙り込むラティフィーネの顔を、ファルドは下から覗き込む。

「僕、お母さんは欲しいけど……いたらどんなだろうって思うことがあるけど、でも、僕にはラティがいるもの。僕、寂しいとか思わないし……ええと……だから、僕、やっぱり今は、お母さんはいらないよ」

「そんなこと……無理して言わなくてもいいことだわ」

「僕、無理なんかしてない」

「……わかってるわよ」

ファルドの目を見る勇氣はなくて、ラティフィーネは視野に入つた黒髪を、くしゃくしゃに撫でた。

「わたしもあんたがいてくれるお陰で、ちっとも寂しくないもの」「よかつたあ」

ファルドは嬉しそうに声を上げ、じゃれるようにしてラティフィーネに抱きついてくる。

抵抗もしないまま、ラティフィーネは数日前のルカートの台詞を思い出していた。

『きつと……「僕達」には、ああいう子が必要なんだ。違つかい？』
どうしようもなく捻くれて、自分から誰かを信用できないような人間には、恥ずかしいくらいに堂々と好意を示してくれる存在が必要なのだ。そうでないと、自分がここにいるという現実すら、空々しく思えてくるから。

ああいうことをさらりと口に出すルカートは、口と尻の軽い素振りにはしていても、意外に侮り難い。

ひよつとしたら、何もわかっていないのは自分だけなのではないだろうか 仮にも占師のくせして。

頭の端で自分自身に毒づきながら、ラティフィーネはまったく違うことを口にする。

「わたし……本当にお腹が空いたわ」

ファルドは、そんなラティフィーネの肩に顎を乗せたまま、くすくすと笑うのだった。

裏町の中でも最も貧しい人々の暮らす地区を、表町の人間は奴隷街と呼ぶ。つまり、人間の住む場所ではない、と。そこには文字通り、もとは奴隷だった人々が多く暮らし、過去に罪を犯した者や売春婦崩れの女達、先の戦争ですべてをなくした世捨て人、その他様々な理由で陽のあたる場所から追いやられた人々が混ざり合って、

ひとつの集落を形成している。

ルカートは、こういった場所に足を踏み入れるのは初めてではなかった。都中、どこへだつて一度は足を運んだことのある彼である。ただ、ここへ来たのは数年前に一度きりのことだった。

表町で育ちながら、どうしてもその中に居心地のよさを感じられない苛立ちを持って余して、どうせなら正反対の領域になら何かを見出せるかもしれないと、淡い期待を抱いて足を向けたのだ。もっとも、そんな期待など、すぐに崩れ去ってしまったが。

この界隈に暮らす人々がルカートに向けたのは、胡乱な者を見るような目つきであり、同時に猜疑心の塊であるようにも見えた。皮肉にも、ルカートが自分の家族やその親戚達に向けるものと、ほとんど同じものだった。

人々は今にも倒壊しそうな粗末な小屋に住み、そこでの生活だけに縋って生きている。甘い菓子も暖かいスープも、肌の上を滑るような上等な衣服も、柔らかいベッドも知らずに。

これが、表面上では幸福の都と呼ばれている都の正体なのだ。人々は、とりわけ表町に暮らす人間は誰も、追いやられた者達の素顔を見ようとしなない。そうして、この都を幸福の都だと呼ぶ。

「……救いようがないのはどっちなんだろうね」

やれやれと吐息して、ルカートは視線だけを斜め右下に移した。

ファルドはルカートの独り言など耳に入っていない様子で、黙々と前を向いて歩いている。その子供らしい頬は期待に膨らんでいて、悲観的とか後ろ向きなどという描写はことごとく似合わない。

ファルドは異質なのだ、とルカートは思った。

たまたまラティフィーネが助手だと言い張っているだけで、この少年は間違い無く奴隷の身の上である。本人も、それをどうやら理解していて、そのくせに、明るさを失わない。つまり、この界隈で暮らす人々に常に付きまとっている暗い影が、ファルドにはまるで感じられないのだ。

「きみって不思議だね」

まあ、ラティフィーネの教育に因る部分も皆無ではないのだろうが、とは心の中で付け加える。

しかし、今度の眩きも、ファルドは聞いていないらしい。

ルカートは少しだけ意地悪な気分になって、わざと大きな声を出した。

「ファルド君は、僕のことなんてちつとも構ってくれないんだ」

「え、なに？」

「だからさ、さっきから僕のことを置き去りにして、きみは何を考えているのだろうっていうことだよ。きみがこれから行く家って、そんなに大事な人がいるの？」

「ウルカおばさん、だよ」

口の端を尖らせて、ファルドは言う。

「おばさんの家にお見舞いに行くんだ。おばさん、ここのところずっと体調がよくないっていうから」

「ああ……そうだった」

鼻の頭を掻きながら、ルカートは視線を空へ泳がせた。ただなんとなくついてきた暇人にとってはどうでもいい事だったが、確かにファルドはそんなようなことを言っていたような気がする。洗濯屋で働いているおばさんの中の一人なのだ。

「それって、まだ遠いのかい？」

「ええと、そろそろこの辺りだと思っただけだ。僕も、来るのは初めてなんだ」

きよるきよると周囲を見渡し、ファルドは首をかしげる。

ルカートも一応それに習ってみたが、その女性に心当たりすらないのだから、見当がつくはずもない。表町の馬小屋よりも粗末な家が密集して建ち並び、どこからどこまでが一軒なのかすら、わからないような有様だった。

「あ、多分あの家だよ！」

突然、ファルドが声を上げて駆け出す。

その軒下付近には、一人の老人が座り込んでいた。薄い頭髪も伸

び放題の髭もほとんど白く、そして薄汚れている。昼間だというのに酔っ払っているのか、ぶつぶつと独り言めいたことを呟いていて。そして、その老人の右足は、膝から下が無かった。

先の戦争の生き残りだと、ルカートにはわかった。貧困層の男達は、ほとんど根こそぎ危険な戦場に送り込まれたのだと、知識として知っている。そして、最も安全な場所で利益を貪り安穩としていたのが、大半の貴族や自分の父親のような一握りの豪商であったと。ルカートとは違い、ファルドはなんら気後れすることもなく老人の前にしゃがみこむと、明るく声をかけた。

「お爺さん、こんにちは。ここは、ウルカおばさんの家だよな？」

「……………ああ？」

老人は、剣呑とした目つきのまま顔を上げる。そうして、目の前のファルドと、遅れてやってきたルカートを見比べた。

「あ……………あんたは……………」

瞬間、老人の顔色が変わる。彼は、垢と皺に埋もれた顔を驚愕に強直させ、濁った両眼を見開きながら、腰を浮かせた。そして、杖を手にしながらもほとんど這うようにして戸口へ急ぎ、中に向かって早口で喚いた。

「ウルカ、ウルカよう……………！」

老人の行動は、まるで常軌を逸した者のようである。

「お前さんの息子が……………坊が帰ってきたぞ！」

その言葉に、ファルドとルカートは、思わず顔を見合わせた。

「……………おばさん、子供がいたのかな」

神妙な顔つきで、ファルドが呟く。

ルカートは素っ気なく、肩を竦めた。気のせいではなかったとしたら、老人がじつと見つめていたのはファルドではなくて自分のほうだ。厄介なことにならなければいいと、今回ばかりは、簡単にファルドについて来た我が身の軽率さを呪う。

「おばさん、こんにちは」

しかし、ファルドはいつもの笑顔を瞬時に取り戻して、家の中に

入ってしまった。しかも、ルカートの腕を引いて、である。

仕方なく廃屋のような家の中に足を踏み入れたルカートの目に飛び込んできたのは、粗末なベッドと、その上で半身を起こした痩せた女の姿だった。

「おばさん、僕、心配で来ちゃった」

「おやおや……こんなところまで。嬉しいお客さんだこと」

ウルカは駆け寄ってきたファルドに目を細め、それからルカートを見て会釈した。

美しくはない女だと、ルカートは思った。なにより痩せすぎだし、顔色も悪い。明り取りの窓だけでは薄暗い部屋の、その灰色のような空間と同化して、女は瀕死の老女のようにも見える。

それなのに、わずかに笑みを刻んだその目の奥は、とても穏やかな光を湛えていて、ルカートは目が合った瞬間、呼吸を止めた。

彼女の眼差しは弱々しいほどなのに温かく、荒んだ生活を長く続けた者の目つきとは思えない。

それは、不意打ちに違いなかった。

こんなに棘のない、かといって媚びるでもない、優しくて温かい視線を誰かに向けられることに、ルカートはまったくもって慣れていなかったのだ。

期待することなど、とつくにやめてしまったから。

それは、蔑みや拒絶の視線よりもあっさりとして、ルカートの心を傷つけた。

「息子だ、お前さんの息子が帰ってきたんだ……！」

先ほどの老人は、同じ言葉を繰り返しながら、狭い部屋の中で座り込んでいる。

ウルカは咳き込み、ファルドが痩せた背中を撫でた。

「おばさん、大丈夫？」

「ああ……大丈夫、ありがとう」

「ねえおばさん、おばさんには子供がいるの？ さつきからお爺さん、同じことばかり言ってる」

ファルドは、子供らしい率直さで疑問を口にする。

ウル力は困ったように微笑んだ。

「……ずっと昔にね、おばさんには息子がいたんだよ。このお爺さんは、若い頃はとてもしつかりした人だったんだけど……今は、おばさんの息子と他の人との区別がつかなくなってしまうたの」

「……そうなの」

「だから気にしないで。あの……気になさないでくださいな」

後半は、ルカートに向けたものだった。直後、ウル力は再び激しく咳き込んで、薄い布団に顔を埋める。

「おばさんっ、おばさん大丈夫っ？」

ファルドは顔色を変え、身体をさすったり水を探したり、ともかく動き回って看病する。

懸命なファルドと、無理にでも笑みを浮かべるウル力の様子を、ルカートは立ち尽くしたまま、ただ見ていた。

そうして、薄汚れたこの部屋で、傍観者になっていた。相変わらず喚き続けている老人よりも、この場所で異質なのは自分なのだと考えて、そうすると急速に心も冷めていく。

「……くだらない」

誰にも聞こえないほどの掠れ声で、ルカートは呟いた。

こんなことは、実にくらだないことに分類されるべきものだ。他人の領域にいちいちなにかしらの感情を抱くなど、そうするだけ無駄なことだというのに。

ルカートの価値観において、このような戸惑いを覚えることは、同時に不快を意味する。だから、ささやかな胸のつかえを不愉快ゆえのものだと判断し、お得意の気紛れな気質の所為にして、軽やかな口調を取り繕った。

「僕は先に帰るよ、ファルド君」

「え？ だって、まだちゃんとおばさんに紹介もしてないのに」

「でも、僕ってここにいる暇なだけだし。つまらないのは嫌いだし」

「気を悪くさせてしまつて……本当に、もうしわけありませんね」
ウル力は痩せた手に力を込めて身体を起こし、弱々しく微笑んだ。
ルカートは、それを一瞥するなり背を向ける。

「ルカートつてば！」

ファルドがなにやら非難していたが、一切の無視を決め込む。ルカートは、この場所へ来たことを心から後悔していた。

独り、均されてもない土の道を歩けば、雨期の近い空気が抱く独特の湿気が、余計に苛立ちを煽る。

奴隷街では、毎日のように人が死ぬ。餓えや病気など、ありふれた日常なのだ。そんなことをいちいち気に掛けていては、表町では暮らせない。

どこで泣き喚く子供の声を頭の中で打ち消しながら、路地からこちらを上目遣いに見ている老婆には気づかないふりをする。

「……来るんじゃないやつたよ、本当に」

ルカートは、苛々と呟いた。

これはファルドを怒らせただろうということも、あの病弱そうな女性に酷く気を遣わせてしまったことも、すべて後になってから気づいたことだった。

苛立ちの原因は、ルカートの心の中にある。

子供の頃に憧れた、幸福の都 決して手に入らないその世界は、いつでも自分を隔離した向こう側にあった。

そんなものは実在しないのだと、ルカートは誰よりも知っている。しかし、怒りにも似た苛立ちは、幼い頃を感じた温かな世界への嫉妬に似ていた。

あと十日もすれば、都に雨期が訪れる。

この雨期が終われば、都は最も華やかな季節を迎えるのだ。都の外れを流れる運河は水量を増し、そこには積荷を乗せた船が押し寄せる。市場は活気づき、人々は浮き足立ち、この「幸福の都」を称える盛大な祭りが行われるのだった。女達は雨期の間にレースを編み、できあがった新しいシヨールで、祭りに華を添えることになっている。

ラティフィーネのもとには、どんな模様のレース編みがいいか占いで決めようという若い娘達が群がっている。きゃあきゃあとはしやぎながら、彼女達は無愛想な占師を質問攻めに行っているようだった。

「これじゃあ……ラティフィーネもうんざりだろうね」

店内の離れた場所から様子を眺めつつ、ルカートは呟いた。表面上、彼は笑顔を浮かべてはいるが、指先は一定の間隔を保ちながらテーブルの端を弾いている。

実のところルカートは、虫の居所が悪かった。

原因は、微妙に湿気を孕んだ空気と、そんなものはものともしない少女達の歓声と、それから、先ほどから熱心に自分を説得しようとするファルドの発言にある。

「ねえ僕の言うこと、聞いてくれる？」

不審そうな幼い声には、少々の呆れも混ざっている。

真っ直ぐ自分に向けられる視線から逃げるために、ルカートは殊更ゆっくりと椅子から立ち上がった。ファルドの身体をやりわりと遠ざけて、代わりに賑やかな集団に歩み寄る。

「楽しそうだね、お嬢さん方は」

にっこりと笑みを振り撒けば、少女達は途端におしゃべりを止め、頬を朱に染めていく。

「あんまり楽しそうだと、思わず仲間に入れて欲しくなるよ」

「あら、男の人は駄目だわ」

本音とは裏腹な台詞を吐くルカートに、一人の少女が悪戯っぽく肩を竦めた。少しばかり上向きの鼻が、勝気そうな印象を与える少女である。

「年に一度、女の子達が一番綺麗になる日のためだもの」

別の少女が続けて言い、少女達は肩を震わせ、互いの顔を見合わせながら笑う。

「おや残念。じゃあ僕は、おとなしく待つことにするよ。きみ達の手を取ってダンスを踊る若者達が、僕は羨ましい」

「もしかして、意中のお相手はいらっしゃらないの？」

「僕は、報われない恋の殉教者だからね。これからこの占師に、儂い恋の行方を尋ねるところさ」

ルカートの少々芝居がかかった言い回しに、少女達は瞳を輝かせて囁き合い、やがて押し出された一人の少女が、耳まで赤く染めながら、問い掛ける。

「じゃあ、わたし達のうちの誰かと踊ってくださいることも……？」

「きみ達のうちの誰かが、僕に救いの光を与えてくれるのなら喜んで」

優雅に微笑んだルカートは、貴族の青年がそうするように、胸に片手を添えてゆったりと一礼してみた。

「ごきげんよう、お嬢さん方。祭りの日を楽しみにしているよ」

少女達は、恍惚と歓喜の混ざったような声を漏らし、それから申し合わせたように淑女のようなおじぎを返し、はしゃぎながら店を出て行った。

それを見送ってから、ルカートは初めてラティフィーネの顔を覗き込む。

「どう？ うまく追い払ったと思わないかい？」

「……追い払ってくれたことには感謝するけど、その軽薄さには呆れるわ」

にこりともせず、ラティフィーネは応じる。

ルカートは気にせず、テーブルに手をつきながら身を乗り出した。「聞いていなかったのかい？ 僕は恋の病に冒されているんだ。救い出してくれるのは、きみだと信じたんだけど？」

ルカートが笑みを浮かべると、珍しく、ラティフィーネの薄い蒼色の双眸がじっと見つめ返してきた。

「なんだい？ きみにそんなふうに見つめられると、僕は本気にしてしまいそうだ」

「今日は機嫌が悪いみたいね」

ふいと視線を逸らして、ラティフィーネは単調に告げる。

「そういう悪ふざけは、八つ当たりみたいだわ」

「……これは、さすが占師だね」

ルカートは、素直に驚いてみせた。両手を胸の高さまで持ち上げて、苦笑する。

こういうことを無表情でずばりと言い当てるラティフィーネを、ルカートは実際のところ気に入っている。客観的に見ても美人の部類に入るだろう彼女が、一切他人に媚びることなく、むしろ他人が深く立ち入ることを拒んでいるようなところは、どこか自虐的ですからあって、それでいて潔かった。

「でも、きみは笑ったほうがもっと美人に見えると思うよ。これは悪ふざけじゃなく、ね」

「ご忠告、ありがとう。あなたは口を慎んだほうが好青年に見えると思うわ」

取りつく島もなく、ラティフィーネは言い放つ。

「きみって本当につれないね」

「もう、ルカートってば！」

ルカートが肩を竦めたとき、先ほどからずっと無視されていたフアルドが、ついに強硬手段に出た。

「僕の言うこと、どうしてちゃんと聞いてくれないのっ？」

怒鳴り声と呼ぶにはやや迫力に欠けた大声と同時に、ルカートは

軽く突き飛ばされて、そばの椅子に尻餅をつく。

「……つとと。意外と乱暴だなあ、ファルド君は」

「だって、さつきからずつと話してるのに、ちつとも僕の言つことを聞いてくれないじゃない！」

「嫌だって答えたじゃないか、最初に」

「だから、どうして嫌なの？」

「嫌だから嫌だ。これ以上簡潔な説明はできないね」

ルカートは素っ気なく応じて、ちらりとラティフィーネの様子をうかがう。ファルド絡みのことならば、必ず何かしら口を出すと思つていたのだが、どうやら無関心に徹しているらしく、こちらを見向きもしない。

「ちよつとだけ、一緒に来てくれるだけでいいんだよ？　そうして、少し話をしてくれたら、きつとおばさんは喜んでくれるんだ」

ファルドは、しつこく説得を繰り返そうとしている。その言い分が純粋な優しさからのものであればあるほど、ルカートを追い詰めるとも知らずに。

「おばさんには、ずっと昔に離れ離れになった息子がいるんだって。それが、ちよつとルカートと同じくらいの歳で、この間は少し驚いたんだって。でも……ルカートがさつさと帰っちゃうから。おばさん、気にしているんだ。だからもう一回だけ、おばさんの所へ行こうよ。そうしたら、おばさんは安心してくれると思うんだ」

「……僕に、息子の代わりをやれって言うのかい？」

ルカートの発した声は、自分で意識したよりも低かった。

「代わりじゃないよ。ただ、おばさんが喜ぶと思うから。ルカートだって、おばさんが喜んでくれたら、きつと嬉しいでしょう？」

「僕には、売春婦を喜ばせる趣味はないよ」

「え？」

その意味がわからなかつたらしく、ファルドは眉をひそめる。

思わず口に出した台詞が十一歳の少年に向けるには相応しくないと気づいて、さすがにルカートは言い方を改めた。

「……おばさんは、今は洗濯屋かもしれないけれど、昔はもつと大変な仕事をしていただろうってことさ。そして僕は、そういう仕事をしてきた女の人を好きじゃない」

「おばさんのこと、嫌いなの？」

「あのおばさんを好きとか嫌いとか、そういうことじゃないんだよ」

「じゃあ、どうして」

「あのね、ファルド君」

酷く、苛々する。

押さえ込んでいた激情が一気に渦を巻き、逆流を始めたかのように。そして否応なく、「代替品」として育てられた自分自身を思い知らされる。

らしくもなく、ルカートは強い口調で言い放った。

「偽者は偽者だよ。僕がいくら息子みたいに優しい言葉をかけたって、おばさんは喜ばない。本物の息子を想い出して、おばさんは虚しくなるに違いないさ。僕だって、そんな役回りはおごめんだね。はつきり言って、いい迷惑だ」

「ルカートの意地悪っ!!」

怒ったように、ファルドが詰る。

直後、ルカートはテーブルに掌を叩きつけていた。

バンツ、と鈍い、しかし大きな音が響き、ファルドは驚いたように大きな目を見開いて、半歩後ずさる。

「前の戦争の最中、この国にどれだけの奴隷がいたと思う？」

叩きつけた掌を握り締め、ルカートは深い溜息をついた。

「その奴隷の中で……どれだけの女の人が、望みもしない子供を産んだと思う？ しかも、金のために、だ」

「……ルカート……？」

「子供なら親に会いたいか、親なら子供を捨てないとか、そんなのは幸福な世界の幻想さ。まあ……狂った世界に産まれた僕に、本当の幸福なんてわからないけどね。でも、あのおばさんみたいな女の人や、金で売られた子供は、この都にも大勢いる」

完全に、吐き出す言葉を自制できなくなっている。ルカートは、そんな自分を心の底から軽蔑した。

「……きみに、こんなことを言うなんて……僕はどうかしているね。でも……ここが幸福の都なんかじゃないっていう、それが証拠だよ」

「……え、と……僕……」

怯えるよりも動揺の色が濃いファルドは、それでもゆっくりと手を伸ばす。

「ごめんなさい……僕、もう言わないから……ルカートが嫌なこと、もう、言わないから……。だから……そんな悲しい顔、しないで」

戸惑いがちなファルドの指先は、俯いたルカートの金髪を撫で、頬に触れる。

「僕って……大人気ないね」

この苛立ちの正体が、わからない。

胸の奥に何かがかえって、それがじりじりと焦げるように熱い。それなのに、誰かの思い遣りに触れると泡のように溶けて、そこには深く突き刺さった棘だけが残る。

「ごめんよ、ファルド君」

呟いて、ルカートは立ち上がった。そのまま、店を出る。悔しかった。

らしくもない自分が、まるで昔そのままの子供のようで。まったくもって、こんなことはらしくない。

「しっかりしろ……！」

自分自身を叱責して、ルカートは空を睨んだ。

「……あの男が余裕をなくすなんて、珍しいことだわね」

ルカートが店を出て行ってから初めて、ラティフィーネは席を立った。

なす術もなく立ち尽くしているファルドは、今にも泣き出しそう

な顔で振り返る。

「ラテイ……僕、どうしよう……。僕、おばさんを喜ばせたかっただけなんだ……。なのに……。僕、酷いこと言っちゃったのかな……。？」

「べつに、あんたは悪くないわ」

ファルドの頭を引き寄せて、ラティフィーネは吐息した。

「ただ……。彼のことを知らなかっただけよ。ルカートって人がどういふものを抱えているか、知らなかったただけだわ」

「……ルカートの、『いろいろ』のこと？」

ラティフィーネは頷いて、ファルドの黒髪を撫でた。

「とても、難しいことだけど……。誰かのために一生懸命にしようとしたことが、別の誰かを傷つけてしまうこともあるのよ。だからって、あんたが悪いわけじゃないわ。ルカートも、あんたを苛めようとしたわけでもない。ただ……。ちよつと噛み合わなかったのよ」

「……うん」

ファルドは、ラティフィーネの胸に顔を押しつける。そうして、小さな身体は耐えているのだった。

もどかしさと、困惑と、それから痛みにも。

「ねえラテイ、みんなが一緒に幸せになれる方法はないの？」

やがて、ファルドは顔を上げた。

大きな灰褐色の瞳はどこまでも純真で、そして真剣だった。

「……わからないわ」

ラティフィーネは首を振る。

「そんなこと、誰にもわからないのよ。だから、皆探しているんだわ……。幸福の都を」

そんなものは幻想だと、誰もが信じながら、焦がれてやまない世界。ラティフィーネも、そうだ。

ラティフィーネは、ルカートの先ほどの言い分をすべて弁護するつもりはない。彼の日頃の言動を丸ごと支持するつもりもないし、彼の内面の葛藤を理解した気になるつもりもない。しかし、彼の言

つていることが間違いであると、切り捨てることもできなかった。
「ルカートは……また、ここに来てくれるかな？ 僕、ルカートに嫌われたりしないかな？」

それは、いかにもファルドらしい心配だった。

「大丈夫よ。あの人、あんたを嫌うほどには馬鹿じゃないわ」

「う……うん……？」

寝ているのか返しているのかわからないような言い種に混乱しているファルドから離れて、ラティフィーネはテーブルに戻った。

水鏡を、そつと覗き込む。

不機嫌な自分の顔があった。

「あのお、占いをしてくれるのって、ここのお店ですか？」

店の入り口から、数人の少女達の顔が覗く。おそらく、占いの内容は先客と似たようなものだろう。

「どうぞ」

無愛想に、ラティフィーネは告げる。

ほどなくして、周囲は少女達の弾ける笑い声で満たされた。

* * * * *

都に雨期が訪れた。

およそひと月程度、ほとんど雨ばかりの日が続く。ラティフィーネとファルドがこの都へ辿り着いて、ふた月が経とうとしていた。

今日も、雨だ。

優しい雨が降り続ける外を眺めながら、ラティフィーネは頼杖をつく。客がほとんど来ない日も、彼女は一日中、宿屋の食堂の一角に腰を据えていた。

他にすることもないから、ということもあるが、こうしてぼんやりとしながら過ごす緩やかな時間を、ラティフィーネは気に入っ

いる。

そしてラティフィーネは、そろそろこの都を離れることを考え始めていた。

この雨期が明けたら、潮時かもしれない と。

この都の住み心地は、決して悪くない。宿を切り盛りする夫婦は二人を歓迎してくれているし、晴れてさえいれば、占いの商売もそれなりに繁盛している。ただ一方で、次の大きな都へ辿り着くための貯金はできたという事実もあった。そして旅費が稼げたのなら同時に、この都に留まる最大の理由もなくなってしまう。

けれども、まだその考えを口に出してはいなかった。

ちようど五日前、ファルドにとってとても悲しい事件が起きてしまったのだ。

ウルカが、死んだのである。

患っていた胸の病が、雨期に入って悪化した結果だった。

最期を看取ったのはファルドと、洗濯屋で働く数人の女性だったという。

心から慕っていた人の死に泣きじゃくり、嗚咽も嘔れるほど涙を流したファルドは、共同墓地へ遺体の埋葬を終えた後、少しだけ変化した。

それは、ラティフィーネだけがわかる些細なものだったかもしれない。しかし、時折一人で外を見ているときの引き締まった口元や、元気であるうと振舞う笑顔には、それまでには見られなかった印象

ある種の逞しさのようなものが感じられるようになった。

ウルカがファルドに遺したものは、少年が少しだけ大人になるための糧となったのだ。

ラティフィーネは、ファルドが一人にいるときは、努めて邪魔をしないようにしている。それが、大袈裟な愛情表現を苦手とする彼女の優しさだった。

そして今、ファルドはいない。この雨続きで決壊しそうな用水路を見回るために、宿の主人と一緒に雨の中を出て行ったところだ。

夫人は、二階で繕い物をしている。つまり、この食堂にいるのは、ラティフィーネ独りきりである。

開け放たれた窓越しに見る、糸のように細く降り注ぐ雨や、地面に跳ね返って小さな飛沫になる雨粒を眺めながら、物思いに耽っているのだった。

「雨……止まないわね」

ぼつり、とラティフィーネは呟く。

実は、人を待っていた。いや、待つというよりは、当然来るものとして待ち構えていると言ったほうが正しいかもしれない。

ともかく、ラティフィーネは外を見ていた。

時刻は昼下がりの頃だというのに、空を覆った雲は厚く、外は暗い。客のいない店内も、薄暗かった。

雨音にまぎれ、こつん、とドアを叩く音がする。

テーブルに頬杖をついたまま顔を動かしたラティフィーネの視線の先には、ルカートがドアに凭れるようにして立っていた。

濡れそぼった金髪は額や首筋に張り付き、前髪の先端からは、鳶色の双眸を掠めて雫が落ちる。白いシャツはほとんど肌が透けるくらいに水を含んでいて、長いこと雨の中にいたことを語っていた。

伏せ目がちのまま唇に笑みを刻み、いくらか掠れた声で、ルカートは第一声を発する。

「やあ。ご機嫌いかがかな？」

「……あなた、やっぱり頭がおかしいんだわ」

応じたラティフィーネには、いつものように笑みはない。

「きみはいつでも変わらないね」

肩を震わせて、ルカートはわずかに吹き出した。

「入ったら？ 今なら、あなたの話し相手くらい、付き合えるつもりだけど」

「……ついでにキスをねだったら、さすがに追い出されるかな？」

ふざけた台詞の割には調子のない様子で、ルカートはふらつく寸前の足取りで店の中に入ってきた。

「身体を拭いて。話はそれからよ。ここのご主人の服も借りるといわ」

「もしかして……きみ、僕が来るって知っていたのかい？」

「わたしは占師よ」

あつさりと言い放つラティフィーネに、ルカートは驚いたような顔をする。

「きみが、僕の行動を占ってくれるなんてね……これって、喜んでいいことなのかな？」

「いいから、早く着替えなさい！」

まるでファルドに言うような口調になって、ラティフィーネは奥を指差した。

着替えを終えて再びラティフィーネの前に現れたルカートは、少々滑稽な姿になっていた。中年に近い男とすらりとした細身の青年との体格の違い、というやつである。太い胴回りは腰帯で調節できるからまだしも、どう見ても丈は足りないし、袖も短い。

それでも、一応は着こなしているように見えなくもないところが、ルカートの恐ろしいところだったが。

「濡れたままでいるよりは、ましでしょ」

ラティフィーネは一方的に断定すると、ルカートが椅子を引くのを待つてから、唐突に話題に切り込んだ。

「ファルドから聞いたわ。あなた、ウルカおばさんに毛布を贈って、医者も紹介したんですって？」

ルカートの指は動揺を露骨に表現したが、溜息混じりの返答はそれを押し殺していた。

「……意味はなかったみたいだけどね」

「そうかしら？」

「彼女はあっけなく死んでしまったわけだし。僕の気紛れの贈り物

なんて、きつと金持ちの偽善行為にしかならなかったさ」

「そうかしら？」

まったく同じ問い掛けを繰り返しただけで、ラティフィーネは口をつぐむ。

薄暗い店の中に、絶え間ない雨音だけが響く。まるで、外の時間だけが流れ、内の時間が止まってしまったかのように。

先に根を上げたのは、ルカートのほうだった。

「……彼女は僕の母親なんかじゃないんだ」

長い沈黙の後のそれは、静かな告白だった。

「きみは……気づいているんだろうけど。僕は、父が他所で……売春婦に産ませた子供でね。だから僕は、彼女を……最初、赦せなかった。いや……彼女を、じゃなくて……なんていうか……僕は、僕自身の苛立ちが惨めだったんだ」

いつもの軽口は、完全に鳴りを潜めている。

ラティフィーネは黙って、雨音と、いつもより低いルカートの声に耳を傾けていた。

「僕はね、ずっと以前に伯父が死んだときだつてちつとも悲しくなかつたんだ。たまに小遣いをくれたりする、悪くない人だった。……彼女は、僕にとっては赤の他人なのに……どうしてだろうね。僕は……どうしてだか、とても苛々する」

自嘲するように笑って、ルカートは湿った前髪を掻き上げた。

「とても苛々するんだ……。胸の奥がね、なんだか……痛くて」

「……悲しい、の間違いじゃないの？」

「さあ……どうだろう。僕の生活の中であの人はなんの意味も持たないし、彼女がいなくなったからといって僕の生活が変わるわけじゃないんだ。毛布も医者も……僕にとっては、手痛い出費というほどでもないんだよ。僕は……だから……僕自身を、持て余している」

「それを、悲しいっていうのよ」

小さな吐息と一緒に、ラティフィーネは吐き出した。

「だいたい、感情なんて……悲しいなんて感情は、人によって随分

違うものよ。ろくに話もしなかった人の死を悲しんではいけないなんて決まり事はないわ。あなたが彼女の姿に誰を連想したかなんてそんなことはわたしには関係ないけど……でも、あなたが消化できずにいるそれは、別れの寂しさだとか辛さだわ。それは、悲しいっていうことよ」

「……きみには敵わないね」

「昔飼っていた犬が死んだときに、お婆が　わたしを育てた占師が、似たようなことを言っていただけよ」

それは、本当のことである。なんとなく、上目遣いの目つきがファルドに似ている犬だった。今にして思えば、無邪気で人懐こいところもそっくりだ。

正直に言くと、悲しいときに悲しいと泣いてしまえるファルドに、ラティフィーネは憧れている。どう考えても、ラティフィーネはそういう感情表現は苦手で、それは、真似をしようと思つて簡単にできる類のものでもないからだ。それだけに、ルカートの不器用さもほんの少しならわかる気がするのかもしれない。　

「きみは幸福の都を求めているんだってね」

俯いていた顔を上げたルカートは、微笑んでいた。

「僕だつて……いや、僕はきみなんかには比べたらずつと狭い範囲だけれどね、僕もこの都の中で自分が幸福になれる場所を探していたんだ。　いつだつて、そうだった」

本人が意識しているかどうかはともかく、彼の表情はとても柔和なものに変わっている。

「……ファルド君を見ているとね、あの子はとてもいい子過ぎて……僕はときどき、彼が羨ましいとさえ思うんだ。……僕は、ファルド君みたいに素直な子供じゃなかったからね。僕がもしファルド君みたいだったら……僕は、もっと楽しく毎日を送っていたんじゃないだろうか、なんてね。そんなのは僕の勝手な甘えみたいなもので……もちろん、彼は彼の辛さを抱えているし……そういう辛さに正面から立ち向かっているからこそ、彼は強いのだと思うんだけど」

「それは……なんとなく、わかるわ」

ラティフィーネが肯定すると、ルカートは穏やかに目を細めた。

「ファルドが言っていたわ。おばさんは、あなたの贈り物をととても喜んでいたって。　　嘘じゃないわ」

素っ気なく告げるラティフィーネの言葉に、ルカートは一瞬だけ瞠目し、そして無言で頷いた。

伏せた目元が寂しげで、それでいて優しい。

静かな雨音が、二人の沈黙を埋めていく。

「雨は……好きだな」

不意に、ルカートが呟いた。

「……雨にまぎれて、泣けるものね」

頬杖をついて、ラティフィーネは応じる。

ルカートは、また微笑んだ。華やかさは薄れるが、こつこつという笑い方のほうが、彼にはずっとよく似合う。

不覚にも見惚れてしまったラティフィーネは、だからルカートがそっと腰を浮かせたことに気づかなかった。

「……逃げないの？」

目前に迫った囁きに息を飲むより早く、掠めるようにして唇が触れ合う。

ルカートの唇は　　。

ひんやりと冷たくて、雨の匂いと哀情の味がした。

雨期において、晴れ間はとても貴重なものとなる。この日は六日ぶりに太陽が顔を出し、地面を照らしていた。

往来では人々が挨拶を交わし、子供達が走り回っている。

「今日はいい天気だね」

誰に対してもなく笑うファルドは、元気だった。

相変わらず洗濯屋には出入りしているし、おじさん、おばさんと呼ぶ宿の夫婦にも可愛がられている。ラティフィーネのことは大好きだし、ルカートはいろいろなことを教えてくれる。

優しい人達に恵まれて、ファルドはこの都での毎日がとても好きだった。ファルドの目に映る都の景色は、いつでも明るい。

だから ウルカおばさんの死を悲しむのは、やめにした。

それは忘れてしまうのではなく、大事にしまっておくということだ。悲しみに捕らわれているばかりでは、おばさんのことを大好きな気持ちも、おばさんの優しい顔も、ほんわりとした胸の温かさも、薄れてしまう。

ファルドは、誰に教えられるわけでもなく、気づいたのだ。

別れの瞬間を想い出すと、胸が痛くなる。本当は、辛くなる。でもそれは、おばさんを好きだったという証であるのだと。そして覚えておかなくてはならないのは死別の悲しみではなく、その証のほうなのだ。

だから、笑っていようと思った。そうすれば、いつまでもその証は消えないと思ったから。いつまでも、おばさんを好きでいたかったから。

それに、ファルドが泣いてばかりいると、ラティフィーネも困るに違いない。ただ黙って頭を抱き寄せてくれたラティフィーネが、本当は慰めようとして必死だったことを、ファルドは知っていた。

「ええと……野菜の注文はこれで全部でしょ、あとは……」

久しぶりに市場を歩き回りながら、ファルドは指折り呟く。雨のせいで品薄な市場は、それでも人出は賑やかだ。器用に人の流れの間を縫って歩くファルドは、すっかりこの市場にも慣れてる。

「やあ、ファルド君」

耳慣れた呼びかけに周囲を見渡すと、道の脇にルカートが立っていた。いつでも先回りするように、彼はどこへでも姿を現す。

「ルカートっ」

思わず声を上げ、ファルドはそのほうへ駆け寄った。

「おつかい、終わったのかい？」

「あと、石鹸でしょ、それから金物屋さんに寄って、お鍋の修理に来てもらうように頼むの」

にこりと笑うルカートに、同じく満面の笑みで、ファルドは答える。

「きみって働き者だねえ、本当に」

「僕、お手伝いするの、好きなんだ。ルカートは？ 何か買い物？」

「僕？ 僕は……ほら、暇人だからさ」

毎度の同じような返答を繰り返してから、ルカートはちらりと真顔になった。

「珍しく天気もいいから……ちょっとね、おばさんのお墓のほうに行ってきた。僕は、ちゃんとお別れをしていないから」

「……うん」

ファルドも、笑顔を消して頷いた。

ルカートの『いろいろ』のことを、ファルドは知らない。しかしファルドにとつては、あんなに嫌がっていたルカートが、一度だけファルドのいないときにウルカを訪ねていたという事実がすべてだった。温かい毛布を贈って医者を紹介した彼の真意をファルドは知らないが、そういうことは無闇に訊ねるものではないと、なんとなくわかってる。

なにより、おばさんはルカートの訪問を喜んでいたのである。

それにファルドは、ルカートが冗談を言っているときとそうでな

いときの違いを、なんとなくわかるようになっていた。

少なくともはつきりしていることは、ルカートはおばさんを嫌いなのではないということ、何かの事情があったにせよ、結局はおばさんに優しくしてくれたということなのである。

「付き合っよ、きみのお手伝いに」

ルカートはそう言うと、ファルドの腕から荷物を取り上げる。

「じゃあね、あのお話をして。海賊船のお話の続きがいいな」

ファルドは、待ってましたとばかりに飛び跳ねた。

実は、ルカートの特技は裁縫やお菓子作りだけではない。と、少なくともファルドは思っている。彼はファルドから見ると随分経験豊富で、それだけに多くの物語や、都での事件について知っている。そして、そうした物語や事件を話してくれるときのルカートが、ファルドは一番好きだった。

もつとも、彼の場合は非常に気紛れなので、ねだった通りの話をしてくれるとはかぎらない。そして、何が出てくるかわからない宝箱のような楽しみ方で、その気紛れにもすっかり順応してしまっているファルドだった。

「今日は久しぶりのいい天気だから、空の話にしよう」

案の定、にこりと笑いながら、ルカートはまったく違うことを口にする。

ファルドは頭の中の想像をすぐさま切り替えて、空をぐるりと仰いだ。

雨上がりの空は、とても青い。

青く乾いた空は、そこら中の水溜りや軒下の雫に分身を創り出していて、そういうことにふと気づくと、見慣れた通りがやけに楽しく思えてくる。

「うん、空の話にしよう」

ルカートの口振りを真似て、ファルドはにっこり笑った。

晴天に恵まれて、ラティフィーネのもとには朝から客が訪れた。久しぶりの盛況である。

雨の所為で足止めを食らっていた宿の泊り客の幸先を出発前に占ってやり、その後は近所の常連客や、噂を聞いてやってきたのだと言う一見客を立て続けに十人ばかり占ったところで、ようやく一息つく。

そろそろ昼前である。真つ当な職を持つ男達は仕事に出払い、女達も久しぶりの晴れ間を有効に活用して家事をこなさない手はない。このあと陽が高い間は、案外と客は少ないかもしれない、などとラティフィーネは予想する。

代わりに、必ず現れそうな人物なら心当たりがあるのだが。

ラティフィーネは、珍しく落ち着かない素振りで爪を噛んだ。不機嫌そうに顔を歪め、あらぬ方向を睨む。

「ただいま、ラティ」

そこへ、まるで狙いすましたかのように、無邪気な声が駆け寄ってくる。

反射的にそのほうを見たラティフィーネは、ファルドの後ろからにこやかに登場した青年を見た瞬間、内心で盛大な溜息をついた。

対する青年のほうはというと、まったくもって悪びれもせず、いつものように愛想のよい笑みを振り撒いているのだ。

「こんにちは、ラティフィーネ」

当然のように声をかけられて、ラティフィーネは無然としたまま黙り込む。

「ねえラティ、外はとても天気がよかったよ。それに、ルカートがまた新しいお話を聞かせてくれたんだ。今晚、ラティにも教えてあげる」

上機嫌なファルドの声は、とても明るい。それを無視するほどには不機嫌に徹しきれず、ラティフィーネはご苦労様、と応じて黒い髪を指先で撫でてやった。

「荷物、調理場を持っていくね」

撫でられた頭を両手で誇らしそうに擦ってから、ファルドは麻袋をふたつ、上手に抱え上げる。そして、今度は奥に向かってただいまと告げながら、調理場へ姿を消してしまった。

ファルドは、台所仕事を見ているのも好きである。この時間の調理場では食事客のための料理の仕込みが佳境に入っている頃で、ラティフィーネの予測が正しければ、ファルドは調理場の隅の樽の上に腰掛けて、さっそく魅入ってしまうに違いない。

つまり、ラティフィーネにとって最も遭遇したくない状況下に、あつさり置かれてしまったというわけだ。

実は、数日前の雨の日以来、二人が顔を合わせるのは初めてのことだった。

「その様子だと……まだ怒っているのかい？」

まるで拗ねた子供を宥めるような口調で、ルカートはラティフィーネの顔を覗き込む。

「怒ってなんかいないわ」

突っぱねるように言い返したラティフィーネの目の前に置かれたのは、かなり個性的な組み合わせの花束だった。

「僕はね、きみには白いこの花がよく似合うと思ったんだけど、ファルド君が言うにはこっちの紅い花のほうがいらしくて。結局、優柔不断な僕等は花屋の前で悩みに悩んだ挙句、どういうわけか店の人に気に入られてしまって、おまけしてもらったのが、この黄色い花」

いちいち長い指で指し示しながら、ルカートは流れるような説明を展開する。

「それで僕の気がかりはというと、きみがどの花を好きかということなんだけど」

どうしてこの男はいつも突拍子もないのだろうか、ラティフィーネはしげしげと花束を見つめるばかりだ。

ルカートは少しばかり間を置いて、それから彼にしては少々素っ

気ない口調で告げた。

「……この間のお礼とお詫び」

この間、とはどの部分を指すのだろうか、即座にラティフィーネは考える。

話を聞いてやったということに対してだろうか　それとも。

なんといつても腹立たしいのは、あのとき、この傍若無人な気紛れ男との会話にある種の心地好さを覚えていたという事実と、不覚にも見惚れてしまった挙句、いくら虚を突かれたとはいえ、抗う余裕もなく唇を許してしまったということなのだ。

ラティフィーネは、ルカートへの憤りもさることながら、自分自身の間抜けさ加減にも腹を立てているのだった。それは、彼女が他人にあまり深入りしないことを心がけているせいでもある。もっと単純に言えば、ラティフィーネはルカートのことを嫌ってこそいいが、親密な関係を望んでもいないということだ。

「受け取ってはもらえないのかな？」

ルカートが困ったように、ラティフィーネの顔を覗き込む。

「わたし、あなたに贈り物をしてもらう筋合いはないもの。ましてや花束なんて」

「これは親愛の証さ」

「ご機嫌取りのつもりなら、よして欲しいわね」

「……やっぱり怒っているじゃないか」

大仰に溜息をついて、ルカートは向いの椅子に腰掛けた。その、わずかに苦笑を混ぜ込んだような顔つきが、演技なのか自然体なのか、ラティフィーネには判断がつかないところだが。

「悪かったよ、ラティフィーネ。つまり……その、驚かせたことに関しては謝る。でもね、これだけは確かだよ。僕はきみに言われるまでもなく軽薄な部類の人間だけど　あの瞬間は、少なくとも僕は本気だった」

しゃあしゃあとこういう台詞を吐くルカートは、なまじ顔立ちが整っているだけに性質が悪い。

ラティフィーネは、無言で眉根を寄せる。

「それに……僕達が喧嘩なんかすると、ファルド君はきっと悲しむと思うんだけどね？」

「ファルドを手懐けたからっていい気にならないで。親愛と愛情を履き違えると、きつと痛い目を見るわよ」

「まったく……僕にそういう遠慮の無いことを言うのは、きみくらのものだよ」

吐息混じりに苦笑して、ルカートは降参するように小さく肩を竦めた。

ちつとも褒められた気分ではないラティフィーネは、テーブルの傷を指でなぞりながら、単調に告げる。

「わたしは、この間のことであなたにどうこう言っつもりはないわ。気にしてもらわなくて結構よ。わたしも忘れるわ」

そもそも、気にしてもらったところで、済んだことは仕方がない。犬に噛まれたとも思っ忘れてしまえばいいことなのだ。遅くても、きつとあとひと月も経たないうちに、別れの日はやってくるのだから。

「……もしかしてきみ、そろそろこの都を離れようなんて考えているのかい？」

そんな唐突な質問は、まるでラティフィーネの心の中を見透かしたものだ。思わず顔を上げたラティフィーネは、ルカートが先日と同じように微笑むのを見た。

「やっぱり、ね。きみって人は、無愛想な割には意外とわかりやすく助かるよ。まあ、僕ときみの捻くれ具合が、ときどき一致するからかもしれないけれど」

失礼なことを紳士的な口調で言いながら、ルカートはすぐに、いつもの調子を取り戻す。

「他人と距離を置いて接するというのは、旅暮らしを続けるにはむしろ必要なことなんだろうけどね。とくにうら若い乙女と少年の旅路において、人付き合いには慎重にならざるを得ないというのも認

めるよ。まあ　もちろん、きみ自身の性格が一番の要因だとは思
うけど」

「……何が言いたいのか？」

「きみは慎重で賢くて、おまけに美人で、ときどき酷く辛口なもの
僕にはとても刺激的なんだけどね。でも、僕としてはきみがそうま
でして旅する理由がわからない。つまり……きみの探す幸福の都の
正体がさ」

「そんなこと、あなたに関係ないでしょう」

ラティフィーネは突き放したが、ルカートはそれくらい承知して
いたらしい。あっさり諦めたように席を立つた彼は、そつとテー
ブルに手をついてラティフィーネを見下ろした。

「僕がこんなことを言う資格がないのは重々承知しているけど……
ラティフィーネ、きみは幸せかい？　旅を続けていれば幸せになれ
ると、本気で信じているのかい？」

「……放っておいて」

ルカートのほうを見ないまま、ラティフィーネはほとんどぶつき
ら棒に芯じる。内面の動揺は、幸いなことに顔には出難い。

「出直すよ」

言い残して、ルカートは背を向けた。真っ直ぐに戸口に向かって
歩く足取りは、先日のおぼつかない足取りとはまるで違っている。

「きみのおかげで、僕は少しだけわかった気がするんだ。……幸福
の都の正体が、さ。感謝してるよ」

ドアの手前で振り向いたルカートは、柔らかに微笑んでいた。

黙って見送るラティフィーネの心が、ずきりと痛むほどの優しさ
で。

「あれえ、ルカートだったら、帰っちゃったの？」

場違いなまでに明るい声は、ファルドのものだ。片手にジャガイ
モを持ったまま、ラティフィーネのもとに駆け寄ってくる。

その灰褐色の瞳が驚きと心配を孕むのに、時間はかからなかった。

「どうしたの、ラティ？」

テーブルの上にジャガイモを置き、土の付いた手を払ってから、ファルドはラティフィーネの顔をじつと覗き込む。

「ルカートと喧嘩したの？」

「……そうじゃないわ。あんたは心配しなくてもいいの。黒髪を引き寄せて、ラティフィーネは応えた。

「どこか痛いのか？ おじさん呼んで来る？ おばさんのほうがいい？ それとも……」

「ねえ、ファルド」

腕の中であれこれと心配する言葉を遮って、ラティフィーネは極力自然な口振りを取り繕った。

「この都の次には、どこへ行きたいと思う？」

「……え？」

「だって……いつまでもここにいるわけにもいかないのよ。ここはわたし達の家ではないし、早く本物の幸福の都を見つけないといけないわ」

「うん。……そうだね」

ファルドはいつも、物分りがいい。いつも、次の場所に旅立つことを言い出すのはラティフィーネのほうで、一度でもファルドから言い出したことはなかった。

ファルドはいつでも、一瞬だけ寂しそうな顔をして、それを慌てて打ち消すように明るく笑うのだ。　　いつだって、そうなのだ。

「僕、どこでもいいよ。ラティと一緒になら、僕はどこでもいいんだ」
ファルドはそう言って、にこりと笑う。

「ラティは、僕を置いて行ったりしないでしょう？　僕、ラティの行くところなら、どこだって一緒に行くよ」

その優しさが、またしてもラティフィーネには痛かった。

翌日は、雨だった。

霧のような細かな雨が、風に煽られて滑らかに揺らぐ。世界全体に半透明の膜がかかってしまったかのように視界をぼんやりと遮断して、それが見慣れた景色をどこか幻想的なものに見せている。

ラティフィーネは、いつもの最奥のテーブルではなく、食堂の外にいた。出入り口となるドアの外は三段ばかりの階段になっていて、そこが軒下になっているのだ。階段の一番上に腰掛けていれば、全身に雨を浴びることもない。ほんの時折霧状の雨粒が頬を掠めるのは、むしろ心地よかった。

夜明けの頃からそこに座るラティフィーネは、薄暗い世界が白く変わる様の中にいた。晴れている日よりも外が明るくなるのは遅く、時間もゆっくりと流れていくようだ。

昨夜は、ほとんど眠れなかった。

そんな繊細な神経など持ち合わせていないと思っていたのはラティフィーネ自身で、これはちよつとした事件ほど珍しいことである。心を占めていることの発端は、ルカートの言葉にあった。

旅を続けていれば幸せになれると本当に信じているのか、と。

それは、ラティフィーネ自身が見つつけ出せないでいる疑問そのものなのだ。本当に、このままでいいのかと　本当は、思わなくもない。

そして今、迷っている。

理由のひとつには、ファルドのことがあった。ひと言で言ってしまうえば、ファルドがこの都に馴染み過ぎている、ということだ。

長く旅をしている間、ファルドは大抵ラティフィーネのそばから離れることはなかったし、仮に友達ができたとしても、ラティフィーネの視界の範疇で遊んでいることのほうが多かった。

しかし、ファルドは確実に、ラティフィーネのそばよりも、より外の世界に興味を持つようになっていく。この都では、とくにそれが顕著だ。

もしかしたら、ファルドはここに残りたいたいのではないだろうか、そんな風に思う。

「……幸福の都」

呟いて、ラティフィーネは吐息した。

揃えた両膝に顔を寄せ、首を傾げながら下から上を仰ぐ。

屋根の端っこに引っかけた小さな雨粒が、やがて大きな雫になり、ぽつりぽつりと落下していく。繰り返し繰り返し、同じようにして落ちていく。

まるで、ただ平穩に過ぎ去っていく、毎日のようだと思った。

そう。平穩なのだ。

ラティフィーネの毎日は、細々としたことを除けば総じて平穩で、波もない。旅の暮らしを不便だとも思わないし、家出したことを悔いてもいなければ寂しいとも感じない。

ファルドは相変わらずいい子だし、占いの商売はどこへ行ってもそれなりには繁盛するし、食事も寝床も、贅沢さえしなければ当たり前前に得ることができる。

そういうことに気づいてしまうと、幸福の都の正体はいよいよ薄らぼんやりとして、それはちょうど今の霧雨のようにな、綺麗だけだと掴みどころがないのだ。

どれくらい、そうしていただろう。

ぼんやりと雨を眺めていると、どこからか庶民には馴染みの薄い音が近づいてくることに気づいた。それは確実に、こちらに向かっている。

「……馬車？」

ラティフィーネは思わず、立ち上がる。

やがて、二頭引きの馬車が雨の向うから姿を現した。馬車は、ラティフィーネのいる目の前で、止まる。

二頭の栗毛馬のたてがみは、しっとり濡れて、しゃんと伸ばした首筋がとても凛々しい。御者の男は、ラティフィーネを見て会釈した。続いて彼は御者台から下りると、恭しいまでの礼をとった。帽子を取ると、濃い髭の割に頭の薄い、中年で痩せ型の男である。

「占師、ラティフィーネ様でいらっしやいますか？」

「……そうだけど」

素っ気なく、ラティフィーネは応じた。

御者の男は確認すりょうに頷いて、幾分しゃがれた声で告げる。

「我が主人、ヨアール様があなた様をぜひ当家にお招きしたいと。

ぜひ、ご準備を」

「その人、偉い人なの？」

「この都の議員の要職にあられます」

「……自分ではここへ来られない用事でも？」

「ぜひ当家にお連れするように、仰せつかっております」

面白くもない返答をして、御者は操り人形のような動作で、お辞儀した。

「権力を笠に着て裏町の占師を呼びつけるなんて、そういうのは好きじゃないわ」

「いえ……実は、奥様が長いこと病気を患っておいでで、その奥様にぜひ何か新しい楽しみを、と……そういう次第です」

男は雨に濡れるのも構わず、帽子を両手で握り締める。小さな目をしょぼしょぼさせながらじっと立ち尽くしているその様子は、まるで大きな子供のようだ。

「……いいわ。少し待っていて。道具を取ってくるから」

少し考えてから応じると、ラティフィーネは踵を返した。もしかしたら、多少の気分転換というやつにはなるかもしれない、と思う。

「せめて帽子をかぶるか、中に入れば？ 濡れるわよ」

まったく無愛想な勧めに、御者は小声で返事をして帽子をかぶる。それを横目で見てから、ラティフィーネは部屋に戻った。

階段を上り、廊下の突き当たりの部屋に入ると、ファルドはちょうど着替えを終えたところのようだった。

「おはよう、ラティ。いつから起きてたの？ 僕のこと、起こしてくれればよかったのに」

まだ少し眠そうな声で、ファルドは口を尖らせる。

ラティフィーネは寝癖だらけの黒髪を、いつもより素早く撫でつ

けてやった。

「あんたはまだよく寝ていたから、起こしては悪いと思ったの」

「朝ご飯、食べた？」

「まだよ。でも、わたしは今から出掛けなくちゃいけないの。だから今日は、一人で食べなさいね」

言い聞かせるように言うと、ファルドは驚いたように声を上げた。

「ええっ？　今から出掛けるの？　どこに？」

「なんとかっていう議員のところ。仕事の依頼なのよ」

「……そうなんだ」

随分と残念そうに、ファルドは肩を落とす。そんな様子を見ると、依頼なんて断つてやるうかと思うラティフィーネだったが、雨の中待っている御者のことを思えば、今更嫌とも言えない。

「なるべく早く帰ってくるわ」

もう一度ファルドの髪を撫でてから、ラティフィーネは急いで商売道具を取り上げると、部屋を出た。

御者の男は、ラティフィーネの姿を見ると、馬車のドアをさっと開いて軽く頭を下げる。

なるべく濡れないよう、急いで飛び乗ったラティフィーネは、馬車に乗るなどということをし、少しだけ懐かしいと感じた。家出して以来、馬車には縁のない生活をしている。けれど、実家ではカスタント伯爵家では、当然ながら立派な馬車はあったし、父親専用の豪華なものや母親専用の華やかなものもあった。ラティフィーネは数人の姉達と、あるいは両親と、何度か馬車に揺られたことがある。残念なことに、それは楽しいという記憶とはあまり結びついてはいなかったが。

「行ってらっしゃい！」

ラティフィーネの後を追ってきたファルドが、食堂の軒下から、にこにこ手を振る。

こんな無邪気な笑顔で見送られるなら馬車も悪くない、とラティフィーネは思った。少なくとも　小さく手を振り返してやったと

きに、突然の、直感的な違和感を覚えるまでは。

「ちよつと待って」

制止の声は、御者には届かなかった。

霧雨の中、馬車は走り出す。

ファルドが大きく手を振る姿に、どういっわけかラティフィーネの胸は痛んだ。

「……行っちゃった」

呟いて、ファルドは階段に座り込む。

「雨の日はお客さんが少ないから、いっぱい話ができると思ったのになあ」

両足をばたつかせながら、馬車の車輪の跡を目で追う。

「今日はルカートも来ないだろうし……」

確か今日は、家族の人達が集まって話し合いをする、お茶会というのがあると言っていた。僕にもひとつくらい義務ってものがあるんだよね、などと笑っていたルカートだが、そういう大事な日は、雨の中をわざわざ遊びに来たりはしないだろう。

雨の日は洗濯屋もお休みだから、ファルドがどこかに遊びに行くということもできないのだ。

「つまんない」

歌うように呟いて、ファルドは立ち上がった。

「お留守番なんて、つまんない。でも僕、お腹も空いちちゃった」

勝手に節をつけて歌いながら、美味しそうな匂いを昇らせている調理場へ回れ右する。

ラティフィーネはすぐに帰ってくるだろうと思った。もしかしたらお昼くらいにはなるかもしれないが、そうしたら昼下がりは一緒に過ごせそうだ。

次に目指す都のことも、きつと相談に乗ってあげたほうがいいし、

ルカートから聞いた楽しい話も、まだ全部話し終えていない。

馬車に乗っていくなんて、きつとラティフィーネはお金持ちの家に呼ばれたのだろう。馬車の小窓から覗くラティフィーネは、なんだかお姫様みたいだとファルドは思った。ルカートからもらった本に出てくる、お姫様だ。正確に言えば、本を読んで勝手に想像力を働かせているファルドの空想の中での、お姫様像である。

本の中では、そのお姫様は悪い魔法使いに攫われてしまうのだった。

それはある日、姫が森へ遊びに行ったときのことでした。

ほとんど暗記してしまった物語が、ファルドの脳裏に浮かび上がる。

空は見る見るうちに黒い雲で覆われ、強い風と共に恐ろしい形相の魔法使いが現れたのです。魔法使いは、姫が逃げ込んだ馬車ごと煙で包み込み、一瞬のうちに連れ去ってしまいました。

「……嫌だなあ」

下唇を突き出し眉根を寄せて、ファルドは自分の想像を追いやる。物語は物語で、それは現実のお話ではない。

「ラティ、早く帰ってこないかな」

つい先ほど出て行ったばかりのラティフィーネが、途端に恋しくなるファルドである。

調理場のほうへ行きかけた身体をもう一度反転させてドアに駆け寄り、そこから顔だけ外に出す。

まるで煙がかかったような白っぽい世界が、馬車の車輪の跡までも溶かしてしまうようだった。

霧雨は午後から本格的な雨に転じ、日が暮れる頃にはさらに雨足は強くなった。

当然、ルカートが夕食を終え、自室で読書に勤しんでいるような時間帯ともなれば、外には真つ暗な帳が下りている。少々強まった雨音も耳に心地よく、手ずからいれた紅茶の香りも、夜ならではのしっとりした安らぎの演出だ。煙草を好まず酒も嗜む程度にしか口にしないう自称馬鹿息子にとっては、紅茶も道楽のひとつなのだった。時折、窓ガラスを雨が打つ。風も強くなってきたらしい。

きりのいいところまで手元の本に視線を走らせてから、ルカートは椅子から立ち上がった。わざとカーテンを開けたままにしておいた窓には、鏡のように部屋の中がそのまま映り込んでいて、薄っすら浮かぶ暗い夜の街並みと重なり合っている。

「今宵はさすがに月影もなし、か」

当然と言えばあまりにも当然のことを口走った後、ルカートはカーテンに手を伸ばす。

何か聞こえたような気がしたのは、そのときだ。

雨音にまぎれて、何か　聞き覚えのある声が届いた気がする。

「……まさかね」

今は夜で、まして雨である。そのうえあれほど頻繁に会っていても、最初の一件で懲りたのか気を遣っているのかはともかく、ファルドはこの家を訪ねてくることはしない。

だからあり得ない、と思った瞬間、もう一度自分を呼ぶような声を聞いて、ルカートは雨が入るのも構わずに窓を開け放った。

ルカートの部屋は、ちょうど店の真上にある。ファルドは店側の入り口しか知らないはずだが、その入り口は屋根が邪魔で上からは見えない。

「ファルド君、そこにいるのかい!？」

まだ少し疑ったまま、それでも雨音に負けにくいくらいの声を発すると、屋根の下から小さな影が走り出てきた。全身みすばらしいまでに濡れたまま、こちらを見上げたのは、間違いなくファルドである。

「一体……どうしたっていうんだ……」

本当に少年の姿を認めた瞬間の衝撃は、空耳のような声を聞いたときよりも、ずっと大きい。

とにかく、ルカートはそれまでの優雅な時間など吹き飛ばす勢いで窓を閉め、部屋を飛び出した。

「あ、ルカート様！」

こちらに向かっていたらしい古参の使用人とぶつかりそうになったのは、無駄に長い廊下を階段に向かつて全力疾走する途中だった。「実は下から妙な物音と声がつ。今お呼びしようかと……」

恐れゆえに顔色を変えて訴える使用人に、驚きゆえに血相を変えたルカートは負けじとまくしたてる。

「毛布を用意してくれないか。すぐに下に持ってきて、いいね？」

「でも下は……」

「いいから、頼んだよ！」

強引に言いつけると、ルカートはそのまま下へ向かった。

店の戸棚から鍵を取り出し、内側からしっかりと掛けてある錠前を外す。分厚い鉄のドアを押し退け、さらに木のドアを開けると、ようやく外に通じることができるのだ。装飾品を扱う店としては当然の防犯対策だが、こういう急ぎの場合にかぎっては酷く手間がかかる。もちろん、こんなことは度々あってはたまらないが。

「さあファルド君、こっちへ。早くお入り」

立ち尽くすファルドを招き入れ、その後でようやく、ルカートはひとつ深呼吸する。

ずぶ濡れという言葉の見本になるほど見事に濡れたファルドは、全身から水を滴らせながら、床に水溜りを拡大させている有様だ。

「……参ったね、僕も顔を洗った後みたいだ」

やれやれと笑いながら、ルカートはシャツの袖で無造作に顔を拭く。その直後、対するファルドの反応にぎょつとして、上半身を仰け反らせたまま半歩後ずさった。

こちらを見上げる大きな灰褐色の双眸に巨大な雫が盛りあがったかと思うと、ファルドは突如、うわあんと声を上げて泣き出してしまったのだ。

これは まったくもって予想外だったのは、言うまでもない。

「え……ええと……っ？」

思わずもう半歩、合計一步分後ずさった後で、ルカートはようやく理解する。

何事かの理由でここを訪ねてきたものの、夜の雨の中、ファルドは相当に不安だったはずで、つまりこれは安心して気が緩んだ証拠なのだろう、と。

ちようど、先ほどの使用人がびくびくしながら毛布を運んで来たのを機会に、ルカートは平常心を取り戻した。

「とりあえず服を脱ごうか、ファルド君。そのままじゃあ、家中が水溜りになってしまう。それとも、泣くのに忙しいなら、僕が脱がしてあげてもいいけど？」 下着まで全部

それには露骨に反応して、ファルドは泣きながらもきつぱりと、首を左右に振る。

「ああ、そう」

笑いながら、ルカートは毛布を広げた。

「着替えは後で用意するから、とりあえずはこれで我慢してもらおうよ」

ファルドはしゃくりあげつつも、多少は落ち着きを取り戻したらしい。ルカートに頷いて、それから初めて言葉らしきものを発した。

「ラ、ティが……かえ……ない」

「え？」

「ラティが……ずっと……朝から、ずっと……帰ってこない」

嗚咽に紛れつつ、ファルドはやっとそれだけ言う。

それは、もつとも手短かでの確な説明だった。詳しいことはともかく、少なくともファルドがここを頼ってきた理由はそれか、とルカートは納得する。

「……そう。それで、雨で暗い中、ここまで一人で来たのかい？
きみって僕が思っているよりも、ずっと勇敢だね」

濡れた黒髪を額から掻きあげてやりながら、ルカートはにっこりと笑ってみせた。ラティフィーネが姿を消したという話が真実ならばそれは事件だが、ここでファルドの不安を煽るようなことを口走れば、話を聞くどころではなくなってしまう。

「さあ、ファルド君。ともかく早く濡れた服を脱がないと風邪をひくよ。後でたつぷり、僕を驚かせた理由を教えてもらうからね」
ファルドは頷いて、ようやくシャツのボタンに指を掛けた。

使用人に着替えと濡れた床の掃除を頼み、ルカートはファルドを連れて部屋に戻った。住み込みで働いて二十年以上になるこの使用人は、臆病なところを除けば、働き者でよく気がつく男である。

「ルカート様、もし旦那様や奥様にこのようなことが見つかったら

……」

「そのときは、僕がどうとでも言い訳するさ。実は隠し子でした、なんていうのはどう？」

腹違いの弟のほうが真実味があるかもしれないね、と皮肉交じりに笑ってから、ルカートは使用人の手から温かいスープとパンの乗った盆を取り上げた。

「少なくとも友人をもてなすことくらい、僕にだって許される権利だと思っけどね。後はもういいから、さがってお休み」

まだなにやら言いたそうな男を追い出して、ルカートはテーブルに戻る。

「……ルカート、怒られちゃうの？」

「大丈夫、ファルド君の気にすることじゃあないさ。それよりも、夕食まだだったんだろ？」

「……………」

ルカートの古着を着たファルドは、不安そうに表情を曇らせたまま、首を振る。しかし、胃袋のほうが素直に盛大な返事をしたために、ルカートはつい、声を上げて笑い出した。

泣いてしまったことだけでさえ決まり悪い様子のファルドは、余計に縮こまって赤面している。

「大丈夫さ。ラティフィーネはきみを置いて出て行ったりしないよ」

「でも……………じゃあ、どうしてラティは帰ってこないの？　すぐ帰ってくるって言ったのに……………僕、ずっと待ってたのに」

「ねえファルド君、きみがお腹を空かせて心配していたって、状況は変わらないんだよ。とりあえず、食べるものは食べないとね。ラティフィーネは、きみがちゃんと食事しないと、いつもなんて言うんだっけ？」

「……………残さず、全部食べなさいって」

「だったら、これくらい全部食べなくちゃ駄目だね」

ルカートはそう言うと、自分用にいれ直した紅茶に口を付けた。ラティフィーネのことを心配していないわけではない。泣き止んだファルドから聞いた話によれば、どこかの議員の家に呼ばれて行ったわけで、普通に考えるならばまだその家に居る。帰るに帰れない状況に置かれている可能性が高い、と判断したのだ。

少なくともルカートが知っているだけでも、占師ラティフィーネの噂は表町でも囁かれている。裏町の小娘に指図されるのは御免だと言う者もいるが、それと同じくらいには興味関心を示している者もいるのだった。そして、そういった占師傾倒者は、とかく能力のある占師を困いたがるし、そのくせそういった者に頼っているという事実を隠したがるものである。

ファルドが恐れている可能性　ラティフィーネがファルドを置いて出て行ったという事実はあり得ないと、ルカートは確信してい

た。だとすれば、やはりラティフィーネは、まだこの都のどこかにいるということになる。

そこまで整理して、ルカートはスープを口に運び始めたファルドのほうを窺った。

「ねえファルド君、その議員の名前、本当にわからないのかい？」

「……ラティが、なんとかかっていう議員、としか言わなかったから」

「じゃあね、馬車に特徴はなかったかい？ 模様とかさ」

「茶色い馬車だったよ。模様は……わからない」

「茶色い馬車……ねえ」

ルカートは苦笑した。それならば、表町になら珍しくないほどに溢れている。

「でも……ラティはお姫様みたいだったよ」

「お姫様？」

「だってね、馬車に乗ったラティの顔が小さい窓から見えて、とても綺麗だったんだ」

「まあ、彼女はもともとお姫様　いや、お姫様みたいに美人だしね」

言いかけた言葉を飲み込んで、ルカートは適当に取り繕う。

実を言うと、ラティフィーネの出生について偶然にも調べ当ててしまった事柄を、ルカートは密かに胸にしまっていた。広場に興行の芝居小屋が出ていた頃　雨期に入るよりも前からだ。

用意された粹組を捨てた彼女の価値観の中には、貴族も奴隷も存在しない。ただ、占師ラティフィーネとして生きている彼女なら、今更無関係だと一蹴してしまうだろうと思われた。

ルカートのほうでも、ラティフィーネの生まれが貴族であれ貧困層であれ、出生自体には単なる興味以上の関心はないので、結局、本人に問い質すようなことはしないままでのだ。

「ねえルカート……ラティは、悪い人に捕まったりしてないかな？ 捕まって、怖いところに閉じ込められたりしてないかな？」

「悪い魔法使いに、かい？」

軽く笑って、ルカートはファルドの顔を覗き込んだ。

「あれは……物語のお話でしょう？ でも、ラティは馬車に乗って行っちゃったんだ。煙に包まれて、そのまま消えてしまったらどうしようって……僕……」

「じゃあファルド君、きみがお姫様を助けなくちゃね。だってきみ、あのお話の中の若者になりたいって、そう言っていなかったかい？」

「僕がラティを助けるの？」

「そうさ。もちろん、僕も協力するけれど」

「にっこりと笑って、ルカートは悠然と紅茶を啜る。

「……でも、じゃあ……ルカートは何になるの？」

「僕？ 僕は……そうだねえ……若者と一緒に旅をする竜、かな？ きつと頼もしい相棒になれると思うけれど」

「じゃあ、僕はルカートの背中に乗って戦わなくちゃならないの？」

真顔のこの質問には、危うく紅茶を吹き出しかけたルカートだった。

このやり取りで、ファルドの緊張は解けたらしい。食事を平らげた後、ルカートが少し目を離れた隙に、ファルドはいつの間にか絨毯の上で眠りについてしまった。

身体に合わない大きなシャツに包まったまま、まるで仔犬のように丸くなって眠っている。

「まったく……今夜の僕ときたら、妻に逃げられて子育てに追われている夫の気分だね」

起こさない程度にぼやきながら、それでもルカートは穏やかに微笑む。

「……誰もがきみみたいだといいのにね。そうしたら……幸福の都なんて、きつと誰もが手の届くものになるのに」

現実にはそうではないから、戦争が起きたり、泥棒や奴隷商が暗躍したりする。ウルカのような女性や、売り買いされる子供が存在するのだ。

黒い砂利に混ざった宝石のように、ルカートには、ファルドの存

在が希望の光のように思えてならない。

以前、エルミナに酷くぶたれたときでさえ涙を堪えていたファルドが、ラティフィーネがいらないと言つて、声を上げて泣く。その意味を、捕らわれのお姫様は気づいているだろうか　と、ルカートは苦笑した。

「きみつて幸せ者だよ……ラティフィーネ」

ふっくらとした頬を突付いてやりたい衝動を抑えつつ、ルカートは眠りに落ちた勇敢な若者候補を抱き上げる。

さしずめ、自称頼もしい竜の最初の仕事は、勇者を起こさないようにベッドに運ぶことだった。

* * * * *

ひと言で表現するなら、これは最悪なまでに趣味の悪い部屋だった。

広さは一人部屋にしては十分なほどだが、真っ赤な絨毯には金色の薔薇模様が施され、濃い灰色の壁には、無駄に大きな鏡が掛けられている。窓はみつつあったが、それは部屋の片側にだけ、視線よりも少し高い位置に等間隔に並んでいるものだ。明りは射し込むが、景色は見えない。そして家具は、天蓋つきのベッドと、椅子がひとつ。

どれもこれも、品としては悪くないくせに安っぽいまでに豪華で、とてもまともな感性の持ち主が造ったとは思えないこの部屋が、ラティフィーネに与えられた空間なのだった。

「……最低な夜明けだわ」

呪詛さえ込めた恨めしい声で、ラティフィーネは窓を見上げる。

窓の外は白く明け、頼りない光が部屋に満ちている。雨音は遠くに聞こえるほど小さいがそれ以外に音はなく、時間もわからない。

二日続けてほとんど眠れない夜を過ごしたラティフィーネは、ともかく不機嫌の極みにあった。気持ちは少しも落ち着かず、苛々は募る。

なにより、気がかりはファルドのことだった。丸一日顔を合わせないなどということは、出会ってから初めてのことである。心配しているだろうか、泣いていないだろうか、それとも案外けろりとしているのだろうか、と頭の中では様々な想像が忙しなく駆け巡る。こういうときに思い知らされるのは、自分がいかに孤独に弱いかということだ。

寂しさと孤独には、決定的な違いがある。寂しさの影には希望があるが、孤独の後ろにはどうかすれば絶望が待ち受けていたりするものなのだ。

ラティフィーネは自分の勝手で家を出て、ファルドと出逢い、二人で生きてきた。二人だったから、生きてこられたのだと、口には出さないが認めている。もしも、ファルドがあんなに素直で優しい子でなかったら、四年も旅を続けることなど無理だったかもしれない。

「ちゃんと……食事しているかしら」

窓を見上げてそんなことを呟くラティフィーネの口調は、まるで母親のそれに近い。けれど、そんな口振りを繕ってみたところで、本当はどちらが相手に依存しているかという点、自分のほうだと思っているラティフィーネである。

「……ルカートが気づいてくれればいいけど」

表面上では軽薄極まりない男でも、一人でいるファルドに気づくかファルドが彼を頼るようなことがあれば、まず悪いようにはしないはずだ。ファルドの面倒は見てくれるだろうし、もしかしたらこの場所を探し当ててくれるかもしれない。と、そこまで思ったところで、ラティフィーネは溜息をついた。

他人に期待していることに、気づいたからだ。気弱になってしまっている証拠だ。

長い赤毛を肩越しに払い退けて、ラティフィーネは椅子から立ち上がる。

部屋のドアを叩く音がしたのは、ちょうどそのときだった。

「ラティフィーネ様、ご主人様がお呼びです」

まるで言葉を喋るオウムのような声である。一度聞いたら忘れられないその声が、この屋敷の女中頭のものであることを、ラティフィーネは瞬時に判断した。

「新しいお召し物をお持ちしましたので、お着替えください」

物言いだけは丁寧だが、この老婆はかなり強引なだった。勝手にドアを開けて入室すると、連れていた大柄な女二人に合図して、いきなりラティフィーネの服を脱がしにかかる。

「ちよつと……！」

抵抗を試みるものの、これはまるで昨夜の再現だった。なぜなら今ラティフィーネがこの部屋の中にも彼女等に強引に連行されたからで、そこで昨夜は無理やり夜着に着替えさせられたのだ。おまけに大事な商売道具まで取り上げられてしまったのだから、最悪である。

身包み剥がされた後、ラティフィーネが頭から被せられたのは、紅いドレスだった。生地にはより深い紅の刺繍糸で細かな模様が施され、袖口とぴったりとした襟元には、白いレースがふんだんにあしらわれている。

これも部屋と同様、仕立ては悪くないが趣味が悪い。いや、一般的には見事なドレスなのだが、ラティフィーネに言わせると、動き難くて窮屈で、ただ人形のように座っているための高慢な衣装ということになる。

「……… いったい、どういうつもりなの？」

身体を締め付けられる感覚には早くも閉口しつつ、不機嫌極まりない態度で、ラティフィーネは老婆を睨む。

「そんなに慌てなくても、お食事の用意は整つてございます」

それは、まったく答えになっていない。耳が遠いのかわざとなの

か、とにかくこの老婆が返事をするときは、万事この調子なのだ。た。

ラティフィーネは仕方なく、質問は諦めて口を噤んだ。

「さあさ、こちらへ」

促されるがまま、歩き難い長いドレスの裾を持ち上げつつ、部屋を出る。

螺旋階段を二階分上がり、広い廊下を抜けて食堂に着く。両開きの扉は白く、取っ手は金である。まるで何処かの貴族の家を模したかのように、一介の議員の家にしては贅を凝らした造りだ。

食堂には、十人掛けのテーブルがある。銀の燭台と生花で飾られたそのテーブルには食器が並べられ、老婆の言う通り食事の準備は整っているようだった。

「目覚めはいかがなものだったかね？」

ゆつたりとした長衣を身に着けた恰幅のいい男が、鼻の下の髭を撫でながら口を開く。

ラティフィーネは眉を跳ね上げて、そのほうを睨みつけた。

「あんな趣味の悪い部屋で、心地好い目覚めなんてあると思う？」

「これは手厳しいことを。あの部屋は、先代の我が家専属の占師が、精神統一するために必要だと言うから、わざわざあつらえたものだというのに」

台詞ほどに落胆した様子もなく、ヨアールは贅肉に埋もれてしまふいそつな目を細める。

その占師がどれほどの腕前だったのかと口に出して疑う代わりに、ラティフィーネはこの食堂に揃った面々を、ざつと見回した。

ヨアールの隣に座っているのは、朝から派手に着飾った彼の妻で、彼等の正面の席には、子供が二人腰掛けている。二人とも男の子で、年下の少年のほうは、ファルドと同じくらいの年齢に見えた。

夫人と兄弟は、ラティフィーネのことを一切意識することなく、既に朝食を始めている。それは、占師というも存在が、わざわざ目を合わすほどではないという位置づけであることを、態度で以って

示しているようなものだった。

給仕役の使用人も終始無言で表情も乏しく、先ほどから一人機嫌よく声を発しているヨアールだけが、妙に異質に思える。いや、この男にしても、この酷い扱いを善意の如く振舞っているのだから、その根拠にあるものは傲慢でしかない。

「昨日から何も食べていないらしいじゃないか。まあ、ともかくそこへお掛け」

「……その前に、訊いておきたいのだけれど」

示された末席を一瞥しただけで、ラティフィーネは苛ついた問いを發した。

「わたしは、いつになったら帰してもらえるのかしら？ ……そもそも、奥さんが病気を患っていると聞いたから、占師でも何かの慰みになればと思つて来たのよ」

わざわざ説明するのも馬鹿らしいが、言つてやらずにはいられない。ラティフィーネは一刻でも早く、帰りたかった。

食べるのなら、野菜スープとパンがあれば十分だし、眠るのなら、ファルドと一緒に狭いベッドのほうがいい。

「金持ち特有の退屈病で楽しみを求めているのなら、わたしじゃなくて道化師を呼んだほうがいいと思つわ」

これには、夫人の目つきが厳しくなる。言葉に出して無礼を詰ることはしなかったが、ラティフィーネには、こういう顔つきに見覚えがあつた。 実の母の顔が蘇る。

物心ついて初めて対面したとき、勇気を振り絞つて「おかあさん」と呼んだラティフィーネに、彼女は露骨に眉をひそめて言ったものだ。「お母様とお呼びなさい」と。

幼少の頃から伯爵家令嬢として相応しい教育を受けた姉達とは違い、ラティフィーネの言葉遣いや所作には、知性と教養が欠けているのだとも漏らしていた。そうして、貴族社会に馴染めない末娘を、憐れみ、同情し、結局は歩み寄ろうとはしなかった。

母や姉達と違い、ラティフィーネには、優雅な生活を約束された

上に成り立つ知性や、よりよい家柄に嫁ぐための教養に、意味を見出せなかったのだ。それよりも、自分で生活していくための術を知りたかったし、地に足をつけて歩くための力が欲しかった。

「まあまあ、そんなに突っかかるものではないよ。きみには執事と同じだけの報酬と権利を与えようじゃないか。きみの腕を見込んでわざわざ呼び寄せたのだからね。我が家の繁栄のために、しっかりと働いてくれなくては困るよ」

なんとも身勝手な言い様である。

思わず、ラティフィーネは溜息を漏らしそうになったが、それでも毅然と背筋を伸ばして、ヨアールのほうに向き直った。

「そんな話は最初から聞いていないし、受け入れるつもりもないわ。誰かに困られるなんて、わたしの性には合わないのよ。それに、こんな強引なやり方はお断りだわ」

「まったく……強情な娘だね。占師というものは大抵、変わり者が多いと聞くが、きみはまた特別に変わっているらしい」

口髭を撫で回しながら、ヨアールは首を捻る。まったく理解できない、というような顔だ。

「ともかく、わたしの商売道具一式を返してちょうだい」

ラティフィーネは当然のこととして、要求する。

道具を持たない占師は、少しばかり勤が働くことがあるというだけで、無力なのだ。ドレスを着せられ、言いなりに動かされるなど、ラティフィーネの自尊心を著しく傷つけるだけでなく、今後の生活に関わる大問題だ。

「わたしには、宿で待っている連れがいるわ。これ以上、ここに長居するわけにはいかないのよ」

「……では、こうしよう」

勿体つけた口調で、ヨアールが吐息混じりに言う。

「きみがいた宿に使いをやるわ。そうして、その連れという者をここへ呼んであげようじゃあないか。仕方がないから、きみと一緒にここに置いてやってもいい。それでどうかね？」

まるで、用意していた台詞のようだとラティフィーネは思った。おそらくこの男は、妥協案としてそれを用意していたのだろう。そうやって理解を示す振りをしているに違いない。

「……あなた、本当は何が目的なの？」

「何、とはどういうことかね？」

目を細めて、ヨアールは笑う。

「さあ、早くそこへお掛け。せつかくのスープが冷めてしまう」

口振りこそ変わらないが、今度は、その目つきに有無を言わせぬものを漂わせている。

ラティフィーネは渋々ながら、使用人の一人が引いた椅子に腰掛けた。

「伯爵家のお嬢様は、こんな食事ではご不満かもしれないがね」

「……嫌な人ね」

嫌悪を隠しもせず、ラティフィーネは吐き捨てる。

冷めたスープは味気なく、そして食堂内の空気はどこまでも重く、冷ややかに感じられて　どうしてだかラティフィーネは、四年前までの食卓を思い出していた。

ヨアールのラティフィーネに対する態度は、朝食以来、表面上では常に氣遣う素振りを見せつつ、本質的には実に見下したものだ。た。

ドレスだけではなく、靴や髪飾り、絹の靴下まで用意して、ラティフィーネにそれを身に着けることを強要したのだ。そして食事のとき以外は、外から鍵を掛けた悪趣味な部屋に押し込めたのだ。もちろん、ラティフィーネは最初からおとなしくしていたわけではない。すべてにおいて抵抗を試みたものの、徒勞に終わってしまった結果である。

監視役のお婆は抜け目なく、定期的にラティフィーネの在室を確認するし、ヨアールからの趣味の悪い贈り物を無理やり身に着けさせて去っていくのだった。

窓の下に椅子を置いて踏み台にし、なんとか外に出られないかという試みも、如何せん重いドレスが邪魔だった。自分の足元さえ見えないばかりか、両手を高く上げるのも難しい窮屈な衣服は、それだけで全身を縛る枷のようなもので、とても身軽というわけにはいかない。靴や髪飾りはともかく、ドレスは脱ごうにも、どうしたつてうまく背中には手が届かず、足掻くほどに疲れる。

お人形のように綺麗　と昔、ラティフィーネは伯爵令嬢を絵に描いたような姉達を見て思ったものだった。ただ、見るのと着るのとは大違いで、自分で脱ぎ着することもままならず、手足の爪の手入れから髪を梳かすことまで、すべてにおいて誰かの手を借りなくてはならないその生活には、数日も経たないうちに辟易してしまっただという過去がある。

ともかく、十歳で育ての親でもある占師を亡くすまで、ラティフィーネは実家と距離を置いて生活していたわけで、いくら伯爵家の面々が本当の家族なのだと頭で理解しても、相容れない価値観や感

覚というものは、どうしようもなかった。

そして、そういう違和感を諦められるほど大人ではなかったし、素直に受け入れてしまえるほど単純でもなく、無闇に感情を爆発させてわめき散らせるほど、幼くもなかった。

つまり、ラティフィーネは絶対的に孤独だったのだ。

その感覚は、今の状況と、なぜかよく似ている。

自分独りでは何もできないのだと、それを思い知らされる瞬間が、ラティフィーネは大嫌いだった。それは、家を出た大きな理由でもある。

「……絶対に、ここから抜け出すわ」

雨音をかすかに伝える頭上の窓を睨みながら、ラティフィーネは自分自身に宣言する。

このまま、言いなりになどなってやるものか。絶対にファルドの待つ宿に帰るのだと、その気持ちは一瞬たりとも揺るがない。

ヨールはこの都では要職にある議員であり、この都の統治を中央政権より委任されている貴族とも通じているようだった。ラティフィーネがカスタント家の者であることを知った経緯がどういものかは知らないが、ともかくこの事実をなんらかの形で利用するつもりだろうという想像は容易い。

今朝から数度目の、強引な来訪者を知らせる気配　扉の向こうから開錠する音が響いたのは、午後を少し回った頃のことだった。

「ご主人様が直々にお越しです」

甲高くしゃがれた声を発して、老婆が仰々しく頭を下げる。

ラティフィーネは椅子に腰掛けたまま、そのほうを見た。

「ご気分はいかがかな？」

まるで上機嫌の口ぶり、ヨールは口髭を撫で回す。この男にとっては、嫌悪の目で見られることすら快感なのではないかと疑うほどだ。

「きみの住んでいた宿に使いをやって、荷物をこちらに引き取らせてもらったよ。残念なことに、きみが一緒に暮らしていたという助

手の少年は、見つからなかったがね」

ヨアールは、嬉しそうに目を細める。

「見つからなかった……ですって？」

「なんとも薄情なことじゃあないかね。宿の者の話によれば、きみがここへ着たその日の夜に、その少年は出て行ったそうだ。なんでも、止めても聞き入れなかったということだから、余程そこから逃げ出したかったのかもしれない」

「馬鹿なことを言わないで！」

思わず、ラティフィーネは椅子から立ち上がった。

「あの子はわたしを待っているに違いないわ。ちゃんと探したんでしょ？ 下手な作り話でわたしを納得させようなんて思わないことだわ」

「これは心外なことを。こうして誠意をもって接して差し上げているというのに、それを理解してもらえないというのは寂しいことだね」

ヨアールはさも可笑しそうに笑って、それから背中に隠し持っていた二冊の本を、ラティフィーネに差し出した。

「この本は、君のものではないのかね？ それとも……その少年が残していったものかもしれないが。まあともかく、わたしが嘘を吐いているわけではなく、ちゃんと迎えをやったという証明として、受け取っておくれ」

つくづく、嫌な男である。

「本もいいけど、いい加減にわたしの占い道具を返してくれない？」

「それは難しい注文だ。きみにはしっかりと働いてもらうつもりではいるがね、それは今ではないのだから」

「……わたしをどう働かせるつもりか知らないけど、もしカスタント家の名前を利用しようなんて考えているとしたら、意味のないことだわ」

「おやおや。お嬢様は、わたくしめを信用して下さらないわけです。さすがに……上流階級にありがちな、自己主張の薄いお上品な

だけのお嬢様とは違っていらっしやる」

「褒め言葉としては、もつと別の言い方があるんじゃないかしら」
ラティフィーネは眉をひそめながら、髪を払い上げた。

ヨアールは目を細めただけで構いもせず、ゆったりとラティフィーネの周りを歩き回りながら、口髭を撫で回す。

「何を隠そう……このわたしは、あなたと同郷の出身でしてね。つまり 妻の家には婿入りという形で迎えられた、もともとは商人の家の出というわけで」

「 だから？」

「我々領民は……次こそお世継ぎがお生まれになればと願ったものだ。今度こそ、お世継ぎのお生まれを知らせる百発の銃声が響き渡るのではないかとね。しかし、今度も銃声は十発……つまり、女の子様がお生まれになったというわけで。しかも、伯爵様はしばらくして、そのお子様は乳母が目を見離した際に行方知れずになってしまったと発表なさった」

そういう話を聞かされれば、傷つくか動揺して大人しくなるとでも思っているのだろうか。

ラティフィーネにとっては、表情を強張らせるほどの現実でも、嫌悪する事実でもない。不快だとすればこの男の暑苦しい顔であり、分厚い唇と口髭が動く様だった。

「ところが……一部の領民や近隣の貴族の方々の間では、まことしやかにこんな噂が流れていたのをご存知かな？ その赤ん坊は、実は当時伯爵家に入入りしていた占師の老婆に預けられ、密かに葬られたのではないかと。……伯爵家が男子を切望していたというのは有名な話だったのだから」

「……残念ながら、占師は預かった赤ん坊を捨てるでもなく、自分の弟子として育て上げた。伯爵はそれを知っていい顔はしなかったでしょうね。かといって、彼が事実を知ったのは何年か経った後だったから、処分させるわけにもいかなかった。占師が死んだときもそう。仕方なく子供を引き取ることにしたっていうわけだわ。」

お陰でわたしは、命拾いしたっていうわけだけど」

ヨアールをちらりと一瞥し、ラティフィーネは不機嫌な態度を隠しもせず、再び椅子に腰を下ろす。

「お望みなら、もっと細かく話してあげてもいいわよ。あなたよりは、きつとわたしのほうが詳しいと思うから」

「これはまた……予想以上に遅しいお嬢さんだ」

にんまりと笑みを浮かべ、ヨアールは殊更ゆっくりとした口調でラティフィーネに言い寄った。

「では、姉上方のうち、お二人もが流行り病でお亡くなりになったのもご存知かな？」

「……風の噂くらいにはね」

「ならば話も早いというもの。今のカスタント伯爵家の財力は、昔の繁栄など見る影もないというのが実状。しかしながら……古くから続いた由緒正しい家柄という、最後の頼みの綱がある。そういうときには息子よりもむしろ、娘に期待がかかるものだと相場が決まっているものだ。戦争で富を得た成り上がり貴族は、金で家柄のよさを買おうとするものだからね」

話が読めたとばかり、ラティフィーネは鼻を鳴らした。

ふざけるな、と言いたくもなる話である。つまり、ここに来て初めて、ラティフィーネが一応はカスタント家の娘であるという事実が生きてくるというわけだ。

「伯爵家の消えた末娘を探そうという気運が、伯爵家周辺で高まっているのもまた事実でしてね……わたしは、幸運にもその大事なお嬢様をこうして家にお迎えすることのできた幸せな男と言っわけ」

「馬鹿じゃないの」

紅いドレスの裾を片足で蹴り上げ、ラティフィーネは足を組む。

ついでに腕も組んでから、ヨアールを睨んだ。

「伯爵家がわたしを本気で欲しがっているのなら、あんなにかよりもずつと先に、わたしを見つけているわよ。謝礼か何かをあてに

しているんでしょうけど、そんなものは期待するだけ無駄だわ。くだらない噂に乗せられて、身を滅ぼしてから運を嘆くのがオチよ」
言い放つラティフィーネに、ヨアールは含み笑いで応えた。後方に控えている女中頭の老婆にいたっては、喉の奥を引き攣らせるような声をたてて笑い出す始末だ。

「お嬢さんの知らないところで、ちゃんと世の中は回っているんだよ。巷で人気の占師さんでも、それを理解できるほど大人ではないかもしれないがね」

それは、占師としてのラティフィーネを頭から侮辱するものだった。それは、カスタント伯爵家の娘として悪し様に言われるよりも、ずっと許せないこともある。

腹立たしさのあまり口をきけないラティフィーネの膝の上に本を残し、ヨアールは身体を揺らしながら部屋を出て行った。それに老婆が続き、しばらく後で、部屋の鍵を閉める音が響く。

ラティフィーネは、苛々と立ち上がった。

部屋の中を意味もなく歩き回り、ふと、視野にもう一人の自分の姿が映り込むことに気づく。

灰色の壁に掛けられた、無駄に大きな鏡だった。

鏡の中のラティフィーネは、慣れないドレスを身にまとい、立っていた。白いレースに飾られた襟元の上に乗った顔は、まるで他人のもののように、唯一自分でも気に入っている薄蒼色の瞳が、覇気もなく見つめ返しているばかりだ。

「情けない顔ね……ラティフィーネ」

自嘲するように呟く。

腕に抱えた二冊の本に視線を落とすと、嬉しそうに本の内容を語って聞かせようとするファルドの笑顔が脳裏に浮かんでくる。

どういうわけか、今ならばルカートが突然目の前に現れて軽口を叩いたとしても、歓迎できるような気がした。

両手で本を抱き、ラティフィーネは天井を仰ぐ。

情けなくて　泣きたくなった。

* * * * *

過去の恋の真似事を例に挙げて、女性から呼び出される経験は豊富だが、自分から誰かを呼び出す経験には乏しいルカートである。まして、恋にかぎらずとも、何事に対しても強い執着を抱かないで来た彼にとって、必要に迫られて誰かに頼むということ自体が極めて珍しいことだった。

しかも、そんな彼が初めて呼び出した相手は、エルミナ　元婚約者なのだ。

身勝手故に一方的に婚約を解消したという事実があるうえに、最後に会ったときにも決して優しくはしなかった。

さらに付け加えるなら、この雨だ。

そんな相手に呼び出されてわざわざ雨の中出向くなど、彼女には似つかわしくない行為だとすら、ルカートは他人事のように認めていた。

それでも、待つより他はない。

表町の大通りに面した、画廊である。壁中に飾られた肖像画や風景画には莫大な値がつけられていて、そもそも趣味でやっているだけという店主には商売をする気がない。それでいて、画廊の中にはテーブルやソファが用意されており、有閑婦人達の集いの場として定着している場所のひとつでもあった。

まるで片想いの相手を待ち侘びるように　とは、画廊の主人の揶揄だが、ともかくルカートはらしくもなく落ち着かない気持ちを抱えて、ひたすらドアのほうを見ていた。人影らしきものがドアの小窓に映る度、壁に凭れた背中を浮かせ、落胆と安堵が混ざったような吐息を漏らす。

三度目には、ルカートはついに苦笑を禁じえない気分陥った。

「……僕って、こういう男じゃなかったはずんだけど」

これまで自分が待ちぼうけさせた恋の遊び相手も、もしかしたらこんな心境だったのだろうか、と。少々焦り始める一方で、そんなことを頭の端で思う。

どれくらいの間、そんな自分自身への戸惑いの中にいただろうか。

やがてドアが開き、軽やかな足取りでこちらに近づいてきたのは、紛れもないエルミナだった。

「お久しぶりね、ルカート」

雨避けの上着をするりと脱ぎながら、彼女はにこりと笑った。蜂蜜色の巻き毛も、大きな青い瞳も、以前と少しも変わらない。

「呼び出したりして、悪かったね。正直、来てくれないのかと心配していたところなんだ」

「あら。わたしはそんなに薄情じゃなくてよ」

可愛らしく肩を竦めて、エルミナは笑った。そして、ルカートが勧めたソファに腰を下ろし、あなたも掛けたらいかか、とばかり自分の隣を指し示す。

「でも……あなたがわたしを頼ることがあるなんて、思わなかったわ。手紙を受け取って、本当に驚いたもの」

「僕だつて驚いているさ。今だつて、自分がこんな男だったかと疑問に思っている最中だよ」

本音と冗談を混ぜて、ルカートは応じる。

「わたし、あなた的那ういうところも好きだったわ」

エルミナは満足そうに口元を綻ばせ、まるで他愛のない冗談を口にするような、悪戯っぽい目つきをした。

「わからない？ 誰にでも優しくして、そのうえ誰にでも冷たいところよ」

「……ああ」

曖昧に間の抜けた相槌だけを返して、ルカートは苦笑する。

短い間に、エルミナは少し大人びたようだと思った。彼女の容姿

は以前と変わらずに可愛らしいが、その瞳には女性特有の柔らかさも同居している。少なくとも、以前のエルミナならば、こんなときは媚びた目をしていたところだ。

「それよりも、わたしにお父様の交友録を調べさせて、どうするつもりなの？」

「ちよつと……困ったことになってしまつてね」

前置きして、ルカートは事の次第を説明した。

「つまり、あの女占師を連れ戻したいがために、あなたがあの奴隷の子に協力するっていうことかしら？」

話の内容がラティフィーネに関することだとわかつた途端、エルミナは興味が失せたとはかり巻き毛を指先で弄び始めたが、聞いてはいたらしい。

「きみ流に解釈すれば、そういうことになるだろうね」

「それであなたは……わたしに頼めば主な議員の名前とちよつとした情報くらいは楽に手に入るだなんて思っているの？　ねえルカート、わたし、あなたはもつと自尊心の高い人だと思っていたわ。自分から縁を切つた相手に頼みごとをするなんて、ちつともあなたらしくないもの」

嘲笑するかのように、エルミナはふつくらとした唇を歪ませる。

「なんと言われても、僕には言い返す言葉はないよ」

「あなたは、前とは少し変わったんだわ」

「そうかな？」

「それとも、あの占師のこと、本気になつたのかしら？」

さらりと問い掛けながら、エルミナは持参した用紙を折り畳んだまま、片手の指先で弄ぶ。

ルカートは、降参とばかりに肩を竦めて見せた。

「ねえ、わたしのことを本当に好きだつたことがある？　短い間でも、本気だつたと思つたことがある？」

「……あるさ。僕は、きみと結婚することを当たり前に受け止めていたし、きみをちゃんと奥さんとして幸せにするべきだと思つてい

たよ」

それは、正確には愛だの恋だのという感情とは一線を画したものであったかもしれない。それでも、ルカートが口にしたことはお世辞でもなければ、エルミナの手にある情報欲しさのことでもなかった。

ならいいわ、とエルミナは笑う。そうして彼女はソファから腰を上げ、一度ルカートの目の前を横切ってから振り向いた。

「わたし、別の人と婚約することにしたの。あなたより背が低くてあなたよりは不細工で、だけど、いい人だと思うわ。正式発表はもう少し先だけれど……ねえルカート、あなたはわたしを祝福してくれる？」

「もちろん。きみの幸せを、心から願っているよ」

ルカートは、知らずに微笑んでいた。

エルミナが驚いたように瞠目し、それから一瞬だけ泣き出す直前の顔をしたが、彼女の自尊心はそれ以上を許さなかったらしい。緩く頭を振ると、乱れてもいない巻き毛を撫でつけて、それから真っ直ぐにルカートを見た。

「これは、ひと月前からのお父様の交友録を内緒で書き写したものです。都で要職にある議員の名前は、ほとんど出ているわ。きっと、あなたのお父様と親しい方もいらっしやるでしょうけど。昼食会や晚餐会で話題になったことの要約も記してあるから、何かの役には立つかもしれないわ」

「ありがとう、エルミナ」

ルカートは立ち上がって礼を言い、エルミナから折り畳んだ数枚の紙を受け取った。

「これは個人的な感想だけど……お父様の最近の口振りでは、出納長とこの都の領主との関係があまりよくないようだわ。それから、議長と司教様の不仲は有名なことだけれど」

「ああ、それとなく噂は聞いているよ」

「そう？　　そうね、あなたはそういう噂を女性のお客様から聞

き出すのが上手なもの」

「心外だな。僕はこれでも、真面目に商売するときにはするんだよ。世間話のお相手をするのも、営業のうちさ」

にこりと笑って囁くルカートにエルミナは笑い、それから小声で打ち明けた。

「出納長夫人が派手好きなのは有名だけれど、一昨日の晩餐会で議長夫人が自慢していた首飾りを、とても悔しそうに見ていたわ。きつと近いうち、あなたのお店にご指名があるとは思うけれど……彼女はあるあなたのことを気に入っているようだから、あなたからご機嫌伺いをするといいわ。噂話には詳しい奥様ですもの。あの占師の居場所を見つける手がかりくらいなら、知っているかもしれないよ」

「……エルミナ」

「わたしも議員の娘ですもの。噂くらいは耳に入るものだわ」

以前の彼女らしからぬ勧めにルカートが困惑していると、エルミナはそう言って弱く笑った。

彼女は少し、無理をしているのかもしれない。

ルカートはそれに気づいたが、優しい言葉で慰めることはむしろ傷つけるだけだということにも気づいて、口を噤む。

「さよなら、ルカート」

それはいつか、ルカート自身がエルミナに一方的に告げた台詞だった。

慣れていたはずの甘い香水の残り香が、やけに印象的に鼻先を掠めていく。今更のように、元婚約者のいじらしさを見た気がした。

「ごめんよ……エルミナ」

謝罪など、最も卑怯な行為なのかもしれない　とは、口にした後で悟る。

幸いなことに、ルカートの漏らした呟きは、去り行くエルミナには届かなかったようだ。

ルカートは目を閉じ、そして一度だけ深呼吸をした。

画廊を出たルカートは、止まぬ雨を仰ぐ。

頼んでいた貸し馬車屋は既に馬車を寄越していて、雇われ御者はルカートを見つけると姿勢正しく起立して、ドアを開けるために御者台から飛び降りた。

「もう一度、裏町まで頼むよ」

御者は心得た様子で、畏まりました、と応える。

ルカートは素早く馬車に乗り込もうとし、しかし、こちらに駆け寄ってくる少年の姿を発見して、やれやれと吐息した。

「見つけた！ ルカートっ」

「……ああもう、本当に。僕が迎えに行くまで宿にいろって約束したはずなのに」

雨の中を走ってきたファルドは、先日の夜と同じく、見事に濡れ鼠である。思わずルカートは、脱力したまま額に手を当てる。

しかし、呆れ顔のルカートにお構いなく全速力で駆け寄ってきたかと思うと、ファルドは早口に捲くし立てた。

「大変、大変なんだよ！ 宿の荷物、全部なくなっちゃったんだ。

僕の大事な本も、ラティの荷物も全部……っ」

「え？」

「あのね、知らない人が全部持って行っちゃったんだって」

肩で呼吸しながら、ファルドは真剣そのもので訴える。

ルカートは、ともかくファルドを先に馬車に押し込んで、それから自分も乗り込んだ。

「荷物がなくなっただって、どういふことなんだい？」

「だからね……ええと、ルカートに送ってもらった後、僕が調理場に行ったら、おじさんがとても驚いた顔をして言ったんだ。もう、二度と戻らないかと思っていたって」

「うん、それで？」

慎重に、ルカートは続きを促す。

ファルドは数秒の間、頭を整理するように黙り込んで、やっと続きを話し始めた。

「今日のお昼前に、ラティから頼まれたっていう人が来たんだ。それで、その人が宿の未払い分を払って、荷物も全部持って、出て行っちゃったんだって。ラティは、偉い人の専属の占師になるから、心配いらないうて。それで……あと、おじさんとおばさんは僕のことを心配してくれていたんだけど、僕もラティと一緒にだって、その人は言ったんだ」

「……つまり、それで体よく一人の占師と少年の存在を煙に巻いたっていうことか。僕は好きじゃないなあ、そういうのは」

いかにも、金に物を言わせる腐った議員のやりそうなことだと、ルカートは心の中だけで吐き捨てる。

少なくともはつきりしたのは、ラティフィーネは確実にその『偉い人』とやらの屋敷にいるに違いないということだ。問題は、それを特定する手掛かりなのだが。

「ええとね……おじさんがこれを持って行きなさいって」

勝手に考え込むルカートの目の前に差し出されたのは、綺麗に折り畳まれた上質な紙だった。全身ずぶ濡れなのにこの紙だけ濡れていないのは、ファルドが余程大事に胸に抱いていた証拠だ。

「僕、ラティのことを……本当はその人の言うことと違っていて、おじさんとおばさんに話して、ルカートがラティを探してくれているっていうことも話したの。そうしたら、これが役に立つだろうって」

「……これは……なるほど」

一見して、ルカートは思わず笑みを浮かべる。

それは、裏町の宿にはそぐわない支払い証明書だったのだ。当然、支払い主の名前が書いてある。こういった証明書は通常、裕福な家や議員、貴族の間でやり取りされるものだ。裏を返せば、裏町の庶民に格の違いを見せつけるための格好の書状となる。

裏町の宿屋の主人など、それで簡単に黙らせることができることを高を括っていたのだろう、とルカートは理解した。先ほど心の中で吐

き捨てた台詞を肯定するような、いかにも傲慢なやり方だ。

「よくやったね、ファルド君。これがあれば、ラティフィーネの居場所はわかったも同然だよ」

「本当っ？ 本当に、ラティの所に行けるの？ ラティとまた会える？」

「もちろんさ。ただし、その前には準備が必要だけれどね」

ルカートはにっこりと笑ってから、行き先を変更して家に戻るよう御者に出発を促した。

鞭を打つ尖った音が響き、続いて馬車が動き始める。

「準備って？ どれくらいかかるの？ 僕もお手伝いすることがある？」

「そうだねえ……ファルド君には、ちょっとした間、僕の助手になってもらおうかな」

「……僕、ラティの助手で、悪者を退治する勇者で、でも……ルカートの助手にもなるんだね」

そんなことを真剣に口にするファルドを横目に、ルカートは改めて支払い証明書に目を通す。

金額は、宿泊料と食事代には多すぎるほどの額で、ここにも高慢の跡が見える。

用紙の下のほうに記されているサインには 見覚えがあった。

* * * * *

雨の日でも、夕暮れは訪れる。

窓から降り注ぐ弱い光が徐々に灰色に転じ、部屋の中を薄暗闇へ引きずり込むのだ。

雨音は、朝から変わらずに悪趣味な部屋を満たし、ラティフィーネは椅子に腰掛けているか部屋の中を歩き回るだけで、ここでの二

日目の夜を迎えようとしていた。

時間の経過と共に理不尽な扱いに対する苛立ちは増大しているが、現状への焦りは落ち着きに姿を変えている。

何か、機会があるはずなのだ。

何事も、動き出すにはきっかけがある。それを待たないことには、無闇に動いたところで事態は改善しないものだ。

「……お婆がそう言っていたわよね」

育ての親であり師匠でもある彼女は、幼いラティフィーネが腹を立てたり思い通りにならない占い修行に落ち込んだりしたときには、そう言つて宥めたものだった。

ラティフィーネは、部屋の中央から窓を見上げていた。

仄かな光は、しつとりと顔に降りてくる。

そろそろ、あの女中頭がやって来てこの部屋にも灯りをともしていくだろう、と。そんなことを思いながら何気なく壁のほうを振り向いたとき、小さな光が目飛び込んできた。

「……鏡……」

それは、壁に掛けられた大きな鏡だった。ラティフィーネの金環の耳飾りが、僅かながらの光を反射して、そうして鏡に映り込んでいるのだ。

その様は、見慣れたものとよく似ていた。水鏡に沈ませた水晶の欠片のように、耳飾りの仄かな輝きが、鏡全体に広がっていく。

ラティフィーネは、目を閉じた。

深く息を吸い込んで、吐き出す。そうして改めて瞼を開いたラティフィーネの目には、鏡に浮かぶ、ぼんやりとした映像が見えていた。

水鏡のように、うまくはいかない。しかし、それは間違いなくフアルドの姿だ。

笑っている。

一緒にいるのは、ルカートだった。絨毯の上に寝転がっているフアルドに注意しながら、それでも半分は彼自身が楽しんでいるよう

にも見える。

「……わたしを除け者にして、楽しそうじゃないの」

文句を言っではみるものの、鏡の中の光景に目を奪われるラティ
フィーネは、僅かに笑みを浮かべていた。

外に降る雨は、止まない。

しかし、胸の中に渦巻く苛立ちの雨雲は、急速に消えつつあった。
代わりに、強く願う。

胸の中に輝いている、一番愛しい場所に 帰りたい、と。

毎日を、窮屈だと思っていた。

周囲にあるすべてのものが色褪せて見えだし、細かく世話を焼きたがる教育係や教師が疎ましかった。自分よりずっと物分りのいい姉達は別世界の人間に見えだし、貼り付けたような微笑を浮かべる美しい母や、ほとんど口をきくこともない父のことは、その存在自体を意識しないように心掛けていたような気がする。

そういう自分が嫌で　用意されたままの人生を歩くことが我慢ならず、ラティフィーネは家を飛び出した。

四人の姉達のうち、上の二人が病死したことを知ったのは、一年半くらい前だったと記憶している。偶然食堂で隣に座った旅人が、東方で流行り病が猛威を振るっていることを教えてくれたのだ。

記憶のかぎり、実家のことを占ったのは、その一度きりのことだった。そして、姉達の死や実家の衰退を知った。

薄情なことに、ほとんど感慨らしいものは浮かばなかった。多くの客の依頼を受けて占うときと同じように、淡々と水鏡の映す現実を見ていたのだ。

空がとても青く澄んだ日のことだった。

こんなときは泣くものかしら、と少しだけ悩んだことを、ラティフィーネは覚えている。なぜなら、とくに一番上の姉は彼女に優しくかったから。

今日が雨の日だったらいいのに、と。そう思ったことも、覚えている。

「雨ならば……雨に紛れて泣けたもの」

椅子に腰掛けたまま窓を見上げて、呟く。その後で、ラティフィーネは小さく笑った。

以前、ルカートに同じようなことを言った事実を思い出したからだ。実際に雨の中を歩いてきた彼のほうが、当時の自分よりもいく

らか前向きのようにも思える。

外から聞こえるのは、ここ数日変わらない雨音だ。窓から降り注ぐ朝陽はぼんやりと白濁しているようで、柔らかいくせに陰湿でもある。

振り返ってみれば、こんなふうに物思いに耽るのは、初めてかもしれない。

ラティフィーネは、これまで常に前を向いていたつもりだった。自分の意思で貴族の娘であることを捨て、ファルドを道連れに選び、占いで生計を立て、旅をしてきた。

どこにあるのかわからない、幸福の都を求めて。

幸福は、どこかに存在するものだと思じて。

だから、自分が捨て去ったものに対する執着はないほうがいいと思っただし、実際、窮屈な生活への未練はなかった。そしてそれと同時に、自分に向けられる他人の想いを思い遣ることも、やめてしまったのかもしれない。

カスタント家の人々が、占師に育てられた末娘と距離を置いていたことを、今でもラティフィーネは認めている。彼等が自分を疎ましく思っていた部分があったらうことも、きつと事実だろう。

しかし、一番上の姉がそうであったように、ときどき彼等は優しくかった。彼等は貴族社会に馴染めないラティフィーネを持って余してはいたが、決して悪魔ほどに冷酷ではなかった。

戸惑いはきつと、双方に存在したのだ。

歩み寄ることをしなかったのは、双方の責任だったかもしれない。それでも、一切を切り捨てて顧みることをせず、勝手に飛び出したことに咎があるとすれば、それはラティフィーネが負うべきものだ。もちろん、だからといって、家を出たことに後悔などしていない。それでも、現状から抜け出すために漠然とした幸福の姿を追うことと、自分の捨てたものの姿を見据えたうえでなお自身の道を歩むこととは、違う。違うのかもしれない。

雨音に耳を傾けながら、ラティフィーネは感じていた。

姉達の死を知ったのが今ならば、泣いたかもしれない。今ならば、彼女等を本当は好きだった事実を、そして本当は愛されたかった事実さえも、受け入れられる気がするから。

そして、そんな自分自身の変化に、少し戸惑っていた。

「……毎朝、ご苦労様だわね」

近づいてくる足音に気づいたラティフィーネは、無感動にドアを見据える。

今晚、ヨアールと親交のある人々がこの屋敷に集まるはずだ。そこで自分が占師として披露されることを、知っていた。壁の鏡と耳飾りの反射が水鏡の代用になると知ってから、部屋の中に居ながら外の様子を知る術を得たのである。

あの女中頭だと思っていた老婆こそ、この屋敷の先代の占師であり、ラティフィーネが裏町にいることを偶然に突き止めた人物だということも。議会で出納長を務めるヨアールが、実はこの都の領主との関係がうまくいっておらず、そのご機嫌取りとして、ゆくゆくは自分を差し出すつもりであることも。

「今朝のお目覚めはいかがでしたかな？」

顔を出したヨアールは、今日は一段と機嫌がいいようだ。

ラティフィーネは、そんな男に悠然と応じるのだった。

「そうね。今日こそは、いい日になる予感がしているところだわ」

* * * * *

都の議会で出納長を務める要人　ヨアールの屋敷に、表町でもっとも有名な装飾品店の一人息子が訪れたのは、裏町から赤い髪の占師が消えてから三日目の午後だった。

小雨の降る中、馬車は滑り込むようにして門をくぐる。

馬車の中には、ルカートとファルドとが乗っていた。最初の頃は馬車に揺られることに興奮していたファルドも、今では慣れたようでも大人しく座席に収まっている。そうしているととてもお利口に見えるよ、とルカートがおだてたせいもあるだろうが、実際は緊張しているのかもしれない。

玄関の前に到着し、馬車が止まる。

ルカートは出迎いの執事に礼を述べ、上品な笑みを浮かべつつ、屋敷内に足を踏み入れた。その後を、大きな四角い鞆を抱いたファルドが続く。

「奥様、本日は快く迎えてくださって感謝します」

「ちょうどよかったのよ。昨日こちらから使いを送る前に、あなたのほうから申し出てくれて、あたくしがどんなに嬉しかったことか」
「では奥様、ここ数日の間、僕がどんなにか奥様にお会いしたかったかご存知ですか？」

「相変わらずお上手ね」

夫人は機嫌よさそうに、ルカートとファルドを居間に招き入れた。家の中にいるときでも自身を飾り立てていなければ気が済まないという、無類の派手好き女である。顔の造作は整ったほうで肌艶も実年齢よりは若いのに、華美な演出が彼女自身を安っぽい女に仕立てていることに当人は気づいていないのだった。ルカートにしてみれば、上顧客を手放してまで品性を説いてやるほどお人好しでもないの、自分と合わない感性について深入りするつもりはないのだが。

居間に入るとまず、ルカートはファルドのことを紹介した。夫人の視線がちらちらと、タートル人奴隷に対する蔑みを発していることへの、多少の防壁でもある。

「これは、僕の店で下働きに雇った子です。最近では、僕専用の用人人なのですが」

「あらそうなの。でも、こんな子供が役に立つかしら？」

「それでも、将来は僕の片腕になる人材ですよ」

にっこり笑いつつ、ルカートは応じる。ちらりと視線で促すと、ファルドは緊張した動作で使用人らしく深々とお辞儀をした。

夫人はそれを一瞥すると、以降はファルドへの関心を失ったようだ。早く持参した品を見せてくれと、雨天でも明るい窓辺のソファに誘う。

「あなたのところは最新の流行を取り入れた品が揃っているから、いつも楽しみだわ。身に着ける宝石だけではなくて、居間を飾る小物や置物の類も趣味がいいと評判よ」

「ありがとうございます、奥様。父も喜ぶでしょう」

夫人の手を取って座らせた後、ルカートは敢えて床に片膝を着いた姿勢のまま一礼する。そしてファルドに合図して鞆を持ってこさせると、脇のテーブルの上で開いて見せた。

「今日はとくに、奥様に相応しい宝石を数点お持ちしました」

「……まあ」

素直な感嘆とも演技とも思える声を発して、夫人はじつと宝石に魅入る。

「これは素敵な色なこと。……でもこちらのものは、議長夫人がしていたものと似ているわ。あたくしは、あの女を見返してやりたいのよ。同じものでは我慢ならないわ」

「奥様、僕は人を選ばずに誰にでも同じものをお勧めするほど、薄情ではありませんよ。ご覧ください。ほら、こちらのほうがずっと色もいいし、作りも精巧です。奥様の好きな花模様の隠し彫りも、この通り」

ルカートが笑みを浮かべて説明すると、夫人は簡単に気をよくして口元を扇子で覆う。

「もちろん、まったく斬新な造りのものもご用意しております。こちらなど、奥様の白い肌にはすばらしく映えますよ」

次にルカートが示した首飾りは、しているだけで肩が凝りそうな宝石を散りばめたものだった。店で扱う商品の中でも、もっとも高価なものに挙げられるもののひとつだ。

目を輝かせている夫人の目の前で、ルカートはそれを両手に取り、断りを述べてから夫人の背後に回った。

「奥様、これが最高級の宝石を身に着けることの重みです」

囁くような声は、意識してやっているものだ。

部屋の隅にいるファルドが大きな目を瞬かせながらこちらを見ていることに気がついて、ルカートは内心で苦笑した。無垢な少年には少々毒らしいが、この際仕方ない。ただし、無愛想な赤毛のお姫様へ悪意無く告げ口されることを考えたら、口止めは必要かもしれないが。

「ねえ奥様、今日はこれからここに旦那様と親しい方々がお集まりなのでしょぅ？」

「ええそうよ。議長夫人もね。だからこそ見せつけてやらなくては」
応じる夫人の声は、うっとりとして、視線はまるで空中を滑っているようだ。

「それにしてもこの首飾りの美しいこと……ええ、なんて素敵なんでしょう。ああでも……これはとても高価なのでしょうね……本当に、あたくしのものにできるならいいのに」

「よろしければ奥様、今宵一夜、こちらをお貸ししましょう。そのうえで、本当に気に入って下さったら購入してくださればいいし、お返しくださつても結構です。明日、またお伺いしますから」

この夫人を罠に落とすことは、蜜に酔った蝶を捕まえるより容易い。最上級の笑みを浮かべたルカートは、とどめとばかりに耳元で囁いた。

「もちろん、こんなことは他の方には致しません。奥様だからこそ……僕は信用するんです」

派手好きで気位の高いところがあったとしても、育ちのよいこの夫人は、結局のところは甘い誘惑に弱い。

ルカートは、ちらりとファルドに目配せした。間違っても、これから先の話題に使用人が露骨に反応してはならない。口が裂けても、「ラティだ」などと口走ってもらっては困るのだ。

「ファルドもちちゃんと理解しているらしく、きゅつと口元を引き締める。」

「その代わり……奥様、ひとつだけお願いがあるんです。今夜の席に、僕も出席させていただきませんか？ なんでも、面白い余興があると、親しい方々に声をお掛けだとか」

「あら珍しいこと。あなたはこれまで、誘ったって来ないと評判だったのに。饗宴には興味がないと言っていたのではなくて？」

「お酒やお喋りに興味があるわけじゃありませんよ」

「甘い誘惑を吐くときと同じくらい柔らかく、ルカートは言葉を紡ぐ。」

「僕、知っているんです。このお屋敷に新しく占師が来たってこと。今日あたり、彼女をお披露目するつもりなんじゃないかと思って。」

「彼女、少し前まで裏町にいた娘でしょう？ 僕、ちよつと興味があるんですよ」

「……相変わらず抜け目のないこと。でも、あんな娘のどこに興味があると言うの？」

「嫌だな、奥様。僕は、彼女の占いに興味があるだけです。彼女の占いはよく当たると評判だったそうじゃないですか。まあ……彼女がなかなかの美人だという噂も、聞くには聞いたけれど」

「冗談めかして言うルカートに、夫人は悦に入ったような、かつ高慢な笑みを作った。」

「あたくしに宝石で恩を売っておいて、その口で簡単に他の女への興味を語るなんて。なんて軽薄で恥知らずな人なのかしら」

「こんな僕では、奥様に嫌われてしまいますか？」

「背中から覗き込むルカートに、夫人は扇子を揺らし、声を立てて笑う。」

「困った子だこと。……よくてよ、主人にはあたくしから伝えておきますから」

「ありがとうございます、奥様」

「にこりと笑ってみせてから、ルカートはするりと身を翻し、宝石

の入った鞆を閉じた。

「では奥様、僕は一度出直して参ります」

「お茶を飲んで行く時間も無いのかしら？」

「その時間、奥様がさらに美しく着飾るために捧げますよ。……今宵を楽しみにしながらね」

からかうような夫人の誘いをあっさり受け流し、ルカートはさり気なく訊ねる。

「そつだ奥様、今夜の会場は二階の広間ですか？　広いバルコニーがご自慢の？」

「ええそつよ。でも、この時期は雨だから駄目ね。夜風に当たることもできないのだから」

「僕には雨でありがたいな。晴れていたら、旦那様を差し置いて奥様を誘い出すところですから」

自分の発言に呆れるとは、こういうことだろう。それでも、上流階級向けの外面を崩すことなく、ルカートはその場を辞した。

小走りに後をついてくるファルドは、まるで恐ろしいものでも見た後のように強張った顔をしている。素直に育ち過ぎた少年には異世界に迷い込んだほどの衝撃だったのかもしれない、そんな嘘臭い世界を渡り歩く自分を、少しばかり嫌悪するルカートだった。

再び馬車に乗り込み、二人は屋敷を後にする。

門を抜けるとき、ファルドが堪えきれずに振り返るのを、ルカートは止めなかった。

「……ラテイ」

「夜になれば会えるさ……必ず。僕もうまくやるから、ファルド君もしっかり頼むよ」

わざわざファルドを連れて来たのは、夜に動きやすくするためだ。少なくとも執事や夫人にファルドの存在を知らせておけば、ルカートが少年を連れていても不審とは思わないだろう。ファルドが夜の闇にまぎれて屋敷の庭をうろついても、せいぜい叱られる程度で済む。

ルカートは御者に屋敷の脇を通る道を指示し、わざと遠回りをさせた。

「ご覧、あれがバルコニーだよ。場所を覚えておくんだ」

「門を入ったら、右側だね。僕、少しくらい怖くても、ラティに会うためなら頑張るよ」

真顔のファルドに、ルカートは笑って頷く。そして、情報をくれたエルミナの親切と支払い証明書を持ち出した宿の主人の機転に感謝した。それらが一点で合致しなければ、こんなきっかけすら得られなかっただろう。幸運だった、と言ってもいい。

ただ、こんなことが他人に知れたらただでは済まないことも確かだ。

奇妙な緊張感と不思議な興奮を、ルカートは吐息することで誤魔化した。

夕刻過ぎ。

再びヨアールの屋敷を訪れたルカートは、ファルドの言葉をそのまま借りるなら「いつもよりしゃんとして」いて、「まるでお話の中の王子様みたい」なのだった。

僕は王子様の柄じゃないよ、と笑ったルカートだが、髪を整えていつもより上等で身綺麗な格好をしている彼は、いかにも良家の子息といった所作も忘れない。

広間　とは言っても、部屋全体を楽に見渡せるほどには狭い部屋は、中央のテーブルの上に等間隔で配置された燭台と、暖炉の炎があれば十分に明るい。昼間のように明るいというオイルランプのシャンデリアが裕福な貴族の間で流行っている事実をルカートは知っていたが、ヨアールが妻の宝石好きほどに室内の装飾に凝らないことが、今夜は有難い。

室内には、既に来客が揃っている。男女比はほぼ半々で、全員を

合わせてもせいぜい二、三十人程度だ。その中には、エルミナの父親の姿もある。

娘の新しい婚約者は将来有望な議員の卵だと、たつぷりの皮肉と自慢を体面とやらに上手に丸め込んで告げた彼に、ルカートは心からの祝福を述べた。ルカートは、彼がここに来ることを知っていた。そもそも、この催しがあることを示唆したのはエルミナの手を介して渡された彼自身の交友録なのだ。最初から、たとえ罵倒されても当然だと覚悟していた。

「ようこそ、皆さん。今宵はさぞ、楽しんでいただけましょうぞ」
口髭を撫で回しながら登場したヨアールは、機嫌よく客達を見回す。

その恰幅のいい体躯の後ろに続いて、宝石に埋もれた彼の夫人が、そして多くの客にとっては見知らぬ令嬢が現れた。彼女が新しい占師だと紹介された途端、広間に疎らに広がっていた人々が、環を狭めながら中央のテーブルに集まっていく。

「驚いたな……本物のお姫様だ」
深緑のドレスに身を包んだラティフィーネは、いつもは無造作に背中に流している赤毛を結い上げていた。金環の耳飾りはいつもと変わらず、それにむしろ安堵する。

ラティフィーネは落ち着いた様子で、周囲に視線を走らせた。そして、壁際に陣取っていたルカートを見て、一瞬だけ、しかし確かに薄く笑ったのだ。

「……さすがだね」
笑い出したい気分になって、ルカートは唇の先だけで呟いた。
どうやらお姫様は、自分を救出しようとする者の存在を、ちゃんと知っていたらしい。

口元の笑みを誤魔化すために、好みでもない酒を口に運ぶ。そうして表情を消してから、ルカートはまるで他の客達と変わらぬ顔をして、テーブルを囲む輪の中に加わった。

真っ白なテーブルクロスの上には、銀の燭台が置かれ、その周囲

には様々な料理や飲み物が置かれている。そして、テーブルの一端だけが異質な領域だった。

そこだけ正方形の黒い布が敷かれ、その上には銀盆の水鏡が用意されていたのだ。ラティフィーネは椅子に腰を下ろし、既に何やら占いを始めている。

「……西の町に、親戚がいるでしょう。近いうち、嬉しい便りが来るはずよ」

それは、ルカートの知らない初老の男性に対するものだ。

「雨期が明けるまで、新しい宝石を手に入れるのはよしたほうがいいわ。不幸を招くと出ているから」

これは、議長夫人に向けたもの。そして、娘の結婚を案じるエルミナの父親に対し、ラティフィーネは無表情で告げた。

「二人の相性は、いいはずだわ。将来子供が生まれたら、きっと幸せな家庭になるわね」

決して多弁でなく、しかも媚びることなく淡々と、占師は告げていく。

初めは疑わしそうに見ていた人でさえ、しばらくすれば身を乗り出して何事かを訊ねる始末だった。結局、生活を保証された金持ち連中は、楽しみに餓えている。彼等にとっては、贅沢な食事や酒よりも、一風変わった占師の存在のほうが有り難いのだ。彼女がいかにも本物めいた言葉を口にするのが、彼等にとっては重要なのだらう。裏を返せば、占いの真偽は二の次だということにもなる。

ルカートは、片手に持ったままのグラスを傾けて、口に馴染まない酒を飲み干した。そうして、この会の主催者であるヨアールの魂胆を、漠然と理解する。

若く美しい、しかも巷でも評判だった占師を手元に置いていることを、ヨアールはこの場で見せつけたいのだ。当然、この事実が噂となつて、都の上流階級の人々に間に流れるだらう。いずれ、そう遠くないうちに、領主の耳にも入るに違いない。それこそが、この男の狙いではないのか。

金持ちという人種の中には有能な占師を囲いたがる者がいるが、

この都の領主はその代表とも言える人物だという。ヨアールと領主の関係が最近よくないという噂が事実なら、この珍しい占師を差し出すことで、その修繕を囂ろうとしているのかもしれない。加えて、ラティフィーネが実は貴族出身の娘であることを明らかにすれば、彼女の価値はもっと上がるといふものだ。

自分で想像しておきながら、ルカートは呆れてしまった。しかし次の瞬間、意図せずしてラティフィーネと目が合い、浮かべた苦笑を慌てて消し去る。

「次は、あなたの番よ」

「え、僕？」

驚いたような声になったのは、演技ではなく、本当に驚いたからだった。

「あなたは、何か心配事を抱えている顔をしているもの」

「……光栄だな。ご指名いただけるとはなんて」

素知らぬふりで応じながら、ルカートはラティフィーネの大胆さに舌を巻いた。しかしすぐに、これが彼女の側から差し出された好機だと判断する。

「実は……大事な猫の行方を捜しているんだ。……急にいなくなっ
てしまつて、僕はここ数日行方を捜している」

神秘的な面持ちを繕つたルカートは、無難にラティフィーネに近寄ることにも成功した。

ラティフィーネは心得たように頷き、水鏡に手をかざす。

「あなたの探している猫は、迷子になってしまったみたいね。でも心配しなくてもよさそうだわ。近いうちに必ず、あなたの目の前に現れるはずよ」

そう言つたラティフィーネは、共犯者のような目をして、僅かに唇の端を持ち上げる。

「ただし……猫だからって、何も考えないわけじゃないの。どうすれば元の場所に帰れるだろうか、考えているはずよ」

「その猫が、かい？」

「そうよ。だから機会を窺っているはずだわ。今にきつと行動を起すから、あなたはそのとき、怒ったり驚いたりしては駄目よ」
当然のように告げ、ラティフィーネはそれ以上何も言わない。

周囲の客達は、この占師を変わり者だと判断したことだろう。しかし、ルカートはいたって真面目な顔をして頷くと、まるで貴婦人を相手にするように丁寧な礼の言葉を口にして、その場から外れた。猫の行方を真剣に心配する心優しい青年　もとい、その猫をこれから攫ってやろうと目論んでいるルカートは、ゆったりとバルコニーのほうへ足を向ける。

降り続く雨を見ているふりをして、窓に映った室内を見ると、ヨールを含め客達の全員はテーブルの周囲に集まっている。それを確認しながら、ルカートは外へ出るために取っ手に触れた。

ゆつくりとガラス扉を開くと、雨音と夜の空気が同時に入り込んでくる。バルコニーの床は斜めに降り注ぐ雨のせいですっかり濡れていたが、自慢できる広さは十分にあり、手摺も凝った造りだ。しかしもちろん、ルカートはそんなことに感心するために外へ出たのではない。

「……ファルド君」

眼下に嘯くと、暗闇の降りた植え込みの側で、応じるように小さな影が動く。雨よけのコートをすっぽりと被ったファルドである。

ルカートは無言で手招きすると、上着の内側に隠し持っていた細いロープの束を解き、一番近くの手摺を跨がせて、両端が階下に落ちるようにして垂らした。

気配で、ファルドが下に駆け寄ってくるのがわかる。それを確認して、ルカートは部屋に戻った。

「雨だというのに、濡れてしまうわ」

笑みを含んだ声の主は、出納長夫人である。

内心どきりとしたルカートは、こちらに歩み寄ってくる夫人とその取り巻き女性数人に対して、照れくさそうな笑みを浮かべること

で誤魔化した。

「屋根があるから平気だと思ったんですけど……今日は少し風があるので駄目ですね」

女性達は、ほほ、と声を立てて笑う。この女性達は皆、ルカートにとつては店の顧客でもあった。

「奥様方がこんなに並んでいらつしやると、僕はどなたのお相手をするべきか迷いますよ」

肩を竦めて、にっこり笑う。そうして、視線だけをちらりとテーブルのほうへ向けると、ラティフィーネはまるでその瞬間を待っていたかのように、突然、椅子から立ち上がった。

「……気持ちが乱れてしまったわ」

言いながら、彼女は水面から水晶の欠片を摘み上げると、いかにもそれが何かの意味のある動作のように、水鏡の水を空いたグラスに注いだのだった。

次に、ラティフィーネは商売道具を小脇に抱えたかと思うと、テーブルクロスに手を掛けた。そして突如、それを引き剥がそうとするように、渾身の力で引つ張りながらテーブルの端からルカートの居る窓側に向かって走ったのだ。

啞然としたのは、ルカートも他の客達も同様である。

悲鳴をあげたのは、誰が最初だっただろうか。

グラスが割れ、皿の落ちるけたたましい音が響く。燭台が次々と倒れ、床に転がった。

「火だ、火を消せ！」

誰かが怒鳴る。倒れたろうそくの炎の幾つかは、まだ生きている。その上に真っ白なテーブルクロスが落ち、不気味な明るさが布の下に生まれていた。

ルカートは、悲鳴をあげる女性達を押し退けるようにして壁際の花瓶を取り上げると、一気に床にぶちまけた。ついでに、足元のろうそくは足で踏みじじる。

直後、部屋には暗闇が降りた。

「なんてことを」

ルカートは、本気で困惑した。慌てふためくヨアールや客達ほどでないにしろ十分に驚かされて、思わずラティフィーネの心理状態を疑ったほどだ。

「早く！」

暗闇の中、鋭い小声と共に腕を引かれ、ルカートは我に返る。それがラティフィーネだとわかると、咄嗟に声を上げた。

「占師がいない！ そっちへ逃げたぞ！」

「灯りを持ってきなさい！」

呼応して叫んだのは、ヨアールのようだった。

室内は、騒然としている。誰かが廊下に飛び出したらしく、それを別の誰かが、占師が逃げたのだと叫ぶ。

ルカートはラティフィーネの腕を引くと、バルコニーに出た。

先ほど垂らしておいたロープを引き上げ、ファルドがちゃんと仕事をこなしていることを確認する。ロープの両端はきつく結ばれて手摺を通した巨大な輪状になっており、その先端には馬具のあぶみのように、鉄輪が取り付けられているのだった。

ルカートはまず自分が手摺を越えてから小さな輪に利き足を掛け、ラティフィーネが手摺を越えるのを手助けした。このときばかりは、ラティフィーネがルカートに抱きつくようにしなければならぬが、お互いそんなことを気にしている余裕もない。

「行くよ。しつかり捕まって」

右腕でラティフィーネの身体を抱き、左手で輪の両側 二本のロープを掴んだルカートは、バルコニーの床を蹴った。

二人の身体は落下し、振り子のように大きく揺れる。

「……っ！」

ルカートの左手が二本のロープの摩擦に強い痛みを訴え、ロープ自体も二人分の体重と落下の勢いに大きく軋む。

ラティフィーネが悲鳴をあげたりしなかったことは、褒められることだっただろう。

ルカートはラティフィーネを先に地面に降ろすと、自分も飛び降り、ポケットから取り出したナイフでロープの一端を切った。そうして片方を引くと、すべてのロープが落下して証拠はなくなるといふ計算だ。

茂みから飛び出したファルドは、落下したロープを急いで拾い集め、持参した鞆に押し込む。

「大丈夫かい？ ラティフィーネ」

「平気よ。あなたこそ、手に怪我をしたんじゃない？」

「いいさ、これくらい。……でも、きみって案外、無茶苦茶なことをするんだね」

「忠告してあげたじゃない。怒ったり驚いたりしてはいけないうつてあなたがきっかけを探すのに困らないように、わたしから動いてあげただけだわ」

あつさりと言つてのけたラティフィーネは、続いてとんでもないことを口にした。

「それよりも、このドレスを脱がせてくれない？」

「ええっ？」

「いいから、早く。わたし、慣れていないからうまく脱げないの」
言うなり、ラティフィーネは背を向ける。

「いいこと？ 占師は煙のように消えてしまうの。ドレスだけが残されるなんて奇怪な事件が広まれば、あの男はわたしの行方になんて興味をなくすわ。だから、急いで」

「……同じ脱がせるなら、もっと雰囲気のある状況がありがたいけれど」

軽口を叩きながらも、ルカートはほとんど手探りで、背中のリボンに手を掛ける。やがて下着姿になったラティフィーネは、ファルドが差し出した雨よけのコートを羽織った。

「さあファルド君、ここからはきみがお姫様を守るんだよ」

「うん！」

頷いたファルドは、ラティフィーネの手を取る。しかしラティフ

イーネのほうは、一旦その手を解いて、突然ルカートの首に抱きついたのだった。

頬に何かに触れ、それが、軽く押し当てられた唇だとルカートが判断するより前に、ラティフィーネは何事もなかったかのように身体を翻す。そして彼女は、飛び降りる前に放り投げていた占いで道具を拾い上げると、そのままファルドと駆け出した。

素っ気ないほどのそれが彼女なりの感謝の証だと、たっぷり数秒経過して気づく。

「……まったく……暗闇だったことを感謝しなくちゃね」

二人の背中を見送ったルカートは、片手を頬に当てたまま、雨を仰いで苦笑した。

「僕がこれしきのこと動揺するなんて……参ったよ」

ファルドは、片手に鞆を持ち、片手でラティフィーネの手を引いて走った。

ルカートに何度も言われている。馬車に乗るまでは成功とは言えないのだから、絶対に気を抜いてはいけない、と。それから、馬車まではきみがラティフィーネを守るんだよ、と。

馬車は、門を抜けた木陰に待たせてある。それはルカートが別途用意したものだ。

「鞆はわたしが持ったほうがいいんじゃない？」

途中、ラティフィーネはそう言ったが、ファルドは大丈夫だと応えた。

「じゃあ……手を離れたほうがいいわ。両手が塞がっていたら、暗くて危ないもの」

「いいの！」

心配するラティフィーネに、ファルドはきっぱりと言い切る。

「僕は男の子だもん。ラティは女の子でしょう？ 僕が頑張らない

といけないんだよ。ルカートが、そう言ってたんだ」

「そ……そう」

人の気配に、ファルドは慌てて立ち止まる。茂みの中にしゃがみ込んで、ラティフィーネを振り向いた。

「それに、ラティは僕の手を離さなかつたでしょう？」

「え？」

「ラティは最初に会ったとき……絶対に、僕の手を離さなかつたでしょう？　僕、ちゃんと覚えているんだ。僕、とても安心したんだよ。すごく、嬉しかったんだ」

「……ファルド、あんた……」

顔にかかる雨の雫を手の甲で拭って、ファルドは茂みを飛び出した。もちろん、ラティフィーネの手をしっかりと握り締めたまま。

素早く門を抜けると、馬車はひっそりと待っていた。御者台の男は、ルカートの家の使用人である。

臆病者だが信用がおけるとルカートに称されるこの男は、二人が馬車に乗り込むなり、慌てたようにして馬に鞭を打った。

馬車は、雨降る夜の闇に溶けていく。大通りに紛れてしまえば、中に乗っているのがどこの誰かなど気に留められることもない。

「……ありがとう、ファルド」

馬車が走り始めると、ラティフィーネはそう言ってファルドの頭を抱き寄せた。

「うん」

につこり笑って、ファルドはラティフィーネに抱きつく。

本当はとっても怖かったということ、まだ心臓がどきどきしていること、ラティフィーネがいなくなつてとても悲しかったこと、でもルカートが居てくれてよかったということ、話したいことは沢山あるのに、どれから話せばいいのかちつともわからない。

「僕……ラティのこと、大好きだよ！」

ただ、それだけは間違えようがなくて　全部まとめたら、きつとそういうことになりそうで、ファルドは自信満々に宣言する。

ラティフィーネは、何も答えなかった。

それでも、ファルドはわかっている。ラティフィーネは、恥ずかしがり屋なのだ。確かなものが言葉だけではないと、ファルドは知っている。

なぜなら、黙ってぎゅっと抱きしめてくれる腕も、本物だと知っているから。

ヨアールの屋敷では、ドレスを手に立ち尽くすルカートが発見されていた。

後の噂では、安心して雨に濡れる彼は何かに取り憑かれたようでもあり、ある夫人によれば、室内に連れ戻された彼の整った顔は色を失い、唇は怯えたように震えていたという。

「……消えてしまったんです。僕は……彼女を見つけて、確かに、この腕で捕まえたと思ったのに……煙のように、消えてしまったんです……」

眞実は、夜の雨に溶けたまま。

やがて雨期が明ける頃、噂は青空に吸い込まれ、都は華やかな祭りの季節を迎える。

エピソード

空は、遠く晴れ渡っていた。

どこまでも続く澄みきつた深い青空と一切の汚れを洗い落としたような白い雲が、見上げる者すべての目に眩しい。雨期が明けるとを待ち侘びていた人々は戸外へ飛び出し、降り注ぐ陽光を全身に浴びる。都の外れを流れる運河には積荷を乗せた船が押し寄せ、市場は活気づき、都は、もつとも華やかな季節の中にあつた。

都のあちこちで盛大な祭りが催され、このときばかりは表町よりも裏町のほうが、より華やかになる。女達は雨期の間編んだレースのショールを羽織り、とくに少女達は軽やかに舞うように、意中の若者と戯れ、踊るのだ。

運河に面した広場には、どこからともなく音楽が流れている。石畳の敷き詰められたその広場の片隅に、三人は並んで立っていた。「僕は、この祭りの時期が嫌いじゃないよ。ここを『幸福の都』と呼ぶに相応しいと、唯一思えるときだから」

広場を囲む建物の壁に凭れたまま、ルカートが独り言のように呟いた。

ラティフィーネはちらりとそのほうを見遣ってから、頷くでも否定するでもなく、再び賑やかな人通りに注目する。

「わあ、また船が来たよ。あそこ、見て。お花がたくさん飾ってある！」

ファルドは、いつもながら元気だ。好奇心が旺盛で、色々なものに目を奪われては、歓声や驚きの声を上げているのだった。

「……こんな所まで出てきてよかったの？」

「ファルド君は楽しそうだけど、きみは、こんな賑やかな場所は嫌いだったかい？」

ラティフィーネの問い掛けに、ルカートはわざとらしく伸びをする。

「そんなことを言ってるんじゃないわよ」

「大丈夫、きみが気にするようなことじゃないさ。僕は、うまくや
つてる。不可解な事件を目の当たりにしたせいで精神的に大きな傷
を負ってしまった僕は、家族の愛情に見守られながら、順調に回復
中だよ。こうして、一人で出歩く許可も下りたしさ」

悪戯っぽく片目を瞑って、ルカートは笑った。

そう。あの日以来、ルカートはほとんど完璧なまでに、脆い
心を抱えた青年を演じきっているのだった。彼の父は息子を心配し
て医者に見せたり、気晴らしに芝居見物などを持ちかけたりしてい
るらしい。

ラティフィーネとファルドといえば、ルカートが手配していた、
この都の外れにある宿屋に身を潜めて過ごしていた。老夫婦が営ん
でいる宿で、耳は遠いが親切な人達である。ルカートとのやりとり
はほとんどが手紙で、直接三人が会うのは久しぶりのことだった。

「……珍しくも母が僕に話しかけてきたりね、姉は用事もないのに
僕の部屋に顔を出したり。まあ、医者が僕をなるべく不安にさせな
いように言っただせいなんだけど……正直言つと、驚いているよ。今
更あれは芝居だったなんて、とても言い出せないね。僕自身、自分
が役者になれるんじゃないかと思っっているくらいだ」

「詐欺師、の間違いじゃないの？」

「酷いなあ。きみのための大芝居だったっていうのに」

ラティフィーネの容赦ない台詞にも、ルカートはまったくこたえ
ていない。ファルドに問われて、新しい船の積荷の行き先を答えて
いる。

ルカートが、初めて出会った頃よりも優しい顔をするが増え
たことに、ラティフィーネは気づいていた。そしてファルドは、以
前よりも頼もしくなったような気がする。これまでと同じように、
じやれるように抱きついてくることはあるが、ときどき驚くほどし
っかりしたことを口にするようにもなった。「もう暗いのは怖くな
い」と、それまでのように同じベッドで寝ないことを宣言されたと

き、ラティフィーネのほうが寂しく感じたことを、きつと知らないだろう。もちろん、そんなことは口が裂けても言えないが。

「きみには、感謝しなくちゃいけないと思っっているんだ」

突然、ルカートがそんなことを言った。

ラティフィーネが見上げると、彼は青い空を仰ぎながら、穏やかに微笑んでいた。派手さはなく、どちらかというと弱い顔だが、それはラティフィーネが一番好きな彼の顔でもある。

「幸せは、必ずしも他人との比較の上には存在しない。僕は僕以外ではありえないんだって…… ようやく気づき始めたんだよ」

「……わたしは何もしていないわ。それは、あなた自身が感じたことよ」

「だけど、きつかけをくれたのはきみさ。僕はお陰で、幸福の都の入り口に立つことができたんだから。きみに出会わなければ、僕はきつと後悔していたよ。五年後か十年後か…… それはわからないけれど」

「買い被りだわ」

それだけ言っつて、ラティフィーネは再び人込みへと視線を投げた。素っ気なくしてしまったのには、理由がある。実は、眩しかったのだ。ルカートの肩越しに見える空の青さが、いや、もしかしたら彼自身の柔らかさや、どこか満ち足りた安らぎといったものが。そして、彼に少し嫉妬したのかもしれない。

ルカートは一足先に、幸福の都に辿り着こうとしている。それが悔しい。

「……わたし達、明日にはこの都を立つことにしたの」

「うん」

「わたし、一度実家に帰るつもりよ。でもそれは、貴族の娘に戻るためじゃないわ」

「そう」

「どちらも、ルカートの返事は短かった。

「ルカートは……僕達がいなくなったら寂しい？」

ファルドの無邪気かつ真面目な質問に、初めて彼はにっこりと満面の笑みを浮かべる。

「そりゃあ、寂しいさ。僕も、できることならきみ達と一緒にいきたいよ」

「一緒に来ることができたらいいのにな。そうしたら、きつと楽しいのに。だって僕、ルカートのこと好きだもの」

「僕も、ファルド君のことが好きだよ。だけどね、僕には僕の仕事があるんだ。この都でしかできない、僕の仕事がね」

ファルドは俯いて、それ以上は言わなかった。口に出した言葉は本心だろうが、それが思い通りにはならないことを、ちゃんと知っている。だから、言葉ではうまく表現できないその感情をどう伝えればいいのかわからずに、黙るしかないのだ。

ルカートはそんなファルドの黒髪をくしゃくしゃに撫でて、それからラティフィーネを見た。

「今更だけど……僕は、この都を嫌いじゃないと思いつている。だからこそ、この生活に背を向けることはできないんだ……少なくとも今は。両親や姉達にとって、よい息子や弟でありたいと、今はそう思うよ。ラティフィーネ、きみが実家を目指すのも、きみがきみ自身を見直すためだろう？　違うかい？」

「……わたしも、やつと気づいただけよ」
余裕の素振りのルカートが少しだけ癩で、でもそれを気取られまいと、ラティフィーネは髪を掻き上げる。

「わたしがわたしらしくなくときに得られる幸せなんて、それは本当の幸せじゃないわ。だからもう一度、わたし自身の選んだ道を見極めたいの。逃げ出したまま旅を続けるのじゃなく、けじめをつけたいだけよ」

「もしも、きみのご両親が本当にきみを探しているとしたら……？」
「わたしはもう、ご令嬢とやらには戻れないもの。それに、両親はわたしをあてにするほど、形振り構わない人達じゃないと思ってるわ」

ルカートはなぜだか楽しそうに笑って、それから思いついたようにファルドの頬を突付いた。

「ねえファルド君、きみはとってもいい子だし、おまけに強い子なんだから、簡単に泣いたりしちゃ駄目だよ」

「僕、泣かないよ！」

意地悪く笑うルカーートの胸を両手で叩きながら、ファルドは頬を膨らませる。

「僕、ちゃんとラティを守るよ。僕は弱虫じゃないんだから！ 僕がいたら安心だって、ラティも言ったもん」

「そう、それは頼もしいね。じゃあ、この次に会うときは、ファルド君は今よりもずっと立派な男の子になっているに違いないわけだ」
含みのある台詞を口にして、ルカートは器用に片目をつむった。

ちようど、軽やかな曲を奏でながら、列を組んだ音楽隊が広場の脇を横切っていった。ファルドはたちまち歓声を上げてそのほうへ駆け出し、広場の半分ほど行ってから、二人を振り返って大きく手を振る。

「……二、三年くらいなら、僕は待てる気がするんだけど」

愛想よくファルドに片手を振って応じながら、ルカートがそんなことを言った。

「都は薄情な所さ。噂なんていうものは、新しい話題があればすぐに移ってしまうものだよ。きみがこの都にいたっていう事実も、いつの間にか消えてしまうんだ。でも、そうしたら……きみは、またこの都に戻ってきてくれるかな」

ラティフィーネは、咄嗟にどう返答していいものかわからず、表面上では眉根を寄せる。すると、ルカートは珍しく困ったような笑みを浮かべ、やがてそれを真顔に変えた。

「僕は、素っ気なくて愛想がないきみも、思ったよりずっと行動力のあるきみも、実は照れ屋なきみも、丸ごと魅力的だと思う。つまり……きみを好きになってしまった、と言ったら、理解してもらえないのかな？」

「……都は薄情な所なんでしょう？ あなたがわたしやファルドのことを忘れないと、どうして言い切れるの？」

「僕は、恋の力を偉大だと信じているからさ」

さらりと断言して、ルカートは例の穏やかな微笑を浮かべる。

「きみは馬鹿なことだつて呆れるだろうけど……僕は、想像しているんだ。将来、もしも僕達に子供が生まれたら、ファルド君みたいな子だといい、なんてね。僕達の周りに幸福の環が広がって……そうしたら、いつか幸福の都が実現するかもしれない」

「壮大な計画つてやつだわね」

「そうさ。その、壮大な計画を実現させるためにも、きみが必要なんだよ。……そもそも、僕達みたいな未完成な寂しがり屋は、お互いが必要とするものなんだ。僕の生涯を賭けてもいい。僕達の恋は次に出会ったときに、改めて始まると確信しているよ」

どこからそんな自信が湧いてくるのか、ルカートはまったく平然として、言葉には淀みがない。

仮にも占師相手に未来のことを宣言するとは、一步間違えば、ただの妄想癖の変人である。しかしそれは、間違えればという前提があるからで、占師の見解と一致した場合には、彼は素晴らしい直感の持ち主ということだ。

ラティフィーネは呆れながらも感心して、ついに笑ってしまった。「あなたつて、占師の素質もあつたのね」

笑いながらそれだけ言うと、ラティフィーネは右耳の金環を外した。そして、完全に驚いた顔をしているルカートの目の前に、それを摘んで差し出す。

「わたしはこれを賭けることにするわ」

「え……と……？」

「これは、先代から受け継いでいる、わたしの一番大事な物よ。あなたに預けておくわ。失くしたりしたら容赦しないから」

ルカートはそれを両手で受け取ると、まじまじとラティフィーネを見つめた後で、伏せ目がちに微笑んだ。

「ラテイ、ルカートっ。ねえ見て、音楽隊がこっちに来るよ！」

広場の中央から、ファルドが飛び跳ねながら二人を手招きする。

広場の脇を通り過ぎた一隊は、船着場の行き止まりで向きを変え、今度は広場の中央を目指してこちらに向かっているのだった。

「お嬢さん、僕と踊ってくれませんか？」

ルカートが、気取った動作で片膝を折りながら、右手を差し出す。
「わたし、踊りなんて……」

「構わないさ。それにほら、ファルド君が待ってる」

言うなり、ルカートはラテイフィーネの手を取った。

軽快な音楽が、徐々に大きくなっていく。

ラテイフィーネは、広場の中央に向って手を引かれながら、暖かな陽の光を全身に浴びるのを感じた。

幸福の都の入り口は、すぐそこにある、と。確かにそう思った。

人々の歓声が、いよいよ高まる。

男女は手を取り合って、石畳の上を舞う。

ラテイフィーネとルカートも、その華やかな波に飛び込んでいくのだった。

幸福の都。

それは、東の果ての、深い森を抜けたところにあるという。また、西の洞窟の奥に広がっているのだともいう。南の海の底にあるのかもしれないし、北の氷山がそれなのかもしれない。

どこにでもありそうで、決してどこにでもないもの。
けれどそれは、遥か彼方に存在するとはかぎらない。

幸福の都は、いつも。

了

エピローグ（後書き）

最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。
誰もが「幸福の都」にたどり着けますように……。もしよろしければ、感想などいただくと嬉しいです。

叶 響希

「Chartrreuse green」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3378i/>

遙かなる幸福の都

2010年10月8日10時57分発行